
満洲の記憶

第7号

満洲瓦斯株式会社人事課長の満洲追憶

——奥村松平『洪熙の残照』解説——

..... 菅野智博、甲賀真広

洪熙の残照（1） 執筆：奥村松平

整理・編集：奥村武彦、上田裕子、甲賀真広、今井就稔

錦州と旅順の思い出 執筆：小坂宣雄

解題：大野絢也 編集：尹国花

文献紹介 『「満洲」に渡った朝鮮人たち

——写真でたどる記憶と痕跡——』

..... 飯倉江里衣

寄贈資料目録 / 活動記録 / おしらせ

「満洲の記憶」研究会

2020年12月

満洲瓦斯株式会社人事課長の満洲追憶

——奥村松平『洪熙の残照』解説——

菅野智博、甲賀真広

はじめに

『洪熙の残照』は、故奥村松平氏（以下、松平氏）によって戦後に書かれた手記である。松平氏は、1938年に満洲に渡り、南満洲瓦斯株式会社（以下、南満洲瓦斯）や満洲瓦斯株式会社（以下、満洲瓦斯）の総務部人事課に勤務した。本手記には、松平氏が満洲での仕事や家族生活、敗戦から日本に引揚げるまでの様々な体験が詳細に記録されている。本稿では、資料の掲載に至った経緯について紹介した上で、手記の内容及びその意義について解説する。

1 掲載経緯

『洪熙の残照』は、松平氏のご子息である奥村武彦氏（以下、武彦氏）によって、「満洲の記憶」研究会（以下、本研究会）に提供された。武彦氏によれば、手記は松平氏の遺品を整理する際に発見した

ものである。武彦氏は、元同僚であった上田裕子氏から本研究会の活動を知った⁽¹⁾。そこで手記を今後の研究に供したいとの思いから、上田氏を通してインターネット上で本研究会に連絡をくださった。武彦氏と本研究会を取りつないでいただいた上田氏もまた、1943年に新京で出生された引揚者である⁽²⁾。このような経緯から、本資料を掲載するに至った。

『洪熙の残照』は、大学ノート5冊にボールペンで書かれており、全部で約30万字からなる。表題の「洪熙の残照」は、大学ノート1冊目の表紙に薄鉛筆で書かれている。なお、「洪熙」はおそらく「洪熙街」（現在、長春市紅旗街）、すなわち新京時代の社宅附近の地名からとったと思われる（地図、写真1）。手記はいつ頃、どのような背景や目的で書かれたのかは、松平氏の家族にもわかっておらず、発見した際に家族全員が驚いたという。手記の中に「40年以上も経過」という表現が複数回みられたことから、1980年代に書



地図 新京市街図（1941年） 地図上の○印は社宅周辺、□印は満洲瓦斯周辺。

出典：武田英克『満州脱出——満洲中央銀行幹部の体験』（中央公論社、1985）。

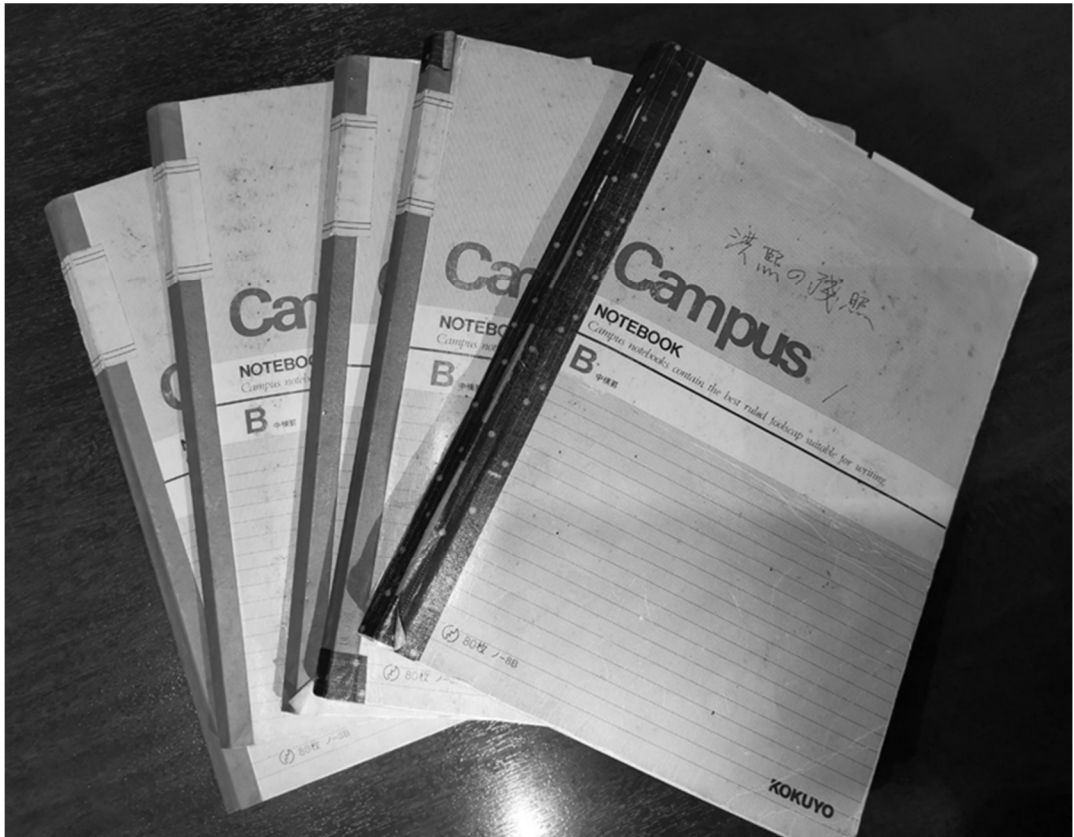


写真1 『洪熙の残照』

かれたものであると推測できる。また、手記が非常に詳細に記述されていることから、日記やメモなどの史料を参照した可能性もあるが、武彦氏の話によれば特にそのようなモノは確認できていないという。

2 奥村松平と満洲瓦斯株式会社

手記の内容及びその史料的価値を述べる前に、まず執筆者である松平氏の略歴とその勤務先である南満洲瓦斯と満洲瓦

スについて簡単に紹介する。

(1) 奥村松平の略歴

奥村家は代々、滋賀県彦根市で陶磁器小売卸商「まからずや」を経営し、松平氏（幼名は、竹蔵）はその4代目として1907年に生まれた。1932年に神戸高等商業学校を卒業し、その後は一時的に家業を継いだが、1938年に関東州大連市に渡り、南満洲瓦斯に入社した。1936年、神戸高等商業学校時代の下宿先の娘であった奥村正子氏（1920～2000年）と結婚し



写真2 神戸高商時代の松平氏（後列右から1番目）と正子氏（前列左から3番目）



写真3 武彦氏と正子氏（奉天、1940年9月）

た（写真2）。武彦氏によれば、松平氏は正子氏の女学校卒業を待ち、卒業後にすぐに結婚したという。そして、松平氏と正子氏の間には、長女の廸子氏（1937年～）、長男の武彦氏（1940年～）、次女の玲子氏（1942年～）が生まれている（写真3）。

1938年に南満洲瓦斯に入社してから大連（1938年～）、奉天（1939年～）、大連（1941年～）などを経て、1944年に満洲瓦斯新京本社の総務部人事課長として赴任した。敗戦後、約1年間の新京避難生活を経て、1946年9月に一家5人で日本に引揚げた。引揚げ後、彦根市で家業を継ぎ、また人権擁護委員、大津地方裁判所・家庭裁判所調停委員などをも約30年間にわたり務めた。さらに、彦根市長の井伊直愛⁽³⁾の相談相手として、彦根城の有料公園化や彦根城博物館開設などにも携わったという。そして、1994年に87歳で他界した⁽⁴⁾。

（2）南満洲瓦斯株式会社と満洲瓦斯株式会社

次は、松平氏が勤務していた南満洲瓦斯と満洲瓦斯について概観しよう⁽⁵⁾。

満洲におけるガス事業は南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）の直轄事業として1910年3月に開始された。その後、事業が順調に拡大され、1920年半ばには満洲全域の主要都市でガス供給が行われるま

でになった。満鉄の付帯事業として開始されたガス事業が着実に事業基盤を確立し、満鉄はその分離独立を決定する。そして、1925年資本金1,000万円で大連に設立されたのが南満洲瓦斯（満鉄の全額出資）である。

その後、関東軍によるガス事業の統制や1937年11月の「瓦斯事業法」の公布、さらには満鉄附属地行政権の「満洲国」（以下、括弧省略）委譲などにより、南満洲瓦斯は満洲国内のガス事業を一括して分離し、1937年11月に資本金1,000万円の準特殊会社として満洲瓦斯を設立した。以降、南満洲瓦斯は関東州、満洲瓦斯は満洲国内のガス事業をそれぞれ経営するという体制が形成された。しかし、満洲瓦斯は、南満洲瓦斯の全額出資子会社であり、両社は実質的に一体であった。さらに、南満洲瓦斯の株式の4分の3が満鉄に所有されていたことを考えれば、満洲におけるガス事業は満鉄の関連事業として展開されたといえる。

3 概要とその史料的价值

（1）手記の概要

まず手記全体の内容を簡単に整理する（写真4）。

手記には大見出しがなく、松平氏によって19個の小見出しがつけられている。その内容をみると、敗戦前と敗戦後の2

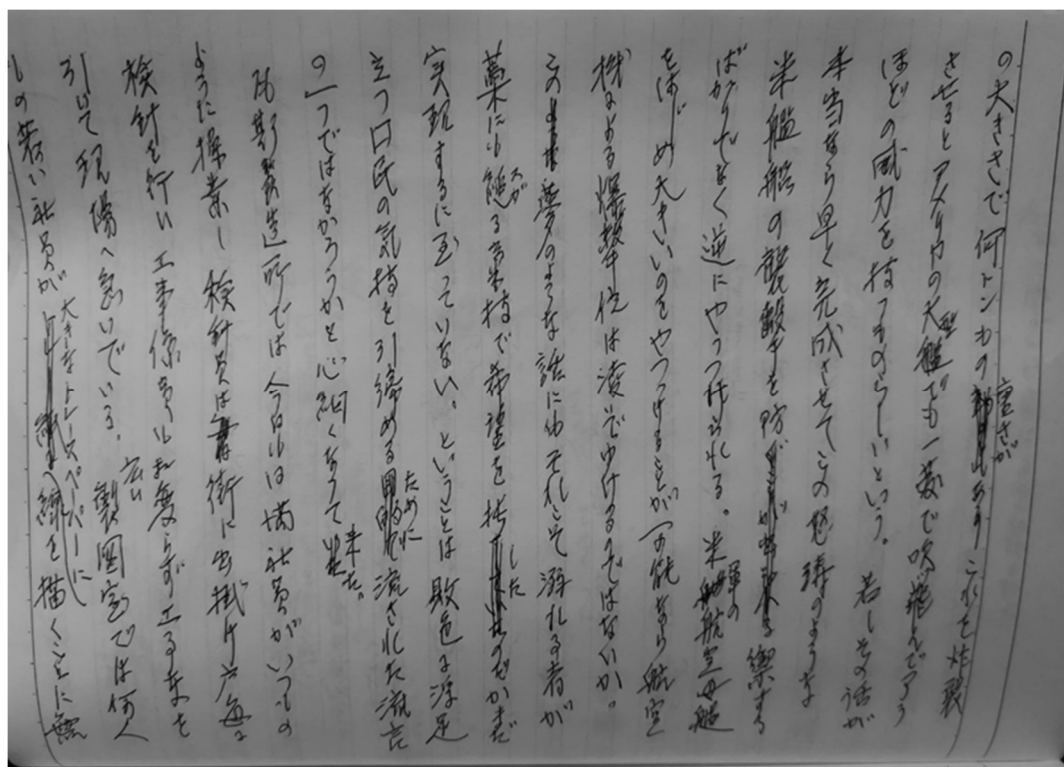


写真4 『洪熙の残照』のある1ページ

部分から構成されている。敗戦前の部分には、「本社移駐」、「総務部人事課」、「給与統制令」、「冬の首都」、「教育招集」などが含まれており、約7万字の分量がある。なお、この部分の内容については「(3) 今号の掲載分」で詳細に述べる。

敗戦後の部分は、さらに敗戦前後の状況と安東避難(約5万字)、ソ連支配下新京生活(約11万字)、ソ連撤退後の新京生活(約4.5万字)、引揚げ前後(2.5万字)に分けることができ、合計約23万字である。この部分の小見出しには、「安東へ」「占領下の首都」「団交から操業停止まで」「ソ連将校強盗と十万円送金事件」などが含まれている。ここでは、敗戦直

後の様子や安東への避難、新京に戻ってからの仕事、中国人雇員との団体交渉、日本人がソ連兵から受ける様々な被害、家族の新京避難生活、ソ連撤退後の避難生活、発疹チフスを罹患したこと、2度の「収監」と「人民裁判」、引揚げ前後の様子などが記されている。この部分からは、満洲瓦斯の敗戦後の状況や日本人の避難生活が窺える。

(2) 史料的价值

次に、手記の史料的价值について以下の2点を指摘する。

第1は、満洲瓦斯の総務部人事課長によって書かれたという点である。満洲に

おけるインフラ整備については既に多くの研究で明らかにされているが、ガス事業についてはまだ検討の余地が残されている。本手記は満洲瓦斯の総務部人事課長によって書かれていることから、これまでの研究でほとんど検討されていない日本内地での社員採用や給与改定、敗戦後における満洲のガス事業、戦後中国人雇員との団体交渉、ソ連兵との交渉などを知ることができる。また興味深いことに、本手記では、関連する人名やできごとが具体的に詳しく記されている。これは、松平氏が人事部長であったという仕事柄とも関係していよう。満洲のガス事業に関する史料が必ずしも十分にあるとはいえない中、本手記は満洲瓦斯や満洲におけるガス事業を分析する上で貴重な手がかりになりうるだろう。

第2は、敗戦後の日本人の生活状況を垣間みることができるという点である。敗戦に伴って、現地日本人の生活環境は大きく変化した。満洲引揚者のほとんどが、満蒙開拓民の過酷な逃避行やソ連兵による強奪・暴行、引揚げまでの厳しい避難生活などを記憶している。しかし、現地での避難生活の実際がどのようなものであったのかについては、かならずしも十分にはわかっていない。本手記も満洲引揚者の語りと類似する部分は多いが、1つ1つのできごとがより詳細に記されている点に特徴がある。例えば、松平氏は戦後新京で2回「収監」されている、その1回目については約1.8万字、2回

目についても約1.8万字で回想している。本手記と他の回想録や史料と比較対照することで、敗戦後の日本人の生活状況を理解することにつながると考える。

(3) 今号の掲載分

今号に掲載するのは敗戦前の部分であり、主に松平氏が大連から満洲瓦斯の新京本社に転勤したこと、転勤後の新京生活や仕事、大連にいる家族の呼び寄せ、奉天や大連時代の思い出、敗戦前に教育招集されたことなどが含まれている。ここでは、執筆者の関心に惹きつけて、以下の2つの興味深い点を指摘しておく(写真5)。

1つは、南満洲瓦斯及び満洲瓦斯の新卒社員の採用についてである。松平氏によれば、新入社員の採用は人事係の仕事であり、毎年10月から1ヶ月ほど在勤社員の出身校を中心に回っていた。地域別にみると、「九州が最も多く、次いで中国地方や四国それに中部特に長野県及東北地方を主たる訪問先」であった。一方、東京、大阪、名古屋等の大都市周辺には「大小企業多数存在し、それらへの就職者が多く、関東州満洲の企業では新卒者の採用も見込薄」であったため、あまり行かなかったという。さらに、戦況が悪化すると、日本では就職を統制する法令が次々と発令され、満洲国や関東州の企業にも影響が及んだ。希望採用数及び学校名などを申請書に記入し、満洲国総務庁に提出した上、「結果は文部省の割当決

定を見た上、指定校へ照会して生徒学生本人の意思を確認してもらったのち採用通知を出す」という方式に変化した。そのため、1945年の新卒は技術系専門校から2名、中卒者1名のみであったという。

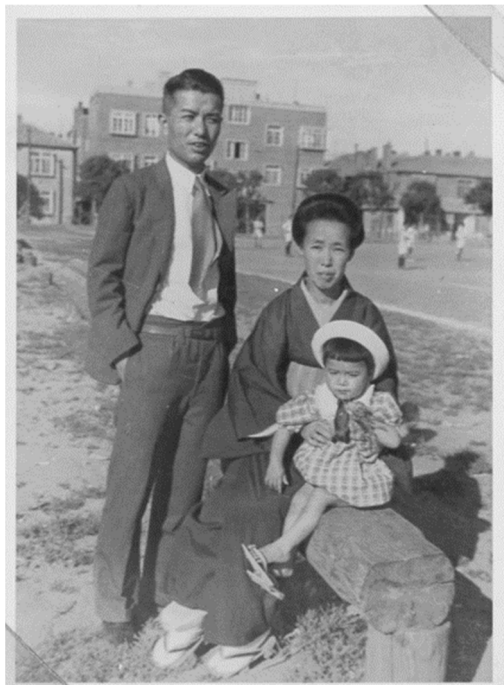


写真5 松平氏の母親が1939年に彦根から大連に来訪した際の写真（左から松平氏、松平氏の母親、廸子氏）。

もう1つは、給与体制についてである。満洲瓦斯の給与体制について松平氏は「日本人に就いては、職員として円単位の月額が支給されていたが、満人は全て雇員であり給与は日給であり、銭単位で計算される差があり、全てが肉体労働者であるため程度の差は已むを得ないものとしても、その待遇の格差は余りにも歴

然として存在し、五族協和が唯の看板だけに過ぎないもの」であったと回想している。また、松平氏が満洲瓦斯新京本社に転勤して間もない頃、当社の給与改定に関わったことを記している。氏によれば、1944年3月に「満洲国総務庁長官名で給与統制令が発令」され、「年々増嵩する新入社員の初任給上昇に見合うように、在籍社員全部の給与をその年齢、在籍年数にあわせ改善するよう基準が示されたもので」あった。それを受けて、人事部で案を策定し、社長決裁の後に実施されたという。

従来の研究では、南満洲瓦斯及び満洲瓦斯の設立背景や経営状況が明らかにされ、両社が事実上一体の企業であったことが指摘されてきた⁽⁶⁾。上述の2点をはじめ、松平氏の回想からは満洲瓦斯の別の側面、すなわち新卒採用や給与体制、会社内の状況、社員生活、中国人労務者の労働環境などが窺える。このことは、一満洲企業史の実態の解明につながると考えられる。

おわりに

本稿では、松平氏によって書かれた『洪熙の残照』の内容を紹介した上で、その史料価値について簡単に指摘した。

本手記は戦後長い時間が経過してから書かれたものとはいえ、その内容は極めて詳細かつ重厚である。本手記からは、従来の研究で明らかにされていない



写真6 奥村家の家族写真（1943年）

敗戦前後の満洲瓦斯の実態や日本人の避難生活などを知ることができる。これらを手がかりに、さらに他の史料を相互対照することで、より多様な満洲像を解明することにつながる。日記や書翰、公文書などの一次史料とは性質が異なるが、満洲記憶のあり方を考える上でも重要な資料であるといえよう。

最後になるが、貴重な手記を本研究に寄贈及び掲載承諾をいただいた奥村武彦氏に衷心の謝意を示したい。また、武彦氏と本研究会をとりつないでくださった上田裕子氏にも心から御礼を申し上げる。また、お二方には手記の翻刻にもご助力

をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい（写真6）。

脚注

（1）奥村武彦氏（1963年入社）と上田裕子氏（1965年入社）は伊藤忠商事株式会社の同僚であった。武彦氏と上田氏の話によれば、会社の同僚には満洲引揚者が多くおり、知る限りで2人が所属していた機械部門のみでも10数人いたという。武彦氏と上田氏は、2019年10月に元同僚の故竹山克則氏（1942年、満洲綏化県生まれ）、片柳静子氏と共に中国東北三省を旅行した。その旅行記は、故竹山氏によって冊子「中国東北三省・旧満州の面影、歴史に向き合う旅——

2019年10月16日～10月23日」としてまとめられている。

(2) 上田氏の父親は土地開発公社で勤務し、上田氏の叔父は「満洲国」興農部で勤務し、大同学院で教育を受けたという。そして、上田氏の母親マリ氏が執筆された回想録『喜寿記念出版——あしたも元気で』（私家版、1997年）も本研究会に寄贈してくださった。

(3) 井伊直愛（1910—1993年）、滋賀県で生まれ、旧彦根藩主井伊家の第16代当主であり、井伊直弼の曾孫である。東京帝国大学大学院を修了し、滋賀大学の講師などを歴任してから、1953年から1989年まで連続9期にわたって彦根市長を務めた。また、1961年には農学博士号を取得した。

(4) 奥村松平氏の略歴は、武彦氏によって作成された「奥村松平略歴」及び2020年6月11日に実施したインタビューをもとにしている。

(5) 南満洲瓦斯株式会社と満洲瓦斯株式会社の概況については、須永徳武「ガス事業」貴志俊彦、松重充浩、松村史紀編『20世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年を参照した。より詳細な状況については、鈴木邦夫編著『満洲企業史研究』日本経済評論社、2007年、420-436頁を参照。他には、「南満洲瓦斯株式会社・満洲瓦斯

株式会社」松下傳吉著、中外産業調査会編『近代日本経済人大系——第10巻化学工業篇（下）』（復刻版）日本図書センター、2003年、57-67頁などもある。

(6) 鈴木前掲『満洲企業史研究』420-436頁。

主要参考文献

貴志俊彦、松重充浩、松村史紀編『20世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年。

鈴木邦夫編著『満洲企業史研究』日本経済評論社、2007年。

柴田善雅『満洲における政府系企業集団』日本経済評論社、2017年。

須永徳武「満洲の化学工業（上）」『立教経済学研究』第59巻第4号、2006年。

須永徳武「満洲の化学工業（下）」『立教経済学研究』第60巻第4号、2007年。

須永徳武「台湾と満洲の企業構成」『立教経済学研究』第65巻第4号、2012年。

武田英克『満洲脱出——満洲中央銀行幹部の体験』中央公論社、1985年。

松下傳吉著、中外産業調査会編『近代日本経済人大系——第10巻化学工業篇（下）』（復刻版）日本図書センター、2003年。

洪熙の残照（1）

執筆：奥村松平

整理・編集：奥村武彦、上田裕子、甲賀真広、今井就稔

凡例

- ・資料の中にある各見出しは執筆者がつけたものである。
- ・本号に掲載するのは敗戦前の部分であり、それ以降の部分は次号以降に掲載予定である。
- ・旧字体や異体字等は、資料の性質を考え原文のままにし、明らかな誤字と思われる箇所は訂正して掲載した。
- ・資料の中にある〇〇や××は原文に従ってそのままにし、判読できない文字は＝とした。

本文

本社の移駐

昭和二十年八月一日、私は首都新京での二度目の暑い夏を迎えていた。去年八月大連から連れてきた妻正子と廸子ら子供三人の家族を新京の南端の撫松路の新築住宅へ入居してからやがて満一年になろうとしていた。

その頃に大東亜戦争の戦局は日々刻々に我が軍に厳しく次第に不利に傾きつつ

あり、二十年二月には米軍機百機の激しい無差別爆撃によって、東京日本橋方面、本所方面も大きな被害を蒙ったのをはじめ三月に入ってから名古屋、大阪及神戸も度重なる空襲のため壊滅的打撃をうけたらしい様子、又硫黄島の日本軍は激戦の末玉砕し加え米軍の沖縄島上陸など相つぐ悲報は正に目を覆うばかり、愈々本土決戦已むなしの噂が聞えるに至り、戦局は遂に挽回の目途もつかぬようになって

て了っていた。

神戸の岳父、母、和さん、成浩は神戸に危険の迫るを察知して、早くに広島県豊田郡大乘村高崎へ疎開するとの通知があったので、兎に角身の安全は確保されたものと安心していった。又、彦根は地方の小都市なのでまさかの事もあるまいと多寡をくくっていたが、戦局の進展に伴いどんなになるやら見当もつかぬ。その上どうしているやら、何の便りもないままなので、判断の仕様もなく、又、仮に具体的な連絡があったとしても遠く離れている為、手の施しようもない有様。愈々大変なことになるかと心配するだけで何の思案も尽くしようがなく、ままよ、ここまで来たら一蓮托生、運を天に委す外に道なしと、却って度胸が座ったようなわけであった。

丁度一年半前の昭和十九年二月十九日、東京で日本橋方面が空襲に曝されたその日、私は家族を大連に残したまま首都新京に着任し、後藤支店長らの出迎えを受けたあと、興安大路の独身寮「興安寮」に案内され、その二階の畳の間を暫しの仮住いとして、落着いたのであった。この度の新京転勤は本社機構を大連から新京へ移すとの会社の方針の大転換に伴うものであった。

満州に於ける石炭瓦斯乾事業は、明治四十二年満州鉄道株式会社の大連瓦斯作業所を嚆矢とし、後に満鉄の傍系会社として常盤橋角のビルに本社を置く南満州瓦斯株式会社が、分離し独立採算制の経

営を創始したのに始まる。その後、次第に事業網を拡大、奉天、長春、哈尔滨、鞍山、安東及錦州に支店を設置、全満に亘り一貫して瓦斯事業を行うまでになり将来益々瓦斯供給網を伸展させて需要家の要望に添う計画を立てていた。昭和六年満州国の誕生に従い、遼東半島の大連のみを南満州瓦斯 K. K. に残し、全満の支店を満州瓦斯 K. K. として一括して分離独立させ、新京支店内に満州瓦斯 K. K. の本社を置くこととなった。しかし乍ら、満州瓦斯 K. K. 新京本社は形ばかりのもので、事業上は矢張り大連の南満州瓦斯本社が、関東州及び全満の支店網を統括していた。従って、新京本社は唯満州国政府と折衝する機関としてのみ機能するものであった。

所が満州国の成立以来、各企業でその本社機構を新京に移すものが次第に多くなり、その傾向は逐次加速しつつあったなかで、我が社に於いても、昭和十八年秋ようやく本社機構を新京に移し、従前とは逆に満州瓦斯新京本社に於いて全満及び関東州の南満州瓦斯をも含めすべてを事実上に統括するよう変更されることになり、本社の新京移駐となったわけである。従って、社長は両会社の首脳としての地位を有し、曾つては大連に在住していたのが、此の機構改革後は社長は新京に駐在することになるのは当然のことであった。

新京着任の翌日は、新京本社総務部人事課長として初出勤の日であった。身軽

な独身生活は、机一つと身廻り品の布団一式以外は何物もない身軽さであった。二十才前後の十数名の男子社員らと朝の食事を済ませると羽衣町の新京本社へ向けて寮を出た。新京の二月は大連に較べてかなり厳しい寒冷さである。寮の裏出口を出て小路を北に向うと、両側は一戸建ての住宅が続く。それぞれモルタル塗りの煉瓦塀に囲まれていて薄よごれた重苦しい堅さがある。降った粉雪が隅に吹き溜まったまま融けやらずところどころ煙突から排出された煤と混じって灰色の小さな石筍を造っている。零下二十度の気温は風で吹き飛ばされた粉雪を陽光でさえもが融かすのを妨げるため、奉天市街のように氷の道路とならないだけに歩行者にとっては歩き易く、心安く歩を進めることが出来る。十戸ほどの住宅の間を抜け出ると凹地となった空間が目前に広がる。とろとろと小さな坂の傾斜を下る。児玉公園の西端部である。灰色によごれた地肌がむき出しになっていて草も木もない荒地である。東へ目を移すと白樺か楊柳かの林があり、忠霊塔の頭部がこれらの木々に囲まれる形で空に突き出ているのが見える。

凹凸のある荒地の中にけもの道のように踏み固められた小道がある。これを辿り前方の二米ばかりの段差の小さな坂を斜めに登ると電車路に出た。少ない人数がこの坂を上ると停留所で電車から吐き出された通勤人数と入り潜って多数となる。電車路を少し右に進むと北へ折れ

ている。間もなく北側の第一師団司令部の営門前へ出る。営門の前には付剣をした銃を持った衛兵が警戒に当たっている。何時間の立哨になるのか、若い兵士であっても、この厳寒の中での任務は仲々つらいことだろうと察せられる。

尚、営門の前はかなり大きな看板のようなものに「マイナス十九・五」と今朝の温度表示が出されていた。朝、何時の時点のものかは判らないが、毎日こうして温度表示がなされる。その目的がどこにあるかは知る由もないが、通りすがりの市民にとっては一応の目安になって、その配慮には嬉しく感じられた。営門前を少し過ぎてから、電車の軌道は斜めに北東へと伸び、新京駅へ向っている。この地点で軌道と別れ、舗道を真直ぐに北へ進み約百米ばかりで羽衣町との四つ角に出る。この百米の東側は西広場を囲む植込みや林で、そこに海軍武官府の小さな建物や丸い給水塔、敷島小学校がゆったりした環境で配置されている。しかし道路面との境は全部低い生垣で区劃されているに反し、西側は第一師団の兵営を過ぎたところから一戸建ての住宅ばかりであった。広い道路の四ツ角の対向左側一帯が目さず南満瓦斯の本社と新京支店であった。

その角地が生け垣を境として道路と画劃された構内社宅となっていて、その北端は盤城町まで伸びていた。そして別の東西に走る一つ道路を挟んで満鉄構内につづき、南四平街から奉天鞍山を経て大連へと繋る鉄道線路が走っている。新京

市街地の西北端である。構内社宅のつつきが、新京支店長社宅の一戸建の一棟である。その裏には、四戸建、六戸建、八戸建など、社員用社宅がかなり広い空間をはさんで配置されていた。

これらの社宅群を荒い生け垣で隔てた西側に新京支店及瓦斯製造施設があった。そこに満州瓦斯の本社があるとは考えられないほどの疎末な建物であった。大連の常盤橋角の四階建ての堂々とした本社の威容とは似ても似つかぬ貧弱さである。南新京駅前に新本社敷地を購入しても尚本社移駐が遅れていたのは、一つには本社ビル建設迄に至らない満州国内外政治状況及び経済事情が深く係わっていたように考えられた。何はともあれ、新京支店の二階が本社のフロアーに充てられ、そこに社長室、総務部、文書課、人事課、庶務課が位置することとなり、夫々各課とも大連から輸送されて来た書棚、机等を配置し、之に必要書類を収めて、ようやく本社機構が作動し始めたのであった。

興安寮

新京は明治三七、八年の日露戦争の勝利の結果、日本が清国より関東州全域及び満州の中心に位置する此の都と、ここに通る百の満州鉄道及その沿線の權益とを獲得してから後、最前線の據点の都として、その経営に銳意力を注いで来たところとして世界の注目の的であった。ここは又、帝制ロシアが曾て帝制清国の国

力の衰微に乗じて、この満州へ侵入し北ハルピンから南大連旅順迄を国の權益下に収めた上、極東に於ける地歩を確かなものとすべく、着々態勢整備にその国力を傾けていたところである。その勢いはやがて朝鮮半島に及ぼんとし、極東アジアの平和を乱すものとして、遂に日露戦争の勃発となった因縁の地域である。

明治三八年三月十日、奉天に於ける日露大会戦の結果は日本軍の大勝利に期し、旧帝制ロシアの權益をすべて日本の手に収め、爾後、ここ新京市は日本がその整備経営するに至ったことは周知の通りである。

当時、台湾総督から転じて新京の都市経営に当った後藤新平は、ロシア色を残す新京駅から真直ぐに南に伸びる幹線道路を幅員百米にすべしとの構想を持ったと伝えられたが、現実のこの大同大街は少し狭い六〇米幅のものとなっていた。しかし東洋の如何なる都市にも比肩するもののない大通りとなり、新京都の大動脈として南へ走っている様は正に威観である。

この大同大街と併行して西部を南下するのが興安大街である。それは新京駅から発し児玉公園の西端を過ぎた地点から真直ぐ南に伸びた、もうひとつの大動脈である。そして新京の畧中心で、之と直角に交る大路が興安大路と名付けられている。

会社の独身社員用のこの興安寮は、興安大街より一筋東の細い路と興安大路と

が交叉する街角の一区劃を敷地として建てられていた。

興安大路の真中には電車が走っていた。広い大路の両側には広い幅の歩道があった。歩道にはすっかり葉を落したプラタナスの並木が灰色の幹だけになって並んでいた。落葉樹で葉のない幹が、冬にあたり民家が吐き出す煤煙にまみれて黒い幹肌の無残な姿をさらしている。春が訪れれば、こんな姿の樹々も生きているぞ、とばかりに、一勢に息を吹き返したように芽を吹きだし、而も尚瞬時目をそらす間に緑の葉を蘇らせる逞しさを秘めている。

興安寮で私は二階の三畳一間を当分の仮住居として与えられた。廊下に面する入口の扉を開くと、僅かに踏み込みがあり、之と併行した位置に小さい押入れが上下二段ある。

用意されている部屋の真中には裸電球が一つぶら下がっている。南側には観音開きの二重の硝子窓がある。採光は之で充分なのだが、手荷物として持込んだ布団と衣類を押入れにおしこみ一枚の座布団に坐れば、これが暫しの仮の住いというわけであるが、如何にも殺風景である。余りのわびしさに、真中の空気窓を開いて首だけ出して外を眺めても、見えるのは唯煤に汚れた住居群と灰色の並木ばかりで、僅かに電車の軌道が光っているのが目に入るだけで人の姿はない。

とりあえず、大連の家族へ手紙を書く。無事着任のこと、興安寮の所在や会社の

様子、落付先がいつ決まるのやら皆目見当がつかぬことなどを知らせる。

学校卒業して間もない二十才台の若い社員達は食堂で夕食をとったあと、一つの個室に集まり屈托のない談笑に花を咲かせたり、麻雀に打ち興じたりしているのがほほゑましく感じられる。ついこの間まで自らも学友らと同じように青春を謳歌したのだが、時は移り、既に中年の年輩で、この青年達とは倍ほども齢が違う上、社内での立場が異なるからか、何となく疎外感を持たせられるのも已むを得ないかもしれないと思ってろう。こちらはいつまでも若い積りでもそうはいかない。自然の雰囲気というものが、そのようにさせるのかも知れない。

食堂は五十才台の夫婦が寮の管理をも含め食事の世話もしている。感じのよい人達である。大都市とは云え内地と違う上、特に戦時下でもあるので、若者らも夜は外出することもなく、酒を呑んで破目をはずす騒ぎも起さない。朝も七時頃までには皆洗面を済ませ食堂での朝食を終えて、いつものコースを会社へと急ぐ日常が、比較的規律正しく行はれている。

寮の北側一帯が日本軍の官舎であることに気がつく。満州で軍の官舎が近くにあることは、何となく心に安堵感を齎すものである。けれど在満無敵関東軍と称されたのは以前の話で、昭和十三年ノモンハン事變のとき、ソ連軍に徹底的に打破られ、時の関東軍司令長官植田謙吉大将をして顔色無からしめた以降は、その

存在にかげりが見え始め、日中事変につぐ大東亜戦争勃発後は、北満警備の精鋭が逐次南方戦線に移動している。北辺の守りの兵の数は、逐次現役兵の移駐のみでは満たされない故、在郷軍人の招集により、その穴埋めをしているが、最強とは云えない状態ではなかろうか。何れにしても、この官舎群は、在京関東軍司令部が児玉公園の程近くにある関係からも、最適の場所に位置すると云えなくもない。この辺り一帯が新京で治安上最も心配のない場所である。

興安寮の東隣に「アストリア」という喫茶店があった。主人は白系ロシア人である。店に入った左側及正面の陳列ケースには数種類のロシアケーキを並べその奥に幾つかの客用テーブルがおいてあった。場所柄お客は余り多くはなく、時々客が坐っているのが見られたが、これで経営が成り立っているところを見るとケーキの外注があるらしい。何度か紅茶を喫茶店に入ったように記憶するが、古いことなので判然としない。確か二十代の女性もいたようだが、娘さんかどうか。主人は私より年上と見受けられたので、或いはその娘さんぢやないか。他に使用人がいた気配がないところを見ると、親娘で力を併せて経営しているのかも知れない。この辺りにはこの喫茶店の他には店は一軒もなく、すべては住宅のみが並んでいる。

北側の歩道を二、三〇〇米東へ行くと、電車の軌道も歩道も左へSカーブしてか

ら、更に東へ伸び大同広場へ出る。ここは首都新京特別市の中心であり、政治経済行政関係機関がこの広場を核として展開しているのが、この都市を一層活気あるものとしているのがよく判る。

興安大路を東へと伸びた電車の軌道は、この地点で新京駅前広場から南へ一直線に市の背骨の如く南下する大同大街と直角に交叉して、更に東部満人街へと進んでいる。大同広場の開けた空間の北西角に一段と目立って建っているのが三中井百貨店であった。別段買物の的もないが中へ入ってみる。化粧品売場、貴金属売場などが、一般百貨店と同じような配置で並んでいる。混雑する程の客ではないが、その流れに沿うがの如く二階へ、又三階昇る。満州ならではの品もあれば、日本内地と変わらぬ商品も陳列されている。戦時下に拘らず、日本経済の進展振りを示すような商品の豊富さ、それは特に新京だからこそその演出であるかもしれない感じがしないでもない。特に目立ったのは二階か三階の東南隅の大ケースの中に、刀匠正宗作の大身の大刀一本が展示されていたことである。それは恰も関東軍司令部の偉容とその存在が全満を圧する勢力を示す時代の一つの証作であったのかもしれない。時間のあり余る中を、ぶらぶら見学しつつ、奥まった一隅の食品売場へも行って見る。各種の食品が豊富で並べられ売られている様は大連での配給生活に習慣づけられた身は異様な輝きを持ったものとして目に写った。新興満州国

の首都の経済力の一端を世界に誇示する一つのデスプレーであるのかもしれない。何はともあれ、一か月三週間分の白米の配給と満足な野菜も仲々手に入らない大連での妻子の食糧事情を考えると、一日も早く社宅が見付かって新京へ迎えてやれることを願はずには居られない心持になる。社宅がどの辺で与えられることになるか見当はつかないし、又見付かったとしても新京特別市のど真中に近いところには恐らく縁のないものとなろうが、何はともあれ、この大同広場を中心とする政治、経済、文化の現況は一度は家族に見せておきたいものと、近い夢を抱きつつ漫然と散歩に時間を費やして、又興安大街を西へと独身寮に向って歩を進めた。帰路に気付いたのであるが、南側に軒の道具屋があった。総ガラス張りの店だったように記憶に残っている。店内にもいくつかの大きなショーケースがあり陶磁器などの古物が点々と並べられていた。力のある日本人が経営しているらしい様子だが、こんな場所で品数もあまり多くないようだが、商売がなり立つらしいのが不思議に思われた。古物商の実体を知らない者の考えかも知れない。寮に帰り部屋で暫く新聞に目を通す。新聞は満州日々新聞である。記事には毎日皇軍の対米戦の状況が報ぜられていたが、今となっては全く記憶に残っていない。この頃は南方ニューギニアで苦戦中だったろうに新聞はその状況を明らかに報導していなかったのだろう。夕方食堂で若い社員

に交って夕食を喫し部屋に戻る。若者の部屋では麻雀に興じているらしいざわめき、牌を打つ音が廊下にひびき、しばしの平和な空間が展っていく。外には夜の帳がおりて、人の姿は全くなく、唯煤煙の立ちこめる中、気温は更に零下の度を増してゆく。

総務部人事課

人事課は玄関を入ってすぐ右の階段を登った二階廊下の右側（北側）の部屋を充てられていた。廊下の左側の部屋には総務部庶務課及文書課が同居しその一角に総務部長席があり、後藤末男総務部長は新京支店長を兼務していた。社長室はこの総務部の室の東側、即ち階段を登り切った所にあつたので、総務部関係のスタッフとはすぐ連絡のとり易い位置関係にあつた。新京へ本社が移駐した最初の社長は、元満鉄理事の竹中政一であつた。前社長谷川善次郎は、満州瓦斯本社機構新京移駐前の南満州瓦斯本社が、大連市駅前の常盤橋通り角に設けられてより三代目の社長として社の経営に当り、旧制最後の社長としてその一代を終った。自宅は大連市聖徳街の聖徳公園北側にあつた。子息は大連市の旭硝子に勤務していた。

昭和十九年二月十九日、すべての準備を終え新京へ向け単身赴任するに当り、社長室で谷川社長に出発の挨拶のためお目にかかったのが最後となつて了った。

そのときは、まだ敗戦による一大変化が起るとはさらさら予想もつき難いものであった。

竹中政一新社長は満鉄で谷川前社長よりも先輩であった。というのは、竹中政一は明治四十年三月神戸高等商業学校を卒業しているから、同校の第一回卒業生（三十名）であり、第四回卒業（四十三名）の谷川よりは三年先輩ということになる。両氏とも、恐らく卒業すると同時に日本の満州経営計画に参加せんものと、逸速く応募し青春の若き希望の血を滾らせて満州鉄道株式会社に入社したものと考えられる。従って、高商二十三回卒業の私とは親子程も年の違う大先輩であったが、二月新京移駐の時点では担当の仕事のことで頭が一杯であり、初めての首都のすべてを心に刻むことに留意していたので、社長人事のことは脳裡に浮かぶこともなく、すべては旧知の後藤総務部長兼新京支店長の許で円滑に進んでいたものであった。

満州及関東州の瓦斯事業を独占経営する当社の社長人事は当然満鉄本社に於ける満鉄総裁の決裁事項であり、更迭時には必ず満鉄理事の内から派遣されるのが慣例であった。竹中新社長の赴任は、昭和十九年四月になってからだったと思うが、正確な月日は記憶がない。しかし通例人事異動は四月一日付となることから、初出社は四月に入ってからであった筈だが、本社及支店の幹部社員列立の下、社長室に於て社長就任の告辞がなされた

筈であるが、今は幻の如く消え去って全く記憶に残っていない。只、総務部文書課長の樋口克己君から、満鉄社内でも秀才で評判高く、昭和六年「満州国」誕生の後、秩父宮が天皇御名代として大連から新京へ向われる特別列車アジアに扈從した満鉄総裁の随員の一人として竹中政一も控えていた。当時大陸を走る特急アジアは世界にその名も知られていて、最高速度で走るときは車輛が線路から浮いていると言われるほどであった。丁度列車が大連を出発して後鞍山へ向って広野を走っていたとき、秩父宮が満鉄総裁に話しかけられ「この辺りの傾斜はどれほどか」と質問されたという。しかし殿下の突然の技術的な御質問に対し、総裁は勿論のこと随員も皆お答えをすることが出来ず困っていたとき、随員の中から唯一人、竹中英一が総裁の傍らに進み出て「千分の六でございます」と御答え申し上げたので、殿下も御満足されたという。千分の六とは、千米進むごとに六米高くなる傾斜地帯であることを示すという意味で技術畑の者なら当然の関心事かも知れないが、文科系の者から咄嗟に正しいお答えが出来たことに関係者一同ほっと安堵すると同時に、何と凄い記憶力の男がスタッフの中に居ることかと驚き、この事が満鉄社員たちの誇らしい一つ話として伝えられていたようである。竹中社長が就任されたのは昭和十九年四月だから、その時から十数年を過ぎ還暦を既に超えていたとすれば、恐らく三十代後半の事

であつたろうし、正に錚錚たる中堅幹部社員だったものと云うべきであらう。赴任前の満鉄でのポストは承知しないままに終わったが、重要な地位をこなし、責任を果して来た満鉄理事の一人であつたことは疑うべくもない。

社長室で初対面のときの印象は、黒髪で面長の顔、長身瘦躯で、如何にも紙背を貫くといわれるばかりの眼の光は、さすが満鉄のキレモノだったことが窺はれ、身の引締まる思いをしたものだった。前社長、谷川善次郎の穏やかな風貌とがっしりした体格から感ぜられるすべてを包み込むおおらかさとは好対照であつた。

どれ位の日が経ってからのことだったか、初出勤して間もない時突然、竹中社長から直接電話かかって来た。いまごろどんな用件かと軽い疑問を感じながら、すぐに起って四米とは離れていない社長室のドアをノックして入り、大きなデスクを前に西向きにソファに掛けている社長の前に直立した。初めてのことであり、何を云はれるかと稍緊張していた。大連の南満瓦斯本社ときは、人事課は同じく二階だったが、社長室は三階にあり、階段を上って重役室に入ると左道路側が社長室で右が斉藤常務室となっていて、廊下には秘書の女性社員が控えていたので、精神状態の緩衝地帯の効果があつたが、新京では戦時であり仮本社なので色々な条件で余裕がなくなっていたので、直に社長の前に立つことになったからかも知れない。竹中社長は徐ろに口を開い

て、赴任前に友人から贈物を貰ったが、忙しかつたのでまだそのまま礼状も出していないので気にかかっている、君、一つ礼状を書いてくれないかとのこと。意外な話なので面喰つたが、お引受けして自席に戻り、私文書としての文案をあれこれ考えた上ようやく成文を書き上げ、再び社長室に入りそれを差し出した。社長はじっと目を通していたが、可とも不可とも云わず沈黙の時間が流れた。どういう答が帰って来たのか今はもう記憶にない。しばらくして人事課の部屋に帰って通常のように仕事をしていた。仕事をしながらふと頭をよぎつたものは、社長が何故私に手紙を書いてくれと命じたのかという疑問だった。前述したように秘書は居ないとしても、庶務課も文書課もすぐ隣り部屋にあるのに、それらに命じることなく人事課の私に云いつけたのか？手紙を出す相手が一人なのか複数なのか、私から特に質問することなく云われるままに引受けて成文を差し出したが、単複何れを問わずタイピストに命じて和文を打たせ、それに社長自身署名をした上、封筒も自ら書くのかとも考えたが、どうもタイピストに打たせた気配もない。そんなことに気づくとどうも変なところがある。ひょっとしたら、神戸の一回生の社長が社員中唯一人の二十三回卒業の後輩の能力を試すために私に作文を命じたのではないかと、尻こそばい感じがしたものだった。が、それも日常の仕事の忙しさに紛れていつか忘れて了っていた。

そして、夫以後はしばらく社長と直接接触することはなかった。

大東亜戦の戦局は日増に悪化の兆しあり、南方ニューギニア、ラバウル戦線も米国に上陸され日本軍は次第に追ひつめられ、「転進」と称しつつ退却に退却を重ねつつあり、又枢軸同盟の独軍の旗色芳しからず、大挙攻め込んだウクライナ方面から撤退しつつある模様である。独軍が後退したとしても持久戦で長期持ち耐えることが出来ればだが、形勢不利のまま戦況不利となり敗戦降伏することになれば、同盟国日本の不利となるは必定でソ連の意向が重要な鍵となるやも知れない。

給与統制令

陽春三月は日本の学校では小、中学校を問わず卒業式を迎え、多数の学生生徒が永年青雲の夢を育んだ学窓を離れて、未知の世界である社会へ胸はづませつつ巣立ちすると秋である。又国内大小各企業でも文科系理工系を問わず学校卒業生を新戦力として、多く採用すべく前年より全国学校にはたらきかけ卒業予定者の推薦を依頼して、その獲得に鎭をけづるのが慣わしとなっていた。それは昭和の初頃の不況時に「大学は出たけれど」就職先が見当らず、当時の学生、生徒に苦汁を嘗めさせた時代とは全く様変りの状況となっていた。

本社を満州国内へ移駐前の大連の南満

州瓦斯株式会社でも、毎年十月には人事係担当者が、在勤社員の出身校で内地の旧制中学や専門学校、大学を目標として、次の年の卒業予定者の推薦方を依頼すべく、一ヶ月有余の日程で出張するのを慣例としていた。地域別には九州が最も多く、次いで中国地方や四国それに中部特に長野県及東北地方を主たる訪問先としていた。東京、大阪、名古屋等の大都市周辺は大小企業多数存在し、それらへの就職者が多く、関東州満州の企業では新卒者の採用も見込薄なので、之等の地帯を避けて満州進出の志を持つ者の多い有望校を目指すのが最も効果的とされていた。従って、昭和十六年の大東亜戦争開始まではかうして毎年新卒採用活動を展開するのが慣わしとなっていた。

処が昭和十二年支那事変勃発以後は次第に戦時色が濃厚となり、軍現役部隊の外地移駐するもの多くなり、又在郷軍人の招集も重なって、企業も次第に手不足を心配することから、予備軍を含め一人でも多く採用して、将来に支障のないよう準備しておく状況となった。加えて消費物資を初め一般物資の値上傾向が次第に加重するに従い、新入社員の初任給も通年上昇傾向を辿り、之が在籍社員の給与との均衡に影響を及ぼすこととなり、次第に社員の間からも不満の声が聞かれるようになった。

人事課に於いては此対策を考慮する必要に迫られていた折、昭和十九年三月満州国総務庁長官名で給与統制令が発令さ

れた。それは年々増嵩する新入社員の初任給上昇に見合うように、在籍社員全部の給与をその年令、在籍年数に併せ改善するよう基準が示されたもので、前例を聞かない措置を示すものであった。之に従ひ人事課では、四月の全社員給与改訂、即ち昇給策定に併せ、給与統制令による給与改定を行ふこととなり、通常の業務より複雑な仕事とならざるを得なかったが、漸く成案を得て、社長の決裁を仰ぐべく社長室へ入った。尤も給与統制令が発令され、その詳細の文書を入手したとき、昇給に併せ給与改定の実施の必要ある理由に就ては、新卒初任給の上昇及び在籍社員給与の現状とを説明し、均衡上、統制令の趣旨に従ひ実施の方針をとる必要あることを兼ねて陳述し、法令に沿ひ改定方につき諒承を得ていたので、人事課の策定通り決裁を得ることが出来た。

これにより、毎年新卒採用上已むを得ず採用されてきた初任給の大幅な上昇により失われようとした在勤社員との均衡を保ち、又その不満の声を吸収し和げるのに効果を發揮したことは事実であった。この給与改定により旧年度の入社社員も新卒給与より支給額が多くなり均衡を失ふことなく、又年令の若い社員になるほど改定額の幅も多く歓迎された。唯、在籍年数が多く年令の高い社員は、下との差が圧縮される結果となった。これらの人達からは理解はされたものの、従前どうりの開きが縮まったことに多少批判の声が聞かれたことは、已むを得ない結末

であった。とまれこの度の給与統制令による給与体系の更改は、一つの＝＝すべきものであった。

尚この時自分の給与改定額に就ては、自ら決定することには誤解を招きかねないことを考慮し、空欄まま提出し決裁の際、社長自らの裁定に委せることとした。社長は全員の給与改定額に目を通した上、私の給与額を原則に基いて記入の上、一連の書類に決裁印を押した後返された。私の昭和七年大学卒業当時は、まだ財界不況が続いていた上、家業があり長男で而も一人っ子であることから就職運動もせず、父の命のままに郷里に帰り、陶磁器卸小売業に従事するしか他の道はなかった。けれども、自営の卸業も産地問屋でなく地方問屋であり、その販売地域は競争上自ら限定され、而も県内一の問屋と云っても人口、所得額共に全国の百分の一しかない農業県であつては、如何に工夫するも更に発展する余地は殆んどない。又、店員も有家族者三人と小僧四、五人とあつてはその将来にも責任を感じざるを得ず、遂に意を決し、父の元気な間は大丈夫と渡満を計画、傳を得た上大学ゼミ八木助市教授の口添えにより当時の田崎学長の推薦状を得て、五年遅れて昭和十三年二月渡満、南満瓦斯に入社した関係から同年輩の学卒者よりは給与も低く常にギリギリの生活が続いていた。そんな身には地位は上っても給与は比較的低い時代がつづいていたので、今度の給与改訂によって、漸くやや遅れを取戻し

人並みに肩をならべることが出来ることとなり、私自身にとっても大きな朗報となり、妻子四人と共に稍前途に光明を見出し得るような気持ちになったものだった。給与統制令に基く給与改定は以上のやうなものであった。之により満州瓦斯並南満瓦斯所属の社長及重役を除く、すべて部課長及各支店長の昇給並給与改定は以上の通り人事課に於て策定し社長決裁の後、大連の南満瓦斯此他満州瓦斯各支店長に通知する恒例通りの手続きに従ったわけである。又満州瓦斯本社所属の社員及新京支店の一般全社員の給与に関しては、新京の人事課に於て策定するものの各支店所属の全社員に関して策定方式及限度を示した上で実際の昇給及改定額については各支店長の前決に委ねたことは従前通りであった。

社長及重役の給与額に就ては満鉄本社に於て決定されたのでなかろうか。事実上の支給に関しては、賞与も同様人事課に於て現金封入の上、夫々手交したのではなかったかと考えるが、今となつては明確な記憶がない。

満人社員は大連及満州国内の本支店の庶務関係ボーイを始め、各現場に多数雇用されていた。正式に社員として採用され、長年勤続していた年配の満人社員も多くいた。これらの社員が製造及工事の現場では実戦力として貢献するところが大きかったが、すべてが日給制であり、毎月の給与は夫々の現場の責任者からの報告に従ひ人事課に於て計算の上、日系

社員と同様に二十五日に支給するを慣例としていた。給与統制令に基く満人社員に対する給与改定の有無に就てはどうも記憶に浮かんで来ない。すべてが現地人であり、日常物資に購入についても市場の二重価格の作用により、その必要がなかったのかどうかは判然としない。いつの頃からか判然としないが当時は相当数の漢人が山東省のあたりから流入し、苦力として働いていた。彼らは出稼人であることから住居を持たないため、すべてが構内に設けられていたアンペラ小屋に起居していた。日常生活、特に炊事をどうしていたか詳細については労務課の担当で詳しくは知らなかった。又特に満語、中国語を知らない私はそこまで立ち入る必要もなかったし、仮令、関心を持ったとしても、干渉する権限も時間もないままに経過した。

昭和十六年秋十月には南満瓦斯本社人事課から人事係主任の仕事として、新卒社員採用のため内地出張して各学校を訪問し、春の卒業者の推薦を依頼して廻り、所期の効果を挙げてきていたが、この年を最期として大東亜戦争勃発の影響から、日本政府の統制色が次第に濃くなり、学生生徒の採用に関しては、予め三月期卒業予定者につき文科系、理科系別、中卒、専門卒、大学、夫々何名採用したいかの希望数及学校名も併せ申請書を満州国政府総務庁に提出した上、之が日本政府との間に調整があったらしく、春になってから、どこの学校から何名採用してよろ

しいとの採用許可が示された後、文書により当該学校へ連絡の上、予定者の推薦を受けた上で採用を決定するという何とももどかしい方式に変わっていった。戦時下のことで、若者の数も次第に少く希望通りの人員が確保出来るのは難かしくなっていた。これは内地外地を問はず同様な事情に変化していたので、已むを得ない措置でもあった。その上、旧制中学卒業者は兎も角、専門学校卒以上はみな徴兵年令に達していたので、卒業即現役入隊となり、結局採用決定は名目のみで事実上着任することなく、書類上社員名簿に記載するのみで、すべて本社総務部人事課付として戦争終結を待つ処置をとらざるを得なかった。

これほどまでにして学卒者を採用する必要がないではないかという疑問も生ずるけれども、万一戦争がいつの時点かで終結を見た場合、そして夫々本人たちが無事帰還したときは、即出社となる筈であったし、それを見込んで中間年令層が断絶しないよう措置しておかねばならなかったのである。

昭和十八年春まだ本社が大連にあった当時は、内地からの採用者が二十名程あり、少年達が到達する度に埠頭へ出迎えに行き、独身者寮へ収容し全部揃ったところで、関東州及満州に於ける会社事業概要等の教育を行い、之等が終了した頃、一同を中華料理店（飯店）で歓迎行事を行い、大陸の中華料理を御馳走した後、夫々予定の勤務地へ振り分け、出発する

のを大連駅へ見送る迄の面倒を見る之が人事課の仕事だった。すべて入社行事を終了するまで、一週間から十日を要するのが常であった。このような平和的な年中行事の一も昭和十九年日本の戦況がきびしくなるにつれ、当然変化を余儀されていった。戦局がきびしくなるにつれ内地の港を出発して玄界灘を越えて大連港までの航路の安全が確保されるか否かが、次第にさし迫った喫緊となりつつあった。

昭和十九年四月末、創業当時から入社し主として現場工事関係業務に従事した永年勤続の清瀬という老社員が退社されることとなり、人事課で退職給与金をお渡しすることとなった。予てより顔見知りの方であったが、この厳しい時節に退職されることに、何とも云えぬ一抹の哀惜を感じ、郷里へ引揚げられるにしても充分気をつけていただくよう、お話したことがあった。この時お渡しした退職金は、当然のことながら退職金支給規定に従ひ計算されたもので六万五千円前後であったが、逐次物価の上昇する時であり、物資不足の折、どこへ落着いて晩年を送られるのかと他人事でなく、部屋を出て行かれる裏姿を見送り乍ら深い感慨に打たれたのだった。

大東亜戦争に突入してからもう二年半に近く、戦況は緒戦の優位を次第に失ひつつあった。情報は満州新聞による日々の報導しかなく、紙面に活字となって伝えられる大本営発表もその裏を読むことに慣れっ子になり記事の空々しさを感じ

るようになっていた。然し、その事はお互い迂闊に口に出さない用心深さも身につけるようになっていた。昭和十六年十二月八日、大本營発表のあった時、私は九州の宮崎県に居た。翌年の新卒採用のため、宮崎市内の商業や工業学校及び都城工業を訪れて、夫々の学校の就職担当の先生と面接し、会社事情を説明し推薦方を依頼して廻っていたので、開戦のラヂオ放送は全く知る由もなかった。日米外交交渉の緊迫した状況は承知していたが、日本の強腰の外交も表面だけで開戦などは到底考えていないものと自ら結論づけていた。昭和の初、神戸に学び、欧米諸外国の経済事情、特に鉱工業、農水産業関係生産力の比較等が記憶にあり日、米間に総合的生産力に格段の差があることは、日本側をして判断を誤らせない決定的な事の暴虎馮河を渡るがごとき愚を撰ぶことはないと考えていたので、私自身時局を比較的のんびりした考えで見ている。宮崎県の旅を終り、列車に身を托した私は鹿児島駅前の山下旅館を目指して南下していた。

鹿児島駅に着き驚いたことに駅附近は殆んど闇に近く、電燈を全部消して了ったかと思はれるほど真闇である。十二月八日も午後七時となれば、如何に南国鹿児島でも明るい筈はない。とっぴりと暮れた闇のプラットを歩き、異様な空気を感じ乍ら、改札口に向う。改札口の電燈一つが黒木綿で覆われていて、その真下のみがボーッと黄色く明るい。切符を駅

員に渡して改札出ようとしたとき、出迎えに来てくれた同僚の高橋直さんが「とうとう始まりましたよ」という。旅館への道を歩き乍ら開戦の詳報を初めて知る。真珠湾奇襲作戦の成功が余りにも大戦果なので驚くと共に、秘められた軍の戦力は門外漢には推測を越えるものかもしれないと感じたのも事実である。そして打ち揚げられた花火は緒戦に最も華麗であったが、次第にその影を彩を失い勢いが衰えて行ったのである。

関東軍司令部

新京特別市それは満州国成立以後の首都の名称である。その中心部近く大同大街の西側に相当広い面積の公園があった。児玉公園である。奉天の千代田公園、大連の中央公園と並ぶ公園で新京神社も忠霊塔もその一画にあった。この児玉公園に面してそれを前庭とするかのように関東軍司令部が偉容を示していた。そして、その存在が在満日本人の心のよりどころとなっていたのである。児玉公園の北側の道路を挟んで東西に長い三階建のビルで中心部のみ四階の白亜の城廊様式で、中央櫓の見付の壁に大きな金の菊の紋章が恰も周囲を威圧してキラキラと光っていた。軍の司令部は平地に建てられていたが、如何にも石垣の上にある城櫓のような威観を呈していた。

在満関東軍は関東州及満州全土の治安を維持し、特に北辺辺境の守りとし、多

くの在留邦人をして安んじて生業を営み得るよう、その保護に万全を期するを目的としていた。百万の関東軍が健在なれば天下無敵とその存在を日本人は誇りと信頼の念を持って仰いでいたのであった。然しその期待を大きく揺がす事変が勃発したのである。

昭和六年満洲国誕生より僅か六年後の昭和十二年、日中事変が起り、事局騒然となり始めた折、昭和十四年ソ連が満洲国西域から大戦車部隊を以て侵入、之に対し日本軍は之を制圧するに足る火器を持たず、火砲及機関銃に応戦する他術なく、ソ連軍の意のまま蹂躪されて大きな損害を被ったのである。時の関東軍司令官植田謙吉將軍は敗戦の責を負い東京召還の際、参内が許されなかった。之を一出先の軍司令官の責に帰したのみで、真の敗因を究明の上、抜本的対策樹立の要あるに拘らず、そのことがなかったところに昭和の悲劇の始まりがあった。当時、日本の国民総生産力 GNP は規模も少ない中、国防予算が多額を占め陸海軍関係軍備に注がれ之が国民生活を圧迫していた事実を見逃すことは出来ない。而も国民は之を当然のこととして忍従していたこと及び軍は近代戦に何が最も重要かの視点より考察することがなく、従って満洲に於ける戦車戦防への対応を欠き、加え近代戦に相応しい空軍戦力も極めて貧弱なものであった。満洲事変にも関与した石原莞爾中佐が「世界最終戦論」を著し、航空機の重要性を力説していたに拘らず、

之が国策となった形跡がない。而もその所論に於て世界大戦の最終優勝戦に参加する資格を有するのは米ソの二国であると結論づけていたことが印象的であった。それは昭和十四年頃の著述でなかったかと思う。陸軍の中堅優秀将校として氏の言あり。それは陸海軍の政策に警鐘を打ち鳴らすを目的としたものか、将来の日米戦争に敗戦を予告したものか、著者が病死しているので詳らかにし得ないが、或いは米、ソの戦力を軽視すべからざるを主張し、近代戦に於ける最重要課題は何かを主張したかったのかもしれない。更に日本が無謀な戦をすれば、優勝戦まで勝ち抜くことが出来ないことを云わんとしたのかも知れぬ。現実には正にその言の通りになった。それが最も悲惨な戦争劇として結果されるまでに、天皇の周囲に正しく輔弼するものが一人もなかったことである。日本には勇氣ある賢人が一人も居なかったことを悲しむべきであろう。昭和の初期、軍部の抬頭により議会政治は麻痺させられ、国民亦不況打開のための正しい判断を失い、跳梁する軍の暴力を恰も天の声と聞え違え、怒濤の如き勢いを以て奔流となった後は勢のままに静止し得ないものとなったというべきである。軍の命は天の声と聞き、それに従うことに国民は明治以来訓練されつづけた結果でもあった。そこには少数者の反戦の=いも押しつぶされ一つの方向へ無反省に突走ること何の疑問も感じなくなっていた国民こそ責められるべきか

も知れぬ。「五族協和」の天国、東洋の民族が協和する桃源郷を烏呑みにして満州へ渡った私も、その流れに抗することなく乗った一人でもあった。それはこの時代の落し子でもあったし、又世界の変貌する中で日本の指向する潮流に乗りつつ、そこに自らの位置を見出そうとしたものでもあった。

大正十五年春、満二十才での徴兵検査を受けよと町役場から指示が来たと彦根の父から知らせてきた。当時、学生として神戸にあり学校創立記念日六月一日敏馬（ミルメ）の浜で行われた恒例の年中行事の一、短艇競争（固定式エイトシステム千米コース）に出身県チームとして出漕すべく、脇ヶ浜の漁師家を根城として合宿訓練の最中に帰郷せよとの連絡あり。浜で千米コースで何度も予備練習をした後、急ぎ坂道を北東灘駅迄駆け登り、列車で四時間、うっかり居眠りをしてはいかぬと緊張しつつ、「河瀬駅」と駅員の声を耳に後一駅とほっとしたのが気の緩みとなり、ふと気がついたときは列車が「彦根駅」を迂り出して了っていた。失敗った思ったが後の祭り、次の米原駅で降りたのが夜十一時。田舎の駅にはハイヤーもなく、まして夜半ともなれば歩いて帰るより外に術はない。星明りをたよりに西へ四キロ漸く途中の山を貫くトンネルにかかる。ここまで来ればあと半分とトンネルに入る。隧道は弯曲していて、中へ踏み入れば真暗闇でどこを歩いているのが見当がつかない。聞えるのは周囲

の壁にこだましてはね返ってくる自分の靴の音ばかり。壁にぶつからぬように両手を左右に拵げ進む。頭の中は真暗で、どれだけ目を見張っても目に入るのは暗闇だけの時が過ぎる。コツコツと音を唯一つのしるべとして歩む足許に少しづつ坂が下りになったのを感じた頃、どれほどの前分か判らぬところに、小さい白い丸が見える。錯覚かなと目をこすりつつ歩く。白い丸が僅かに乍ら大きくなる。錯覚ではない、だんだんぼんやりしていた丸の輪郭が判っきりして来た。トンネルの西側彦根への出口だ。もう両手を左右に伸ばさなくても、出口を見つめて歩いて行けばよい。足が早く運べるようになった、下り坂をどんどん進む。トンネルを出ればあとは古沢町の下り坂であった。かくて午前一時過ぎ我が家へ帰り着いた。そして翌日城内二の丸の公会堂での徴兵検査に臨んだのだが、結果は意外にも「筋骨薄弱以て丙種とす」の云い渡しだった。自分では乙種と予想していたが見事にはづれた。「不名誉！」だと自らに云い聞かせた。が、同級生（旧市内だけ）で甲種は唯二人だけだったのが、落ち込む気分を和げてくれた。何でも軍縮のため徴兵数を減らしているという話だった。帰宅したとき親に報告のとき、丙種と口にするのは裏めたいものだった。国民的雰囲気があるような風潮を醸成していたし丙種では胸を張って口に出来ないものだった。かと云って誰もが常時兵役のことを頭においているわけではなかったの

で、此の時季と云うかこの事が話題から去ってうと以前の平静な日常がまた甦って来たものだった。

そんなわけで満州事変が起ったときはまだ学生だったし日支事変のときも軍役とは無縁の存在だった。それが昭和十四年、なんともキナ臭くなって来たとき、丙種も在郷軍人に編入されることが定められ大連で本社社員の在郷軍人会の一員として時々の訓練に参加することになったわけであった。尤も訓練と云っても永年学校で経験してきたのとさして特別な作業とは感じることもなかったのである。新京特別市へ移ってから新編入の在郷軍人として本社内社員会での訓練は続く筈であった。しかし大連でのように行事として頻繁に行はれることはなかった。それは関東州が日本の指揮化にあることと独立満州国内であることとの差違が在満日本人の所遇に現れたのだろう。唯満州国誕生以来、日本人を主として五族協和の名の許に「協和会」が生れ、関係民族すべてが背広を捨ててグリーン一色の協和服と称する詰襟の服と戦中帽を着用することとなり既に六年を経過し満州国内の官民のすべて及関東州でもそれに何の違和感を持たなくなっていた。

南方戦線では米軍の攻勢の前に戦争は次第に窮地に追いやられ苦戦相次ぐなか関東軍の精鋭も南方へ密かに移動しつつあるとの噂しきりであった。その故が在満日本人在郷軍人の招集が相つぎ北辺へその補充として配備されつつあり次第に

只ならぬ緊張感がただよってきていた。それと共にソ満国境の防備も懸念されたが、昭和十六年、日ソ中立条約の締結により日本軍が攻撃をしかけることはないし、ソ連軍も独ソ戦線危急の折、北満へ侵入する可能性なしとの観測が一般大衆の中にも次第に浸透するに至ったのである。

兵事業務

昭和十九年五月ともなれば、新京の街の様子も春というより初夏の感が濃くなってくる。埃をかぶってうす汚れた濃緑というより黒緑の生垣も新芽を吹き出したと見る間もなく真緑のすがすがしい姿に変わり、人々も一斉に生き活きとして動き出したかのように見え全体に活気が漲ってくる。児玉公園の木々もみな美しい緑に蔽はれ春のそよ風にゆらめき芝生も青々とした絨毯と化す。興安大路の独身寮の一室の窓から見るプラタナスの街路樹もいつの間にか緑したたる葉をつけ活き返ったように見える。そして寮から会社への日が続いた。寮の北側一帯は軍の官舎であったが、日常これらからの軍人の出勤風景など是一向に見ることもなくひっそりとしていた。

新京へ移り寮から会社へ通うようになってどれ位の日が経たろうか、或る日寮を出て北、児玉公園の西端の窪地を歩いていたとき、興安大街のどこからか現れた白馬に乗った将軍の姿が目に入った。

白馬は電車路に沿って北へ進む通勤者の群に交り、蹄の音高く首を上下に振りながら進んでいる。それは美しい姿だった。白馬の轡を取り一人の兵士が前方に注意し乍ら歩んでいる。馬上の将軍は悠然と反りかえって巨軀を揺がしている。私はすぐ関東軍司令官白石乙三大将の出勤風景だと覚った。それは満州に於ける日本軍の最高権威であり、皇軍の象徴でもあった。これが関東軍司令官だと知ると、その悠然とした姿がこの国の平和を保証するものであるかの如き心の安らぎに似た感じが涌くのを禁じ得なかった。将軍の光るような黄緑色の軍服と金色の肩章が馬の白と対照となって輝いている。美しいと感じたと同時に一抹の不安がよぎったのを覚えている。それは将軍の風格から滲み出たものである。この将軍が関東軍を統括している。大丈夫なんだろうかとの感じが頭に浮んでいた。曾て大連の中央公園で陸軍記念日の行事が行われたとき、会社の同僚たちと在郷軍人として会場に行き当時の関東軍司令官梅津美治郎大将の訓辞を聞いたとき比較的近い距離でその風貌に接し、頼り甲斐のある将軍との印象を受けたのと比べどことなく物足りない弱々しさを感じとったからであった。それは実相を知り得ない者の単なる印象に過ぎなかったが、後々までこの印象と不安は心の底から消えることがなかった。そして日本の厳しい戦の日々はつづきそれが又満州の守りにも影響を与えつつあった。

この頃、後藤末男総務部長から社宅の見込みがついたと知らされた。新京の南端で、南新京駅よりまだ南の方に建築中の六戸のうち三戸を購入する契約を結んだとのことだった。それが七月中には完成の上受渡完了する予定というのであった。時局柄こうした建築が少く、新築のものを入手することは最も困難なところだったので、これで八月には家族をよびよせる見通しも立ったのだった。これと前後して六月に入ってからだったか、会社の決算につき満鉄本社からの監査が行われた。経理に関しては担当でないからその場に立会うこともなかったが完了後、構内の総務部長宅に於て監査担当の人達を慰労会があった。その時囲碁で接待するので私に同席する用途の話があった。満鉄本社の人たちと顔を会はずのは初めてのことだが、囲碁を楽しむのは暫くぶりだったので、欣んで参加した。部長宅の二階に二面の碁盤が用意されていた。碁の力は部長も私もお話にならない。下手の横好きというもの。大連時代、世間が厳しくなるにつれ本職では飯が食べられないということで石田某初段が料金係の社員として入社したのを幸いに昼休み時間にはよく四階食堂で三、四人の碁好きが争うようによく打って貰ったものだった。この頃自分でも目に見えて力がついた感じがした。私は当時三、四級位で決して自慢出来るものではなかったが、部長は私より弱かった。その部長が石田初段に正目（九目）おいて打って貰った

のを見ていたが、何と次から次へと黒石が死に、結局全部死んで了ったのを見て、何と本職は凄いものだと思われ碁の魅力に強く惹かれたものだった。その頃から久しく碁石に触れたことがなかったので、対局する相手が誰であれ楽しく、勝ち負けはどうでもよかった。私より少し年配の人と対局することになった。結果は記憶に残っていないが、碁力は同じ程度だった。二局ばかり打って楽しんだが、その時の対局相手が長州の毛利公の新家に当たると知り、珍しい人の相手が出来たのもザル碁の効用と喜んだものだった。

我が社の社員、在郷軍人にも召集が来るようになり、その都度所属課の責任者と爾後の仕事に支障の出来ないように打合せをする必要が生じてきた。簡単に補充は困難なので、欠員が生じると支障の虞あり、場合によっては大連、奉天一帯他からの転勤による埋合せを考慮せざるを得ない切実なものとなりつつあった。関東軍は満州国内企業の運営を考慮してか、企業の業務遂行上支障なきを期せしめる目的で社員を招集した場合、出来るだけ業務に支障を生ぜしめないために召集の順番を示した「残置要員届」を提出するよう通告が出された。時局が困難なときなので、社長以下之に真剣に対処せざるを得ず、各部課長に連絡し所属社員の担当業務の軽重を考慮した結果の順位の報告を求め、人事課に於て本社全員に就ての計画書にまとめた上、社長決裁を得て軍に提出の運びをとることとなった。

勿論極秘扱いである。年令の如何を問はず、製造部門、営業部門、工務部門、経理部門の男性社員は会社にとっては欠くことの出来ない大事な運営要員ではあるが、大半は在郷軍人として登録されており、一旦軍からの命令により所謂赤紙による召集令状が発せられた者是否応なく緑色の奉公袋を携行して、命ぜられた日時に指定の場所に出頭せねばならなかったし、之を拒否することはできなかった。赤紙召集令状は、国の命令によってその一命を捧げるべく如何なる任務をも果さなければならぬ厳しく且非情のものであった。そして軍の動員計画による召集令状の発令は次第に情勢により避けられないものとなっていたので従うより他に術なく社員の担当業務に於ける習熟度、勤務年数、健康度、職場における必要度等を勘案した上で各部課長は決断を迫られたのであった。こうして回答報告書が完成したので、之を携えて初めて関東軍司令部を訪れることになったのである。それは歩いて十分以内の所にあった。陸軍省の一大出先機関たる関東軍司令部を私が訪れることになろうとは、それ迄夢にも想像もしなかったことである。

司令部の正面玄関より西の方建物に向って左端に、一般通用門があった。門の左右両側には二名の付剣の歩哨が立っていた。新村出文学博士編集の広辞苑によれば、歩哨には衛兵勤務と警戒勤務の二種類があり、前者に就ては衛戍衛兵は司令部等の附近の警戒に任し、又出入者を

監視するを任務とするところである。正に文字通り嚴重な監視が行われていた。民間人がこの歩哨戦を突破するのは、正当な用務がなければならず、先づ用務を歩哨に申告してその許可を得なければならない。歩哨の二m程前に直立不動の姿勢をとり大きな声を張り上げて「満州瓦斯株式会社総務部人事課長何某であります、第三課××中佐殿に面会に参りました」の入門の許可を求め「よし、通れ」の返答を受けてここを通過し、横の出入口から兼て示されていた二階に昇り、もう名前は忘れて了ったが目的の中佐に面会すべく廊下より表側の二つ目第三課の部屋に入ると、中佐は窓傍の机に西向きに執務していた。社名氏名と用務の目的を述べると中佐は手を止めて私を注目した。想像していたより穏やかな人柄の様である。用意の書類を紙袋ごと渡す。中佐は暫く書類に目を通していたが、私の方へ向き直り「よろしい、御苦労」とだけ返事があった。「〇〇社何某」帰りますと告げて中佐の部屋を出た。自分で平静に終始したつもりであったが矢張り緊張していたのだろうか、階段を降るときは流石にホッとして無事に用件を終了したことで肩の力も抜けた感じである。再び衛門の歩哨の前に立ち、社名氏名及××中佐殿に面会を終え只今帰りますと告げて司令部を後にしたのであった。こうして第一回の残置要員順位届の提出手続きを終了したのであった。

このように人事課で兵事関係業務を担

当するようになってから新京駅前の敷島警察署兵事係担当の某警察官を訪れることも度重なることになっていた。新京駅から見て真正面に大同大街の市電の終点があり、この大街を挟んで右側に満鉄本社ビルがあり、左側の一ブロックは公園のような植込みになっており、その南が吉野町の繁華街更に南に下りまばらな林の一劃があり、このブロックの南角に敷島警察署があった。普通なら警察署に行く用件はなかったのであるが在郷軍人である社員の兵事に関する業務が忙しくなるにつれここに出入りすることも頻繁になりつつあったのである。ここも歩いて七、八分の距離であった。その道の途中に憲兵の詰所があった。この辺りを歩くときは特に身の引締る思いがした。それは餘り気分のよいものではなかった。特に何の係わりのない者であったとしても、何となく緊張を余儀なくされたのである。左腕の白い腕章に赤で憲兵の文字を染めてあり、一見憲兵であることを認識出来るようになっている。憲兵は軍及警察を掌り軍の行政、司法警察をも兼ねているから脇役のようであっても、実務上の主役任務を負っていると云えるのかも知れない。大きな組織体である軍隊が完全に本来の使命を全うするためには内部からその管理に任し、又弛緩防止の役目を負っているものと云えるかも知れぬ。そしてその責務は大戦下の新京市関東軍司令部直下の地に於ける活動としてより以上の大きなものがあつた。

撫松路社宅

新京の夏は暑い。予想していたよりは気温が高い。大きな大陸のだ真中のこと、周辺の大地が熱せればさもありなんと
思うものの、大連の夏の爽やかな暑さ、暑い夏の日、やたらに汗をかいても一旦アカシヤの樹影で憩うとき、身体からはっきり汗が引いてゆくのが感じられ、それが爽涼感となって運動後の心を引締め和らげてくれた大連がなつかしく思い出される。その爽涼感は新京にはない。熱せられた空気の逃げ場がないのか人事課の部屋も意外に蒸し暑い。戦地で戦う兵隊の事を考え暑いなんて云ってられないけれどむし暑い。後藤部長から新京の南端、撫松路に予約の社宅三戸が七月末には引渡しが行われる予定だから、八月に家族呼寄せの手配をするようにと指示を受けた。今年の二月出発以来半年近くになる。その間身辺気忙しくあわだたしい日々だったので、短く感じられたものの三人の子供達のことにも気になっていたし、漸く手許に引取ることが出来るとあれば安心である。早速正子へ手紙を出す。移転のための若葉町三階の社宅の明渡のこと、廸子の小学校、光曜台小学校から新京特別市の春光小学校への転校の手続きをとること、家財道具類の取まとめをしておくこと等々。家財梱包と貨車積み込などは一切大連の厚生課で手配してくれるから心配無用だ。すべて完了の予定

日には、家族引連れのため大連へ出張することなどを書いてポストへ投函する。

興安大路の独身寮生活も後僅かだ。去るとなると单身生活もいい経験になったものと感慨を新たに窓外を眺める。冬、真黒になっていた窓下の街路樹プラタナスの並木も濃緑の葉が風にゆらめきつつ輝いてさえ見える。毎朝の満州新聞は相変わらず暗い報道がつづく。独軍はぢりぢり後退して白ロシヤを追われているらしい。ノルマンデー上陸の米英はパリに迫っているとか。日本も亦サイパンを失う。遠いところでの戦況でも日本軍は日々不利に展開している。大本營の発表は當にならない。関東軍の備えは大丈夫であっても気はあせるばかりである。何事もないかのように、今朝も白石將軍は悠然と白馬に乗って軍司令部へ出向いてゆく。馬の口を執る別当（馬丁）兵の姿が眼底に焼きついている。將軍の別当ともなれば優秀な兵だろうがどこの出身だろうか。ふと親がこの姿を見ればどう思うだろうかと思像する。

七月も半ば過ぎの日曜日、散歩に出る。南端の社宅に住むとなると市の中心部の辺りは滅多に歩くこともなかろうし戦時下ともあればそのひまもないと考えて独身寮から南へと独り足が向いた。東西へ伸びる興安大路と併行する小路を過ぎると、真直に南へ走る広い道があった。これを進む。この道の西側に延々と柵が続いて、その内は未だ荒れ地のままになっている。どんどん行くと、空地の南の部

分に東西方向に長い大きな建物があつた。何だろうと疑問を感じたが、すぐあつこれだ、満州国皇帝の皇城だと気がつく。然し建国からかなりの年月が経っているのに何としたことか。余りにも無防備で植え込みもなく、荒地同然の中に唯一つ巨大な建物があるだけ。これが皇城かと疑った。壕などは勿論ない。鉄骨か有刺鉄線か記憶にないが、唯柵の中はまる見えで、殆んど荒地で草が生えたままだ。満州国皇帝溥儀執政がこの建物の中に皇妃と住み、多くの延臣達、満系貴人、及日本軍人が、その重要なブレーンになっていると伝えられているが、それらしい警戒もしていないように見える。肝心の表玄関付近には余り興味がなかったのも、観察しないまま、この辺りで歩を東へ運んでいた。日本人のアパートや平屋の個人住宅が連っている。所々にあるアパートは、二階建か三階建で、これらの間にはかなりの空地があり、全体がゆったりとした感じである。広大な平原の中心の都市である。日本のようなコセコセした息苦しさがないのがよい。ただ冬の厳しさ故の石炭暖房による煤煙で、建物はどれもが薄汚れた感じをただよわせている。大連はじめ大陸の建物全部がそうなのだ。電車が走っている。いつも出勤のときすれ違った南進する電車が南新京附近で東へ曲がり環状線となり、大同大街で北進し、大同広場の三中井百貨店附近で東の満人の店の多い地帯へ伸びその後斜に北進して新京駅に達していることが判った。

南部では沢山の明き地がありそれぞれに所有者のある筈だから首都新京は未開発地帯の多い建設途上の都市であることを知る。

七月末の休日、興安大街と大路の交叉点停留所から電車で撫松路の社宅を下見に行く。黄褐色に塗られた電車は南進して南新京駅前大広場を遠く西に眺めつつ、この地点で弛くカーブして東へ左折している。この角の内側に広い敷地を持つ大きな鉄筋の建物があつた。〇〇女学校である⁽¹⁾。

将来廸子が進学する年頃になれば恐らくこの女学校に通うことになるだろうと何年か先の夢を描きつつこの学校の敷地が終る地点の洪熙街停車場で降りる。停留所附近はまばらな林で数棟の人家がある。ここで撫松路へ行く電車を待つ。次の電車で南へ、三つの停留所を経て終点に着くと、ここが撫松路である。何の変哲もない終点である。路面より少し高く土を盛り上げて線路とし、電車より少し長めのプラットには上屋もない。軌道の端には更に土を盛り上げて車止めとしてあるだけ。洪熙街からここまでの沿線の西側一帯は荒地か所々畑がある。満人が作物を作っているのだろうか人影はない。東側は洪熙街から撫松路まで軌道に沿って二十米幅位の舗装された立派な道路が併行していた。終点車止めを過ぎた地点で東西に走る道路と十字路になっている。道はそのまま少し東へずれた形で尚南へ伸びているがその先は見えない。暫くは

舗装してあるようだがその末は田舎道か荒地だろう。南正面一帯には木造の二軒長屋の棟が数十棟何列も建っている。十字路を左へ少し東へ歩む。丁度見附の東南の角には白い洋館風の小さい木造の瀟洒な家がある。その東隣に新築の一戸建て平屋が三棟あり、その一番手前が私の社宅となるものであった。それは、米国の開拓時代を彷彿とさせる建物で和式木造平屋であった。全体がライトブルーのペンキ塗り、更に東隣の二棟も又三軒幅位の道をはさんだ北側の四棟もみな同じ様式で同時に完成したもののようである。自宅の鍵で内部の検分にかかる。道路沿いには山形に切り込んだ十二cm幅の板を間隔をあけて打ちつけた柵があり、それは黒いタールで塗られていた。敷地は東西幅 10m南北約 40m二百坪を超えているらしい。北の柵をあけて敷地に踏み入る。五、六m離れて勝手口のドアがありその右側にかなり大きな石炭貯蔵庫が少し傾斜したコンクリートのままの上部に石炭投入口を持ち、勝手口近くの下方に石炭の掻き出し口がつくられている。

家は敷地の北部約 1/3 の位置に南向きに建ち、表玄関の前に畳一枚分位のポーチがしつらえてある。両開きの扉を鍵で開けて中に入る。中は一坪位の広い踏み込みがあり、右に大きな下駄箱も用意してある。一尺幅の上り框で靴を脱いで上る。玄関の間は板敷のままで、中央の三尺幅の廊下につながり、左の八畳間には床の間、次の六畳の間との間は壁で仕切

られ押入れが、その北の四畳半が台所の間となっていて、二間の押入れがある。台所間と板張りの炊事場との間には配膳窓があげられ、この下が反転式の木造穀物入れと親切な心くばりである。炊事場の次のドアを開くと便所となり、その東は風呂場であった。風呂場には入口に脱衣所が奥の風呂とガラス障子で仕切られていた。大きな風呂場には丸い五右衛門風呂が据えられ、折たたみ式の浴槽蓋まで用意されある。この釜を囲うように丸く段が作られ、腰かけて洗うことも出来る上、子供達が湯に入り易いよう充分な心配りがしてある。炊事場と風呂場の間のトイレは水洗式である。勝手口を入った右手に風呂の焚き口が設けられ、裏から更に大きな鉄製ボイラーが配管で全室のラジエーターに温蒸気を循環させるように全館暖房式となっていた。玄関の右は十畳の板敷応接間でその北裏は三畳敷きの物入れ間となっている。窓は悉く二重窓で冬の備えはまづ充分である。表の南側は日当たりのよいように配慮されているのがなによりも嬉しい。しばらく八畳間から南の空き地を眺めていると、草が一杯の空地の南の柵をくぐって茶褐色の小さい野兔が一匹玄関ポーチへ近づいて来た。息をつめてじっとその可愛い姿を見つめていると、餌をさがしてかあちらへ行ったりこちらへ来たり遊んでいるかのような様子である。その愛らしい姿にしばらく見とれている内にやがて来た道の方へ去って行ってしまった。大連へ来

てから始めてみる野兎の姿に自然がそのまま息づいているこの大地に住むことが本当に嬉しくなりました。

広い空地に樹木は一本もないが、休日には楽しんで畑仕事が出来ると独り悦に入り乍らここを去る。東隣は経理課長の北川君、北側の内一戸は技術課長の瀬戸口君が入居することになっている。家族が入居してからは、何かと相談も出来るだろうし気強いことと安心する。近い東部に満人たちの経営する市場があり、生活に必要なものは殆んどここで用足し出来るので、何より好都合と満足してこの日の下検分を終えて電車で独身寮へ帰って来たのであった。

撫松路から始発に乗る人は少ないので、腰掛けて通えるのも何よりである。電車は北へ向う。次の停留所の西側すぐ近くに小学校がある。一棟だけだが、二階建のかなり立派なもので、廸子が通うにも一停留所だけと近いし混雑もしないのが安心である。次の停留所が満州映画会社の大きな建物前である。その次が満州赤十字社前である。家族が落着いてから時間に余裕が出れば、映画を楽しむことも出来そうだし、病院も近いので万一のとき気丈夫である。洪熙街では乗換えが必要なときと新京駅迄直通の電車もあるという。直通で約三十分かかるものと承知する。洪熙街と云い、撫松路と云い聞きなれない名称だが、それは正に満州を実感させるものであった。そして新京特別市の南のはづれに住むことになった因縁

が不思議に思えてならなかった。大連の若葉町社宅は三階だったが、すぐ近く電車通りをはさんで広い聖徳公園があり、廸子の光旺台小学校は少し距離があったが何かにつけ便利な環境のよいところだったので、正子や子供達は新京へ来てどう感じるか一寸不安もなかったが、一緒に生活出来るのが第一何よりも有難いし戦時下このような社宅を与えられることを感謝せねばならない。みながこちらの生活に慣れてくれるのを願いつつ独身寮へ帰ったのであった。約半月後、愈々家族引連れのため私は新京駅から特急アジアで3時間の大連への旅に出た。曾て二年未滿住んだことのある奉天や鞍山も瞬く間に過ぎ列車は関東州の山々の間を南へ南へと急ぐ。やがて列車は迂るように大連駅に着く。大勢の日本人が車から吐き出される。夏も真盛りだが、暑さも苦にならない。他の人々と共に弧線形に作られた人道を駅前広場へと歩を進め、電車通を超えて常盤橋角の南満州瓦斯本社ビルに入った。一階営業課には懐かしい顔顔が見える。夫々に挨拶して二階庶務課に入る。お世話になった礼を述べた上、打合せをする。厚生課に挨拶をして後辞去する。常盤橋から電車に乗り若葉町に向う。久し振りに若葉町アパート三階の自宅に戻る。廸子はじめ、みんなの元気な顔が並んでいる。暫くの間に少し大きく成長したようで何よりも嬉しい。家の中は綺麗に片付けられいつでも出発出来るように準備されていた。

勤めの身なので家財道具は余り増やさな
いで来たが、社宅の造作もそれに應える
ように下駄箱も食器戸棚なども充分備え
附けられていたので荷造りして運ばねば
ならぬものは少い。その少い家財の内、
座敷用テーブル、食卓、米箱、子供用ベッ
ド等はもう梱包されていた。前日、会社
から満人社員達が来て荷造りしてくれた
という。夜具類は今夜一度使って翌朝起
きてから、食器類鍋などは一緒に布団袋
に収めて了えばすべて準備完了となり、
午前九時前には貨車積みのためトラック
が引取りに来てくれる手筈になっている。
夕方皆で公園を通過して聖徳街一丁目の叔
父佐藤末吉方へ移住報告の挨拶に行き帰
ってから楽しい食卓を囲む。本当に乏し
い食事であったがこの頃はこれが普通で
あった。白米など主食は月三週間分の配
給だし、野菜も衣料も何れも配給券なし
では手に入らない。どこの家庭も事情は
同じであった。特に関東州では内地から
の輸送も途絶え勝ちの上、満州国内や朝
鮮からの貨車輸送も軍事輸送優先なので
民間用物資はあまり入って来ないらしい。
事実、或程度輸送が出来たとしても軍優
先なので、たとえ軍倉庫に食料品が堆高
く積込まれていようとも、緊急の場合の
備蓄であり民間に廻されることはない。
すべてが軍用となれば官はともあれ民は
みじめであった。それが戦時下の大連の
姿であった。子供達も飢えてはいないが
不足気味の食糧で育ったので、可哀そ
うであった。早く新京へ落ちついて、お

腹一杯食べさせてやりたいという思いで
胸がつまる。戦時下でも満州国内では「食」
に関しては天国であった。満人の経営す
る食料品店即ち日本でいう八百屋には馬
鈴薯、白菜、胡瓜等も山積みで並べてあ
る。又白米については米穀通帳を持参し
て記録を受けることになっていたが、厳
しいものでなかった。唯肉類だけは入手
の機会が少なかった。これを考えると、
早く新京へ伴って撫松路の自宅へ落着く
ことができれば皆にお腹一杯に食べさせ
てやれる。そんな思いで頭がいっぱいにな
り乍ら、此夜をみなと寄り添って寝む。

翌朝早く梱包された家財をトラックが
集荷に来て運び去った。夜具類は起きる
と同時に布団袋に押込み、一緒に送り出
せるように準備を済ませておいた。布団
袋に手を触れるのは之で四回目で最初は
大連へ着いたとき解いたのを手始めに、
奉天への転勤と第三回目は奉天から大連
へ、次が今度の新京移転である。

大連は最初に住みついた都市だが街に
はロシヤ領有時代の名残が感じられる上
日本の租借地となってから、ふんだんに
洋風を執り入れ街造りをしたので、中国
風も混えた異色ある立派な都市であった。
日本人は当時三十万人という話だった。
満人街とはそれと判る区劃はあったが、
混在もあり表面的には平和そのもののニ
ンニク臭のある街であった。山あり海あ
り春には星ヶ浦の桜見が日本人には唯一
の楽しい年中行事の一つであったし、夏
の星ヶ浦の海水浴も亦欠かせないものだ

った。その海水浴場の入口附近で売店を出している満人から買った林檎デリシャスのおいしかった味は、今だに忘れ得ないものの一つである。日本にはこの味はない。アカシヤの並木の木影で疲れを治したこと、春を告げる迎春花の眼も覚めるような黄色は長かった冬の終りを救われたような思ひで見たこと、昨日のことのようだ。大連とも当分お別れかと、しんみりした感慨を覚え、多忙な時間の過ぎる中でふと感傷的に心のゆるる瞬間であった。

もう一つ忘れていたことがある。姑娘張桂英のことである。奉天から昭和十六年四月転勤で大連へ帰り、桔梗町から稍西の若葉町の社宅に入居して暫く後、お手伝いとして張桂英を雇うことになった。張はまだ七才の小柄な利口な子供であった。よく日本語が判り、自由に話せたのでお手伝いとしては充分だった。私方へ来る以前に、いづれかの日本人家庭に働かれていたというから、自由に日本語を使えるようになったらしい。廸子五才、武彦二才だったので、宛も兄弟のように一緒に遊びもし、身軽に家事も手伝ってくれたので至極調法な存在であった。廸子が光曜台小学校へ通うようになった頃にはお手伝いの合間に一緒に勉強し平仮名も全部書けるようになり、算数も正子に教えられ或程度理解が進んでいた。それで新京へ一緒に連れて行ってもよいと考えたが、張桂英の親が娘を手離すことを嫌がったので大連を去る日が最後の別れ

となった。

張桂英の父親は娘可愛さに時々社宅の前へ来ては三階を見上げ乍ら「張（ヂヤン）」と、大きな声を出して呼び桂英が喜んで降りていくと、自分が小崗子（満人街）で買った来た土産を渡してやって娘が喜ぶ顔を見ては自分も共に喜んでいたり、母親も亦時折訪ねて来て広い玄関の間で娘と長話をした後、如何にも安心し切ったような様子で階段を降りていく足音を何度か耳にしたことがあった。まだそのころは年配の満人の女には纏足が多く、三角形の小さな布靴を穿いていたので、階段を降りるときは踵だけで身体を支えることになり、「ゴン」「ゴン」と柔らかい鈍い足音が一階へ降りきるまで三階の部屋にまで聞えてきた。辺りは騒音のない穏やかなところなので、黒い満服をまとった母親の娘を思う心、娘の無事な顔を見て安心し切った心が階段を下る一步一步の足の運びに籠められているようにその纏足のひびきが吹抜けになっている階段の空間に木霊（コダマ）して、いつまでも私の耳に残った。そして張桂英親子の睦じい関係に、まるで美しい画を見ているかのような錯覚に囚われ心温まる思いが忘れられずに残っていた。

社宅の尾木さんやその他のお世話になった人々に別れを告げ、聖徳街一丁目の停留所から電車に乗る。大連運動場前、日赤前を経て、関東州庁前、中央試験場前、弘栄町など聞き慣れた停留所コールとなつかしいチンチンの合図に名残を感

じつつ常盤橋で下車。大連駅前広場は、日本にもない大広場で、その左右の弧状の歩道を子らの手を引き乍ら昇る。昇りつめたところは階上待合室で、日本人らで混雑していた。それは内地では見られない外地特有の雰囲気をかもし出していた。そこには戦時を感じさせない平和な空気に満たされているようであった。私を含めて家族五人の切符を買う。尤も武彦、玲子は未だ数え年五才と三才なので実質三人分の切符である。改札口を出てブリッジを渡り特急アジアの到着するプラットホームに立つ。もう既に会社からは、上司を初じめ二十数名の社員が見送りに来てくれていた。みな協和服を着て戦中帽のような協和帽子を着用していることが、非常時下の満州を象徴していた。暫くすると列車が迂るように構内に入ってきてプラットホームの所定の位置に停った。濃褐色の流線型の機関車を持つこの特急アジアは満鉄自慢のもので、当時既に時速百粍以上の快速で大連・新京間約七〇〇粍の距離を五時間余で翔ぶように走る「世界」の列車と誇っていたものであった。それが大陸の軌道を走るときは、車輪がレールから離れ浮いているとよく言われていた。

特急アジアは大連を起点として奉天、新京へと北進する大陸の幹線の代表的快速列車であった。そしてこの列車の各車両のデッキは欧米と同じように、駅のプラットホームの床平面より数十センチ高くなっていたので、列車の乗降口には

夫々の鉄製ハシゴが設けられ、之を踏んで三段ほどを昇降するようになっていた。この点が日本内地と異なり、如何にもエキゾチックな感じを乗客に与えたのであった。

正午過ぎの出発の時間が刻々と迫ってくる。大勢の見送りの人達の中には、満鉄消費組合勤務の佐藤の叔父の顔もあった。これら見送りの人達の輪に囲まれて、家族を横にお礼の挨拶を述べる。私達を中心にして輪になった人達からは、万才の声が上がると共に「お元気で」「気をつけて」と激励の言葉が口くちに叫ばれた。この見送りの人の叫びを背に、お見送りに感謝して頭を下げた後、列車に乗り込み昇降口に立った。正子是指定の席に子供を坐らせたり手荷物の始末をしている。発車間近のベルが鳴りひびく中、出発迄にはまだすこしの余裕があった。私は家族を中に残したまま列車の昇降口に立ちつづけていた。すると大連に残ることになった青木君ら若い人達十人ばかりが歓送の意を籠めて口を揃えて歌い出した。

「藁のうえから育ててよ今じゃ毛並みも揃ってる。。。」

それは初めて耳する軍歌だった。私はその送別のための歌を聞き乍ら新しい軍歌にストレートにすぐ反応する若い人達の敏感さに驚嘆すると共に中年者と若者の年令差に軽い緊張と興奮を覚えていた。その軍歌の一節が終るか終らない内にプラットは出発合図のベルが鳴り止み、車輛に近づいていた人波が少し後へ引き下

がると同時に、列車は静かに迂り出してカランカランと機関車から鐘の音が鳴りひびき出した。これは満州の列車の発車のときの特有の悠長なひびきであった。この出発のときの機関車の鐘の音はアメリカの大陸を走る列車が放牧の牛の群れを追ひ払うために機関車に設けたカウベルを模したものと云う話を聞いたことを思い出していた。

見送りの人々が高く手を挙げ振っている姿が瞬く間もなく後方に去り、大連の街も亦視界から消え関東州の半島部を一路北へ驀進しだした。車中の席に腰を下ろして過ぎた大連の日々を回顧しつつ自分の別れかと軽い感慨を覚えたものであったが、この日が大連との終生の訣別になろうとは当時は夢想だにし得なかったのである。満州の大きな平野では殆んど遮ぎるものがないので、特急アジアは益々速力を増して北上する。日本の汽車の窓の二倍もある横長の窓ガラスは二重で、その窓外では一面の高梁畑がどん後へとんでゆく。曾つて一度遊んだことのあった湯崗子（トウコウシ）の小駅も、鉄の街、鞍山も早や過ぎ、広い奉天駅に着く。流石に有数の工業都市としてその名を馳せているせいで、昇降する客も多くプラットには夥しい日本人、満人が右往左往し混雑している。ここは昭和十四年暮から十六年春三月迄一年数ヶ月住んだ街で、又武彦の生まれた大和区朝日街壹段九拾貳號の家があり、平安広場の支店や千代田公園も頭に浮ぶ。数分の停車後列車は

奉天駅を離れ一路北へと進む。奉天より先は初めての旅なので、特急アジア二等車の窓から見る景観はすべて物めづしく、眼をこらして見入っていた。

発車してどれほどの時間が経ったか。アジアは重く快い車輪の響を立てながら走っている。すると、ほんの一瞬であったが、東側窓近く数本の木立に四、五羽の鳥が羽撃いているのが見えた。黒いのでカラスかなと見た途端、それぞれが胴のあたりかに、白い羽毛を持っているのが見えた。それは鵲だった。後にも先にも満州で鵲を見たのはこれが初めの終りだった。

小学校二年生の廸子は、親子揃っての旅に嬉しそうに瞳を輝かせて正子と話したり、弟妹の世話をしている。幼い武彦と玲子は唯無心で座席に上ったり腰を下ろしたり、それぞれに安堵の色を顔に表して楽しげであった。四平街の上屋のない長いプラットホームも一瞬に後方に過ぎた。行けども行けども果しない高梁畑がつづいている。こんなに広大な土地を徒手で開墾する満農の絶間のない必死の努力の跡を見るにつけ、底知れない人間の営なみの大きさに驚嘆するのであった。

同じような窓外の風景がつづく中、午後五時半前ようやく列車は新京駅に到着した。「新京」「新京」の駅名を告げる声に乗客はみな夫々の手荷物をまとめて席を離れ昇降口へ急ぐ。正子は玲子の手をひき、武彦にも銘々の小さい荷物を持たせ廸子が出口へ導いてゆく。高い昇降段

を離れると新京駅の広いプラットホームであった。私たちの降り立った新京駅のプラットホームは、開札口と出口との丁度中間地点であった。駅の広い待合室には、多勢の日満人たちの乗客が列車の時間待ちをした後、開札口からプラットホームへ出て行くように設けられているが、列車から降りた乗客はみな待合室の外である南側に木柵で作られたいくつかの出口へ向い、ここで切符を渡して外へ出るようになっている。

私達がこの出口から外に出ると、本社から樋口（克己）文書課長をはじめ人事課の松村君や其他数人が出迎えに来てくれていた。これらの人々に出迎えのお礼の挨拶をした後すぐ、私たちは本社の用意してくれた一台の乗用車で撫松路の社宅へ直接向かうことになった。広い新京駅前広場は、多勢の人々が入り混って右往左往動いていた。出口の前附近には、十数台のヤンチョがみな揖棒を西向きに下ろして一列に客待ちしていた。私は樋口君らにお礼を述べて家族を促して車に乗り込んだ。出迎えの人たちに見送られて車は走り出した。運転手は鈴木久雄君という実直な青年社員で、いつも社長を乗せて駆けているので運転は至極上手である、車は滑らかに興安大路を南下して行く。興安大街との交叉点から南は先日社宅の下見に行ったばかりなので殆んどは目新しい地帯である。電車通りの両側にはみな平屋建の日本人の住宅がつづいている。僅か南新京広場に近く、〇〇女

学校の北辺には数戸の満人の小さい土の家が並んでいた。乗用車は間もなく洪熙街の停留所附近を一路南下し満映前を過ぎ右手西側に春光学校を見ながら走りつづけ電車の終点を左折したかと思う間もなく撫松路の自宅裏へ到着した。私達が降りると運転手の鈴木君はすぐ車を発して帰って行った。私は正子らと共に柵内に入り南側表玄関口から屋内に入った。新築のままなのでガランと殺風景ではあるが、綺麗に掃除されている。厚生課の向畦地俊雄（ムカイアゼチトシヲ）君の心配りが嬉しかった。会社へ出たとき、忘れずによくお礼を云わねばと心に刻んでいた。

正子も子供達も新しい住み家の部屋を見て廻ったのち台所の間四畳に手荷物を下ろした。やっと辿りついた安住の宿にみんなで安堵し切った身体を休ませた。

しばらくすると裏にトラックの停る音がしてざわめく人声が聞えてきた。それは家財道具を運んで来てくれた会社のトラックである。何人かの満人社員が積荷を降す声がする。それを察した私はすぐ靴を穿いて勝手口を開けて迎えた。頑丈な木枠で梱包されたのは、二人がかりで勝手口から中へ運び玄関の板の間で梱包を開きにかかった。布団袋はふたつを夫々一人が肩にかつぎ奥の六畳へ持ち込んでくれた。五、六人の手でアッと云う間にすべてが終り、本箱は応接室に据えられ、テーブルや食卓は奥の間に木枠をはずしてから持ち込まれた。すべての仕

事が終わってから、せめてお茶だけでもと思っても全部が布団袋の中とあってはそれと思ふに任せず、唯彼等に厚くお礼を述べるばかりだった。満人社員達は又いつもの事だと云わんばかりに手早くバラされた木枠などをトラックに積込むと感謝の気持一杯で見送る私達を後に手を振りながら引揚げて行っていった。それはもう夕方七時を少し廻っていたが、新京の夏はまた明るかった。私達は憩う暇もなく布団袋二つを解き、布団はふたつの押入に、又布団の間にはさんであつた瀬戸物の類、ガラス器などは食器棚へ。僅かばかりのお米や食糧はキッチンへと、みなが総動員で手伝って仕分けしたので短い時間で片付いて了った。廸子は学用品をテーブルにのせ、武彦と玲子は僅かのおもちゃを取り出したり衣類を並べたりしていた。書籍箱の整理は翌日廻しとし、正子はみな衣類を整理し押入れに仕舞い込むとどうにか格好がついたので、四畳半の間に丸い食卓の脚を開いて据えつけ座布団を並べてヤレヤレこれで全部が済んだとばかりみなと安堵の顔を見合つたのであつた。通常はほっとしてすし屋からでも出前を取り寄せるところだが、そんな贅澤は戦時下のこととて忘れていたし、又気がついたとしても注文する店もない。正子は子供達の衣類の整理を終ると、すぐ立ってすぐ隣のキッチンで有り合せのもので炊事に取りかかった。少しばかりのお米は米櫃へ入れておいたので、その中からお米を今取りだしたばかり

りの鍋に入れて洗ってからガスコンロに火をつけた。又別の茶罐に水を入れ沸かし出した。もう八時を過ぎていたが外はまだ明るかった。お湯が沸いたとき急須に茶の葉をいれてみなで呑んだ。本当にホッとしてしみじみとお茶を味いつつ無事の引越を喜び合つた。間もなく少い御飯の用意が出来、それこそ又有り合せのもので夕食の箸をとり、どうやら空腹がおさまった頃にはうす闇がただよいだしていた。新京の夏の夜は暮れるのが遅くすっかり辺りが暗くなる頃には時計は十時を過ぎてからである。それだけに一日が長く感じられるのだったが、それは緯度が高いせいだろう。子供達も長旅で疲れていたもので、六畳の間に床をとり寝かせつけたが夫々に興奮しているのか、仲々寝つかず何か笑つては騒いでいる。まだぼんやりと明るいせいだろうと、なすがままにして私は正子と数少い家財の整理に時間を過し、就寝したのは十二時過ぎであつた。騒いでいた子供たちもすっかり熟睡している。

この地にいつまで居ることになるのやら先のことは判らないが無事に育つてくれるよう願う親の心に映じたのは、無心の子供達の寝顔ばかりだった。外は夜ともなれば人も通らず物音一つしない静寂の深い闇に包まれてゆく。こうして撫松路の第一夜が過ぎて行つた。

翌朝正子は六時前起き出して、隣の炊事場に立ち朝食の準備を始めていた。七時前に私も目覚め夜具を押入れに納め

着換えを済ました後、子供たちを起す。みな旅の疲れというより、環境の変化と家事手傳いやらで、ぐっすりとよく眠り足りた目を覚まし、それぞれに着替えて洗顔に集まり、正子に何やら指図されてガヤガヤと嬉しそうである。日は既に昇り、子供達の起きたあとと六畳の間を明るく照らしている。今日も又暑くなりそうだった。台所の間で丸い食卓を囲み朝食をすます。落付くところに落ついて、家族団欒の生活が始まった。

今日一日の休暇で、部屋の整理ほか種々の仕事を終らねばならない。正子は食事の後始末のあと、子供たちに手伝わせながら衣類や食器の整理を始めた。私はまづ玄関に表札を取付けてから応接間で書棚へ書籍やノート類を並べる。ここには大きなソファが一つ用意されているが、書棚を隅に置くと、あとは広々として何だか物足りない。大きな絨緞があれば寒々とした感じの板の間も心温まるのだが、いつ何処へ転勤するか判らないので我慢することとした。家中すべての部屋の採光のために窓は寒さに備えて全部二重窓となっている。しかも戦時中の灯火管制のため黒木綿の暗幕が用意されていた。全部の電燈は白いガラスの傘の上に黒い防空幕がつけられてあった。

それから家の中の仕事は正子に任せて転入の届をこの地区の区長の家へ出さねばならない。靴を穿き表玄関から裏口の木柵の出入口を開いて西へ向う。西隣の白い木造の洋館風の小暮さんの家を過ぎ

ると右側は電車の終点で、左側一帯は稍高台になって二十棟位の二軒長屋がずらっと並んでいる。これが日本人警察官官舎と知って心強い。終点とこれら官舎群の間には十m幅位の道が西へ伸びてその先に大きな広場がある。それを囲むように多くの木造住宅が並んでいた。その道路のつき当りの区長の宅で転入届を済ませた後、電車で次の停留所まで行き、線路を横切って春光小学校へ廸子の二年生の転校届を出し手続きを終わってから引返す。西隣の白い洋風の家は戸主は和田日出吉という人で満州新聞の社長らしい。その夫人が女優の木暮実千代さんと知る。同じ隣組だし何かと世話になることであろうと考えながら自宅へ戻った。家の中は子供らの声でにぎやかで、半年待った甲斐があったと満ち足りる心になる。少い家具もそれなりに収まりどうやら家の恰好がつく。午後は正子を伴い市場へ行き当面必要なものを買って整えて帰る。市場は満人の店が並び米や野菜など豊富でいつでも欲しいだけ買えるのが何よりだ。唯肉類と酒は手に入りにくいという。帰宅後は附近の様子、小学校のこと、日赤のこと、満映のこと等を地図を示し乍ら家族に話しておく。

私の社宅の列が新京特別市の最南端で、更なる南は見渡す限り畑や荒原が広がっている。南東には珍らしい大きな森が見えるし、その近くに南湖があるらしい。又森の向うには建国大学が地図に示されている。この大学には彦中の先輩で、私

の神戸の学生時代には数々の逸話を残しながら、卒業後お互い住む世界が異なったため疎遠となった筒井清彦君が同大学の教授として赴任している筈なのでいつか時間を割いて訪れて旧交を温めようと秘かな楽しさを覚えていた。新京最南端の家々にも水道があり便所は水洗式で、日本内地では考えられないほど近代的であった。それに冬は会社から石炭よりも火力の強いコークスを運んでくれる。頑丈で大きなボイラーが勝手口の土間に据えられて、全部の部屋のラジエーターに蒸気を供給出来るよう配管されていて厳寒時にも万全の設備であった。ガスは勿論、石炭ガスが南新京の近くのガスホルダーから供給されているので何も心配することはなかった。このようにして、大連から新京への転居が無事に終り、新居での穏な生活が始まることになった。

冬の首都

新京の夏の朝は乾いたぬくみの中で夜が明ける。葉に夜露が下りる現象は全くない。このことは大連も奉天も同じだが、北になるほどその度合いが高く、朝起きてもしっとりとしたものが感じられない乾燥した空気が感じられた。六時に起き、独り朝食を済ませると今日からは出勤だ。子供達の目を醒ます頃にはもう協和服に身を包み七時前に家を出て撫松路の終点へ出た。二、三分の距離なので電車が迎えに来てくれる自家用車の感覚である。

待つ間も少く到着した電車に乗り込む。初乗り客は十人前後でみな座席に腰かけ洪熙街まで十分あまり、この停留所で降りて、次の環状線の東から来る西廻りの電車に乗り換えて南新京駅を左にながめながら北進し、更に十分たらずで興安大街の広い交叉点を過ぎる。曾て山田乙三関東軍司令官が白馬で軍司令部へ向かう姿を見かけたあたりを進み、第一師団司令部の手前で下車する。ここではかなり多くの人が降りるので、電車はこのりの客を乗せたまま新京駅前へ向う。一方、電車を降りた人々はそれぞれの方向に散り勤務先へ向う中、私はそのまま北の羽衣町へと歩をすすめた。興安独身寮の若い人達とも出会い、一緒に本社の門をくぐり八時前に出勤することになる。今の夏も盛りには緑は豊富となり、構内社宅も＝恵まれた環境にあった。だが、入口の門内に数本の木があるだけの本社構内は、コンクリートの塀に囲まれた鉄と土と石炭の灰色の世界、加えて雨は殆んど降らないのでどことなく埃っぽい。乾燥する大陸での平年は降雨量が少いから、洋傘（カラカサ）がいらないのは助かるけれど、風がないのは息のつまる思いがする。二階の人事課の部屋も日中はムッとしてかなり蒸し暑い。汗が発散しないので、尚更その感じが強い。仕事の合間に構内を見て廻る。中央近くに大きな水槽式ガスホルダーが設置されている。ここから市中へ地下の本管が伸びて次第に分枝し各戸へガスを供給する仕組みに

なっている。満鉄本線に近い構内北の部分には石炭乾溜用のレトルトが並ぶガス製造所となっていて、煤で黒く汚れた日満人が真夏でも汗にまみれながら、真赤なコークスを掻き出す作業に県命である。広い製造所の内部はムンムンとした熱気が立ちこめている。

ひと通り見終って、ここを出ると流石にひやりと冷気を感じる。外には引込線の貨車から放り出された石炭が山のように野積みされている。それが自然発火で中央部の下積みの石炭が火となり煙を上げているのが見えるがそのままに放置されていた。これと反対の東側の構内では、苦力（クーリー）用のアンペラ小屋がいくつも作られて、非番の苦力たちが思い思いに休息しているのが見られ、上半身裸で土の上に敷いたアンペラの上に寝転がっているもの、汚れた衣類を水道の蛇口で洗っているものなど様々である。彼等は殆んどが山東省辺りからの出稼ぎというが、日中戦争の最中、何だか無気味な感がする。然し彼等の労働力なしでは工場も動かないし他に選択の方法はない。労務管理は大阪外語卒で広島県呉出身の労務課長田中千代三君や厚生課長で満語に堪能な向畦地君が担当し、おさおさ怠りなく細心の注意を払って世話しているので、手落ちのあろう筈がないと我点して通る。けれども、この頃は満間又日中関係の裏面情報は殆んど入らず、特に満語も中国語も解らない私は、際疾い民族間抗争がどす黒い渦のように、裏面で熾

烈に展開されていることなどは知る由もなく、又假令多少の情報を得たとしても、大きな奔流の中の一粒の泡の如き存在に過ぎない身では唯流れに任せる外に途はない。事実後日それが現実の問題として日本人全体に大きな禍いを齎したが、この時点では心の隅に不安の影を見たとしても何事もないように祈るより外にどうしようもなかった。そんな空気を和げようとしてか、九月に入ってから中国の村芝居の興行が、構内中央の空地に幕を張り行われた。それは大勢の満人、中国人労務者の慰労を目的として催された。中国の芝居は、以前に一度奉天で見たことがある。騒がしい笛太鼓やドラの音に混り、甲高い声色で演じられる中国芝居の内容は全く判らなかつたが、どうやら勸善懲惡を主としたもので、それが民衆に受けるものらしかった。

午後の数時間をこのようにして労務者の慰労に充てることは、田中千代三君により計画されたもので、その成果の有無は芝居に見入る苦力たちの顔々に和んだ色が浮かんでいることに証明されていると、いくらか気の休まる思いをしたことであつた。九月には人事異動発令と昇給辞令で人事課は多忙であつた。部課長以上の異動については竹中社長の指示に基づき原稿を用意の上、社長の決裁を受けて発令し、又社報にも発表する段取りだったが、その範囲は満州国内の本社並に支店及び南満瓦斯にも及びその全部を包括して行うので大規模となる。又各部課及

支店所属の主任級に就ても夫々の所属長の意見を参考として社長により決定されたのでこれらも同時に発令した。既に四十年以上を経過し、記憶にも的確さが飲ける部分があるかもしれないが、大凡このように＝＝度行われていた。

昇給に関しては本社では、各部課長に基準を示して、その所属部員に関する内申を求め人事課に於て之を取まとめ、各所属による不均衡の有無を見た後、社長の決裁後九月下旬以降に夫々に通達した。各支店及大連に関しても同様の取扱いであった。又各部課長及び支店長等の所属長に関しては現在に於ける待遇を記した一覧表を社長に提出して、その直接の加筆を以って決裁とし之を発令したように思う。この点漫然としているので誤があるかも知れない。昇給についても同様の手続きを経た後、人事課より各所属長に通達し十月の給与に間に合うように手配したことであった。

尤も本社に於ける一般職員の給与は、すべて人事課で現金を袋に封入する作業を行うため、その総額についての各金種別必要額を経理課に連絡して、その調達を受けた後、之を各個別に記名の袋に封入後、全部に就ての誤なきを確認した後、各所属毎に袋を届ける作業を終了する迄は緊張の連続であった。尚日本人に就ては、職員として円単位の月額が支給されてたが、満人はすべて傭員であり給与は日給であり、銭単位で計算される差があり、すべてが肉体労働者であるため程度

の差は已むを得ないものとしてもその待遇の隔差は余りにも歴然として存在し、五族協和が唯の看板だけにすぎないものであるとの不自然さが感ぜられないでもなかった。だが、又それは日満双方のGNPの反映で、已むを得ない面もあったのではなかろうか。

二学期となり、二年生の廻子は電車で一区間を通学することにも慣れ、男女組一クラスの三十余名の生徒と共に勉強する毎日を送るようになり、新居での生活もどうやら軌道に乗って来た。初の新京の厳しい冬を迎える前に、氣の付いたこと、他人から聞いた話などを正子に伝え、お互いの心構えを相談しあったのもこの時期であった。

新京の秋は短く、すぐに冬の足音が聞えてくる。そして十月に入ると、もう寒さを意識する季節となる。人事異動などの仕事が一段落したのち、これから初めて経験する冬をどう過すかを考え始めたころ、会社で「越冬野菜」という言葉を耳にするようになった。それは、冬の生活を成行に委せておけば、社員がみな冬の野菜市場の値段の昂騰に悩まされ、社員生活の平穩を脅かされる虞から会社でその対策を樹てることになっていた。どの会社でも同様であったか知る由もないが、我が社の厚生課では「越冬野菜」として白菜、馬鈴薯、南瓜、甜菜大根を選び、翌年春の野菜出廻り迄の一冬期間の必要量を記入して申込めば、野菜の値段が安く安定している間に一括して買付を行い、

十一月中には注文通りを各社宅に配送するというもので、その代金は給与から差引いて徴収するという仕組であった。これは生活物資の内、野菜でさえ一般配給であった大連に比べれば、全く夢のような話であった。又以前住んだ奉天では米、衣料等は夫々通帳、切符による配給であったが、一般野菜は自由購入出来たので何も心配なかったのに比べ、新京でのこの措置は全く初めての経験であった。それは奉天よりも更に一段と厳しい新京の冬は寒さ故に、社員家族が外出さえままならぬ時もあること、社宅の所在と市場との距離の問題、厳寒時の野菜市場での供給も不安定なことなどを考えるとき、本当に有難い措置でその斡旋が嬉しかった。

独身者は兎も角、有家族社員はみな必要量を申込むので私も正子に相談の結果を記入して斡旋方を依頼しておいた。それは十一月になってから、注文通りの越冬野菜が夫々の家庭にトラックで配達された。撫松路の我家へも北川、瀬戸口の二軒と一緒にトラックで届けられ、山積みの野菜が満人社員によって麻袋で表玄関から戸内へ運びこまれてきた。帰宅してその野菜の山を見たとき満足の安心と大きな喜びを禁ずることが出来なかった。子供達も玄関の土間や板の間に積まれたそれを物珍しげに見ては親の喜びが判るのかみな嬉しそうだった。

これらの内、南瓜は応接間の板敷の上に並べることにし、子供らも手伝ってこ

の作業を完了し、その他の野菜は応接間の次の三畳の間の床下の簡単な穴庫へ収めることとした。その野菜庫は畳一枚をあげ床板をはぐと床下に貯蔵庫が作られていたので、そこへ新聞紙を敷き並べ白菜も馬鈴薯も大根もみんなで運び入れ保存作業が終了した。けれども、ここは床下であっても外部からの風が入らないこと、家中一番温度変化が少ないので、最もよい場所としてここに設けられていた。

私は子供達の手伝いを受け、この作業をしながら昭和十八年二月のまだ寒い日曜日の朝、大連で人事課の同僚、高橋直君（大分県出身）や倉田豊君（熊本県出身）らと満人果樹園主から林檎の分譲を受けるべく電車に乗り、星ヶ浦の北、黒石礁まで行きここから徒歩で少し山奥へ行ったときのことを思い出していた。白米の配給が少ない上、野菜までも配給で量も僅かで、子供達のお腹が一杯になったことはなく栄養不良気味だったことを心配していたとき、人事課の高橋君から、或る満人が林檎を賣ってくれるから一緒に行かないかと誘われ、天の助けとばかり同行することにした。大きいリュックサックを背負い、寒い白波の星ヶ浦の海を左に見乍らの買出しの旅であった。黒石礁で電車を降り、少し東北方向に歩くと道らしいものは殆んどないところを小川の川床を足場にしながら進むこと小半時、目指す満人の家に着いた。その老爺は黒光りに汚れた大衣の姿で私達を迎えてくれた。その老人は歯の抜けた口を

一杯に開け笑顔で、わざわざ訪ねた私達をねぎらうように土の小さな家に招じ入れてくれた。小さな土の家の中は土間になっていて、その正面に小さい形ばかり祭壇をおきローソク台や花瓶のようなものをおき、神か仏かの画が懸けられていた。招じ入れてくれても腰かけもなく、立ったまま高橋君が片言の満語で話をする。それでも判るのか老爺は笑顔で合槌を打っている。間もなく現場へ案内してくれるらしいことが仕草でよく判ったので、三人は老爺の後について行く。歩くこと五分ばかり山影の横穴が見えてきた。ここが貯蔵庫であることはすぐ察せられたので招くまま穴に入る。それは横幅二間、奥行四、五間の山の横穴で、奥は腰をかめないと進めない。この穴の地面上にずっと高粱殻などを敷きつめ、その上に沢山の美しい林檎が転がされたまま山になっていた。久しくリンゴを見ない私は唾を呑んだ。ああこれが持って帰れるのかと本当に嬉しくなった。他の二人同様私も持参のリュックサックに詰めるだけ詰め込みはしたが、欲の塊を背にしたものの起き上がれない。やっと助けて貰って立ち上がり、みな代金を老爺に支払ったのち、お礼を言いつつ又もと来た道を引返して歩いた。途中は草一杯の川幅二尺ばかりの川床を注意しながら歩いた。冬のことで、わずかな水は氷となってツルツルで靴がすべって歩き難い。とうとう転んで了った。今度もまた起きようと頑張っても立ち上れない。遂に二人に

助けられて起き上がり、黒石礁で再び電車に乗り、大正広場で二人と別れ次の若葉町で降りてから三階の社宅へ辿りつくのが、ヤツとのことだった。米のご飯の外に子供達に林檎を食べさせることで多少なりとも栄養をつけさせることが出来、ほんとに救われる思いだった。又同時にこんな思い出もあった。それは奉天での冬のことである。大和区朝日街壱段の四戸建の二階にいた頃、矢張り野菜の入手が出来なかったある日、丁度二階から外階段を降りたところにあつた小さな満人の何でも屋で、いつも買い物していた正子が、その店の満人主人に野菜のことを話したところ、その満人が世話をしてやるという。その時もリュックサックを背負い友人と二人、その満人に随って近くの渾河（コンガ）の橋を渡り十数分歩いたところの満人農家に着き、そのすぐ近くの地下倉庫の野菜を買って帰ったことがあつた。この地下倉庫は、唯身体の入るだけの穴を地面に穿ってから一間ほど梯を下りると、地下では大きく掘り広げ、三坪ばかりの地下倉庫とし多くの野菜が貯蔵されていた。どれも水々しい新鮮さを保っているのを見てびっくり、昔から伝習で、地下に貯蔵する方法を知っているのを感じたり驚いたりしたことである。それは古い歴史と伝統を持つ民族の底力、人間が環境に合せてどんな智恵でも絞り出すことの出来る測り知れないその能力を頼もしいものとして心に刻む一日となった。この様な過ぎ去った日の経

験を思い乍ら、越冬野菜の貯蔵作業を終わったが遠く離れた南端の社宅のこととて訪れ来る客もない気易さから、まだかなりの馬鈴薯が玄関の板の間に並べたまま残っていた。

「越冬野菜」が分配され、各社宅毎に運ばれる頃には、冬の燃料としての石炭に代るコークスが何れもの社員の家庭の石炭庫に満されて行った。瓦斯会社として石炭乾溜のときガスが造られると同時に石炭のダシガラと云うべき多量のコークスが生産され、之が製鉄用燃料として、その燃焼温度の高さが利用されるのであるが、それは新京では家庭用暖房燃料として、社宅にのみ屯当り幾何かの値段で配られたのであった。我家にも本社製造所からコークスが驪馬（ラバ）の牽く馬車（マーチョ）によって遠路はるばる運ばれて来て、裏側の石炭庫を一杯に満たして呉れた。こうして冬がいつ厳しくなっても何の心配もなく暮らすことが出来る準備が完了した。

やがて冬の気配が厳しくなる頃、正子は起床すると同時に前日から用意しておいた石炭バケツのコークスを沢山ボイラーに入れて点火してから炊事に取りかかるのが日課となった。ボイラーへは朝、昼、夜の三度か時には夜半にも一度位、コークスを増し焚きしておけば一日中蒸気が配管により各部屋を巡り、冷めた水滴は再び還流してボイラーに集るような施設となっていた。炊事場も便所もすべて暖められ、家中どこに居ても寒さを気

にすることはなかった。

冬の歩みは早く気温はぐんぐん下降してゆく。廻子は用意のシューバを着用して通学するようになり、武彦、玲子は外出することなく、家の中で遊んでいた。正子も市中へ出ることもなく日用品は近くの市場でこと足りていた。真冬には朝出勤のため家を出るとき、頬を突き刺すような痛さを覚えるようになる。これが新京の乾いた冬の寒さで、雪は殆んど降らず、降れば本当の粉雪でわづかに地面を白く塗りこめる程度である。そしてその降った粉雪が昼間になっても奉天のように融けないで、風が吹くままに動いているほどに気温が低い。まだ若かったのでこの寒さも殆んど苦にならず出勤する毎日がつづいた。日によっては直通の電車で、又時には洪熙街で乗り換えることもあった。電車はボギー車という矩形の車体ではなく、昔京都あたりで見掛けた下部の内側にこけた所謂チンチン電車型であったし、乗客も満人を混えての和やかな気分満ちたものであった。又時には満人の工人だけを乗せた工人電車を見掛けたことがあったが、それがどこから来てどこへ行くのか工人とはどんな人達なのかは知る由もなかった。

我が家の前の空地もうっすらと白くなり、それがいつまでも白いままで消えようとしない。こんなときは外を歩く人は殆どなく天地の間、生きているのは我家の五人だけかと思はれるほどの静けさであった。寒くなれば出勤で会社へ行く以

外は殆んど外出することはなかった。しかし頭髪だけは何のお構いもなく伸びる。ひげは安全剃刀で剃れるが、頭髪だけは何ともならない。幸いに満映の近くに朝鮮人の理髪店を見付けておいたので、その度にこの店へ行くうちに、店の主人とも心安くなりお金を払ってからもお客の少いのをよいことに何かと世間話をして時間をつぶすようになった。日鮮親善というのも、此の時代としてはおかしいが、仲よくするのは快よいものだ、色々知らなかったことを教えて貰いその度に楽しい思いをしたことだった。キムチを知ったのも此頃で、その主人の奥さんが五升坪位の容器に野菜や魚を真っ赤なとう辛子と一緒に沢山漬めこむのにびっくりし、朝鮮の人には之がけつ飲かせないものだとしり二度びっくり。日本人の漬物と同様かなと感じたが、しかしこんな辛いものがよく口に入っているものと驚嘆するばかり。でもキムチを食べたら胃がやけて了うだろうし、第一呑み込む前に口が受けつけないだろうとその良さが到底理解できなかった。

或る十二月に入ってからの日曜日、寒さにも慣れたから手伝い、幼い武彦を連れ、凍った道を散歩に出たことがあった。西の方、あの区長の家のもっと西の方に、小さい林があるのを見つけ、興味も手伝って入っていくと、珍らしいことに多くもない木と草むらに隠れるようにして、ほんの少しの水たまりらしいものがあり、ここに沢山芹が群生しているの

を見つけた。それは大きな驚きであった。こんな乾いた大地の中に泉があるとは、或いは、まだ見ぬ南湖がある地層の関係からかなとも想像したが、多くの草が生え芹が育っているとは大きな発見でもしたように嬉しくなり、尚しばらくその辺りを歩き廻ったのち帰宅したことであったが、冬のこととて、兎の姿もその他の動物も全く見かけることはなかった。武彦にどんな防寒衣を着けさせていたか今は全く記憶がないが、毛糸で編んだ防寒帽と首巻きが一体になっているのを着けさせていたことは確かなのである。

私は元来冷え症のため厳冬となると普通の手袋では指が冷たくてつらいので、兎の毛皮で造られた内側に毛のある手袋を使っていた。靴は普通の黒の牛革のものでは冷たくて足指も凍るようで我慢できなくなり、やはり内側に毛の付いたものをとさがしたが、戦時中とて革製品は殆んど見当らない。三中井百貨店でやっと見付けた毛の靴は、表面に穴のようなブツブツのある見たことのない皮の製品だった。それは豚皮の靴で内側には沢山の毛があつて温かそうであった。一種類しかないので選択の余地は全くない。之を買うしかないと代金を払ふ。買つてはみたものの通常の革靴より目方は軽いし、なんだか恰好も悪い。豚にこんなに沢山の毛があつたかしら、兎の毛が張り付いてあるのかも知れない。兎に角これしか無いのだからと、翌日からこれを履いて出勤した。足許がフワフワして軽くて何

だか変だが、流石に普通の革靴よりは、足が温く軽い足許を気にしながらの出勤だった。冬も十二月となれば、もっと雪が降るのかと恐れる半面どんな風情かと楽しい期待もあったが、カラカラに乾燥した大陸の空は青く晴れて冷く時には粉雪がちらつくだけで少し物足りない。

冬の賞与の支払いを終ったある日、松村君や羽藤君などが夕方退社したあと、独り残業して記録の整理や他の後始末をゆっくりやっている内に、文書課も経理課も誰一人残っているものはなくなった。仕事を終えてからストーブの火の始末をして外に出たのが十一時すぎ。羽衣町の通りを東へ満鉄消費組合の横へ出て、新京駅前のヤマトホテルの林の前の電車の終点停留所に立ったとき、時計を見ると十一時半、最後の電車を待つのは私の他に一人いるだけ。真冬の新京の夜は流石に辺りも暗くなり冷え込みも強く、シンシンと足許から脛へ、股から下腹部へと凍るように体の熱がなくなっていくのが感じられる。待つときは仲々電車が来るのがより遅く思える。果して終電車は来るのかなと疑問にもなる。若し電車が来なければハイヤーなどない、どうしようかと些か気になり出す。もう身体の熱は殆んどなくなってしまった。服もオーバーも着ていないようで、ただ冷いものが身体に巻きついていっているようである。余りの冷たさに足を交互に踏みならし、地団駄をふんでも冷たさに変化はない。本当に背すじも全く凍るように冷かなくなってっ

た。このときふと彦根中学の五年生のとき英語の副読本（サプリメントリーダー）の文中に chilled to the bone の語があったことを思い出した。あの文章はこのような寒さ冷たさを表現する言葉だったのかと感心しつつ飛び上っている。待ちあぐんだ頃ようやく撫松路行の電車が来た。地獄に仏とはこの事かと嬉しくなり早速飛びのった。乗客は二人だけであった。この夜中途中からの客も全くない。そして撫松路で降りたときは私一人だけとなっていた。勝手口から家に飛び込みしばらくは物も云わずただボイラーを抱かんとばかりにして身を温めるが、骨まで凍りかけた冷たさは解凍するのに時間がかかる。お茶の間に坐り温い緑茶をすすり込んだときは、ヤレヤレ助かったとホッとしたんだったが、流石に夜半の冷え込みは厳しいものだと思感したとき、時計はもう一時を指していた。子供らはぐっすり眠っていて聞こえるは健やかな寝息ばかり。無事に帰りつけたことの喜びをかみしめる一夜がこうして更けて行った。

九月新学期になって、春光小学校へ通い出した廸子は早や三ヶ月間電車で登校し新しい学校での男女学級の友人たちともなじんで、毎日楽しく通うようになっていた。本当に寒くなった頃からは、シュエバを着て毛綿の帽子をつけすっかり新京っ子のなり切った顔して、背中の中のランドセルも軽げに登下校する様子に正子も安心してた。帰宅すると弟妹たちの

相手をしたり、家事の手伝を豆々しくする傍ら勉強にも励むいい子だった。そして冬休みの二十四日頃からは、一人前に正子の云う通り何でもするようになったので、姑娘張桂英がいなくても万事がうまく捗るようになり正子も大満足であった。

新京の正月をどんな風に過ごしたか、記憶がなくなってしまったが、お正月らしい飾りもすることなく三十日からの休暇、三日迄の休みの内元旦に朝、会社へ出て新年の挨拶をする外は全くのんびり休養することが出来た。明けて廸子は九才、武彦六才、玲子四才みな病気もなく、こちらへ来てからは食料の心配はなくなり子供たちに十分に食べさせることが可能になり、もやし子のようにだったのが何れも顔色もよく体力も増して、親としてこれ以上の喜びはなく、毎日が明るい雰囲気満ちて幸せだった。曾て大連では、戦時下での統制経済で物資配給が次第に激しくなりながら、日本人が圧倒的に多い社会なので、それなりに正月の風情が色濃く出て神社詣りをする人、寺参りをする老人たち、或いは映画館へ出掛ける若者、家庭では麻雀、トランプ遊びで、それぞれの時間を楽しむ風景が残り、若い娘さんの晴着姿が更に一段と雰囲気と和ませるものがあった。その意味では、遼東半島の一角の日本人都市が醸し出す和やかさに満ちたものが残っていた。けれども、日中戦争大東亜戦争と時局が逼迫する中、新京では日本人の人口密度も小

さく厳しい寒さの故もあって、屋内での時間の過ごし方に各々の趣好はあるとしても、それが都市の正月の風景とまでなりきらない淋しさがあった。

尤もこのように正月の淋しさを云う時ではなくなっていた。東京は米機の空襲で焼野原同然となり、大阪も名古屋も被害が次第に深刻化している。南方では、フィリピンのレイテ島をやられ、ルソン島も奪回されたそうだし、第一日本は航軍機が足りない上に、敵機襲来に応戦する高射砲はあっても、敵機の高度まで弾がとどかないので必死に応戦しても戦局の帰趨はもう目に見えている。欧では独も守勢になり、V2 ロケット弾で英国を奇襲したところで敗色を挽回するには至らない。ソ連は対独戦の勝利と確信するに至っているらしいから、独降伏は日本に大きな影響が来るのが目に見えている。手薄になった満州及日本本国にいつ襲いかかってくるか判らない情勢となってしまった。

日本は、なぜこの無謀な戦争をはじめたのか。満州の目と鼻の先で危険が迫ろうとしているのに、関東軍もそれに対して有効な手段を講じそうもない。このような結末を予見出来なかったのか、全く話にならないお粗末さである。勝目のない戦争なら、早く手を打ってこの国民の苦しさを除くのが政府の責任ではないのか。勝ちに乗じた米軍機が大連や新京の爆撃にやってくる日も近そうだ。ソ連の動きを関東軍はどう考えているのか。新

京の街を闊歩する軍人が、次第に玩具の兵隊のように見えてくるが、そのことは口に出して云うことは出来ない。憲兵の鋭い目が光っているので、迂闊に云えば大変なことになる。いつの時世にも軍人の威張る時代には民間人は言葉もなく小さく縮み上がっているばかりである。

三学期に入り、何事もないかのように廸子の登校が続く、一段と寒さも加わった或る日の午後、正子が近くの市場で買物をすませ勝手口から帰宅すると、何としたことか、玲子がひとり泣きじゃくっているし、武彦の姿がない。あたり一面には白豆と黒豆がばらまかれて、手のつけようがない有様、何が起ったのか判断がつかない。どうしたのかと疑った瞬間、大きな造り付けの食器棚の下部にしつらえた木製の反転式米植の中から声がする。之を手前に引き倒すと、お米にまみれた武彦が眼をパチクリして、汗をかいている姿が目に入ってきた。びっくりして、よくこんなに小さいところには入れたものと可笑しいやらあきれんやら、しばらく言葉もないほどだった。どうやら留守中は鬼が居ないので、おらが天下とばかり二人で米櫃の豆を出して悪戯している内に首を突込んでいた米櫃が、武彦の体の重みで反転して閉ったため、小さな身体がその中へ放り込まれるやうに閉ぢ込められたのが実情らしい。子供は親の想像もつかぬことを仕出来（しでか）すものと悩めるやら驚くやら暫くは我家の話題となった。とまれ怪我のなかったの

が何よりだった。

師走の或る日、厚生課の向畦地君が突然に豚肉が手に入りそうだが買わないかという。一時本当かなと疑ったが本当だという。もう随分長い間肉類は口にしていないし子供達は殆んどその味を知らない夢のような話なので、是非と頼んでおいたところ二、三日後大きな豚肉の塊が一個社宅に届けられた。正子は之をすぐ冷蔵庫代りに二重窓の間に入れて保存しておいた。

正月七草に近い日曜日、拙宅を披露旁々課員慰労の意味を含め、人事課の若い人達を招待した。豚肉の塊が手に入らなかったら、その実現も考えつかなかったのだが、幸運にも盆と正月と一緒に来たような喜びを多少なりとも若い人達にも味ってほしいと考えてのことだったが、このとき飛んでないことを仕出かして了解、却って大きな迷惑をかけるやら、私達の世間知らずの無智をさらけ出す結果となって了解、後で恐縮してお詫びをする羽目になって了解のことであつた。

戦時中であり何れも食生活は乏しい折だったので、珍らしく入手出来た豚肉を御馳走しようと相談しておいたが、野菜は白菜しか持合せがない。他の青い物があればと正子が市場へ物色に行く旁ら、私は前に見ておいた野芹を採って来ようと朝早く出掛けて数株ひき抜いて帰ったのが失敗のもと。何しろ大連では野菜の配給では薑（トウ）の立った、菠薐草（ホーレンソウ）一本しかないという時代で

加えて街育ちなので灰汁抜き知識がない私達なので、切角の御馳走も味が台なしになって了った。十一時頃、倉田君はじめ某銀行員のお嬢さんを加えて五人を八畳間で接待しお昼の御馳走の鍋を囲んで歓談の心積りが、鍋へ入れる野菜に野芹を加えたばかりにほろ苦い味となったのが興ざめのもと、加えて厳寒時閉め切った部屋でガスコンロを長く使ったので、一酸化炭素中毒から若い人も頭が痛くなるやらで散々の態となり、切角遠いところからわざわざ来て貰ったのに大迷惑をかけることで終り大失態を演じて了った。翌日出社してみなに詫びる始末、世間知らずの罪の重さを噛みしめた一日だった。もうこの頃には寒さも益々厳しく、僅かづつ降った粉雪は些かも融ける心配さもなく、その俚少しづつ積み増され、見渡す限り白一色。唯風が吹けば舞い飛ぶ粉雪はところによって厚く積み所々には枯葉がむき出しになって大陸特有の冬景色である。これが奉天だと、日中は太陽の熱で降った粉雪がいつしか少しは融けたのか、それが気温の低下する一夜を過ぎ、翌朝目をさます頃には一面の氷の世界となり、街行く人々があちこちで迂り転び慣れている。馬車の満人車夫でさえ迂って、お客共々投げ出されるという風景が出現したが、ここではそれは全く見られない。それだけ気温が緩まないところと云えるかも知れない。

外は厳寒でも、暖房のお蔭で家の中はシャツ一枚で過せる有難さ。それだけに

燃料は欠かすことが出来ない。石炭庫が残り少なくなった時には、早めに厚生課へ申込みコークスを頼む。幸いいつも無くなる前に、馬車（マーチョ）にコークスを一ぱい積んではるばる運んで来てくれた。馬車の御者である車夫は黒綿服をまとい、頭には毛の帽子を冠り、身体全体を深く包んでいるので寒さは凌げるが、むき出しの顔面、眉は眉毛一本一本が白い針のよう氷で包まれ、鼻や口のあたりも全く見えない程に吐く息で帽子の淵の毛ものど許も白い氷となって張りついていて。馬は小型の騾馬だが如何に厳寒に慣れていると云え、同じよう鼻や口のあたりは真白で、顎（アゴ）下に何本かの長短のつららを下げている。背中から腹のあたりは長途の牽引で力を使い果たかのように、身体全体から湯気を立て荒い息を鼻から出しながらつぶらの眼をして停まっている。いかにも可哀そうな姿である。コークスは大きな麻袋に入れられていて、それらを馬車一杯に並べて積まれている。車夫は到着を知らせてから、すぐ麻袋を一つづつ運び石炭庫に移し入れる作業にかかり全部を終ってから初めて勝手口から入って、ボイラーの傍らでしばしの暖をとって憩うのがその度の慣例となっていた。

寒さの中の作業を見かねてせめてその労を犒うためにと用意した熱いお茶と白豆の砂糖煮を皿に盛って言葉は判らぬまま手まねですすめ正子が頭を下げてお礼の気持ちを伝える。満人はボイラーの傍

らの上り口に腰をおろし、出されたお茶を啜り乍ら満足げに何かを正子に語りかけるがその言葉の意味は皆目判らない。けれども判らぬままにその手まね動作で多少は通じるところもある。冬になってから、月に二回ほどはこのようにコース配達を頼むことが続き、偶々私が在宅のときもあったが、約八キロの距離は社宅のなかで一番遠いところなので運んでくれる馬車夫には本当に感謝の気持でいっぱいだった。

身体が十分に温まった頃、満人は腰を上げて外に出て、空になった麻袋を車上に整理したのち騾馬の口綱を取って帰路につくのがその都度の姿であったが、騾馬はその間ずっと外に立ちつくし、口綱はただ垂したままで別段傍の柵に繋ぐこともしないままなのに同じ位置に同じ姿で馬車夫の出てくるのを待っている而も依然としてつららを顎から垂らしたまま少しも動く気配もない、そのいじらしさを見るにつけ大陸の零下 20 度の気温にも馴らされた強靱さは日本人には判らない世界のものと驚かされるばかりであった。

二月十一日は紀元節として明治以来日本の三大祝日の一となり全国を挙げてこの肇国の日を祝うため、各種団体は勿論学校でも式典を行い、児童生徒を登校させ校長は敬々しく教育勅語を読み訓示をする慣わしであった。春光小学校でも同じくこの日の祝典があり、廸子も参列して姿勢を正して校長の訓話を聞いていた

とき、一緒に並んでいた男の子から不意に身体をつつかれたのでクスッと小さい声を上げたところを教師に咎められ終ってから叱られたという事を帰宅後、正子に話したという。けれども父母会に正子が行ったとき先生はいい子だとほめられて喜んで帰った。

又、会社でもこの日は祝休日であったが社員中在郷軍人は全部出席し新京神社へ参拝後、山田関東軍々司令官の訓辞を聞くため長時間、新京神社の横裏手に整列して立ちつくしていたことがあった。この日は勿論、在新京日満関係会社社員中の全在郷軍人が参列したので総数は知るべくもないが、何れも同じように服装を整えて来ていた。私も他の社員同様、協和帽、協和服にゲートルをつけ普通のオーバーの上から緑色の木綿の外被なるものをまとい、木銃を持ての参加であった。手袋は勿論毛のもの、靴は例の豚皮の毛の靴という装備であった。しかし、何しろ零下二十度の寒さ、初めは大したことはないと思っていたが、待つ間の時間の永いこと、神社では何がどう行われているか皆目判らぬ、人々の裏で唯見えるのは傍らの同僚や他社々員の姿だけ、それも体伍（タイゴ）をくづすわけに行かないので、寒さの中で直立し、出るは白い息ばかり。待つこと半時間ばかり、気をつけの号令で直立不動の姿勢をとる中、軍司司令官の訓辞が始まった。今のようにラウドスピーカーがあればだが、声はやっと聞えるが話の内容まではよく

判らない。この状態が更に半時間以上も続きもう我慢も限界、手も足も冷え身体に熱は残ってない。こんな殺生なことがあるかと、内心不満を感じ出した頃、やっとすべてが終り解散となり、木銃を肩に列を組んで帰社するなり何れもがストーブへ直行、ここで熱い茶を呑んで、漸くみな我に還り夫々家路についたようなことであつた。かうした行事の度に痛感させられたのは、いつも長々と精神訓話をするばかりで、明治時代から一步も進んでいない三八銃の兵備、そして戦車も航空機も不足勝ちでどうして防衛が全とう出来るのかとの疑問であつた。

二月は春節の月で、満人社員たちにとっては大切な年中行事の一、お正月で前後三日間休日となり、瓦斯製造所勤務者の交代勤務は已むを得ないがその他のものはみな休みとなる。混住の比較的多い大連では、満人が旧正月春節を祝うさまは、都鄙と問わず家の門口に赤い紙に芽出度い文字を書いた封聯（チュンレン）を貼り、爆竹を鳴らす風習が見られ、日本人も再び正月を祝う気分になったものだが、新京では戦時下而も只ならない戦局であり、満人の生活地帯とかなり離れているため春節の気分が伝って来ない。三日間の休みも近くの満人市場でのかすかな爆竹の音が響いた程度でその意味では私達には淋しい春節であつた。

時は昭和二十年、日中戦争開始からもう八年、大東亜戦争を始めて既に四年を経過し、日本の伸び切った戦線での不利

を蔽うべくもない。戦争の様相はどうあれ、会社としては事業継続をはからねばならない。新年度の学校卒業生の採用に就ての努力は続いた。昭和十八年度からは、日本での新採用者に関する統制が開始されたので、満州国総務庁を經由して理科系文科系の高卒（専門卒）中卒別、地方学校別に希望採用数を申請する方式に変わり、結果は文部省の割当決定を見た上、指定校へ照会して生徒学生本人の意思を確認してもらったのち採用通知を出すという手続を経なければならなかった。かくて昭和二〇年新卒は技術系専門校から二名、文科系中卒者一名という厳しい成績となった。中卒者の極端に少ないのは戦局が大きく影響し、採用されても渡航が危険となったことや学徒動員、総動員体制で中学生も勤労働員で企業戦士として働くようになり渡満するものがなくなったことが原因であつた。その中で専門学校卒技術系卒業生二名は年令も既に適令であることから卒業即召集となつたので、採用しても採用即人事課附社員としての名のみに止まるという状態だった。そして彼等は卒業即召集となり何れかの部隊の所属兵となる。こんなわけで昭和十九年卒業の技術系者も三名、昭和二十年春卒が二名人事課付となつて、遂に出世することのない社員を増す結果を生んだ。無駄なことのようだが当時の状況としては、已むを得ない措置であつた。万一戦争が終結した場合を考えると、このように無理をしてでも若い技術者を確保

して、将来に備えておかねば、年令的に中堅層が欠けることによる事業遂行の困難が生ずる虞れがあったからであった。それは敗戦により、結果としてはすべてが烏有（ウユウ）に帰して了ったが、まさか未曾有の敗戦に終ることなど考えられなかったし又そうは考えたくなかったというのが本当だった。

そして、唯一名の普通高等学校卒業生が遙々新京本社迄到着してくれたときは本当に貴重な存在として之を迎え、やがて経理課への配属を決定したが、この新入社員も一ヶ月後には満州国内に於ける勤労働員の招集を受けて、吉林の遙か東の敦化の方へ行つて了い、すべてが無駄な努力となり終った。その中で四月の新年度に向け、新たな更迭人事を行い、本支店全部を見廻して人事異動を発表して三月の重要な仕事を終った。

米軍の猛攻によって硫黄島の日本軍は全軍玉砕したとの報道あり又沖縄本島へも上陸した模様で日本は益々窮地に陥ってきた。その緊迫した空気は当然満州国内へ波及し、世界情勢や日本の戦況などの正しいニュースは、満人の方が正確に掴んでいる模様だとの噂も次第に拡がりつつあり、不安の内に一縷の望みを何かに託したいと思うばかりの日常となる。

嵐の前

新京の春は足ばやにやってくる。昨日までの粉雪が消え、広野が稍軟らかな色

になったと見るも束の間、草が蘇がえり、樹々の梢に芽が吹くかと思はる内に若葉もずんずん伸び瞬く間に緑一色の世界となる。四月も半ば近くになると、大地は春の気配に包まれ人々は生々と活動し始める。

或る一日、隣の和田日出吉さん方で隣組の会合が開かれ、近所の人達が白い洋館の家が集まった。訪れたのは東隣の北川文英君（経理課長）、高木弥三郎氏（名古屋出身材木商）の夫人初恵さん、瀬戸口元輔君（技術課長）、某銀行員の奥さん、沢田夫人、外に満映社宅住人二名と私。和田家では組長の主人でなく、代理としての夫人の木暮美千代さんだった。木暮さんは若くて美しい女優さんで間近で話をするのはこの時が初めて、時の話題が何だったかは記憶がない。隣組の回覧板が歌になった頃で、時局に関しての心得のようなものが話題になったものらしい。今もはっきり頭に残っているのは、玄関を入った土間の正面に東郷青児画伯の特徴のある色調の人物画（100号）が掛かっていたこと。会談はその右手の応接室で行われたこと位である。そして此の家の御主人は満州新聞社の社長の和田日出吉氏であることは早くから耳にしていたし、夫人の木暮さんは満映のスター女優。その満映にはもう一人中国人女優との噂の高かった李香蘭や森繁久弥がいると知らされていた。満映（満州映画会社）の理事長は甘粕正彦大尉（元）で、昭和初頃共産主義者大杉栄と伊藤野枝と甥の宗

一の三名を絞殺後、渡満した人物と知られていたが、これらの人達と近くに住むことになったことの奇縁を秘かに思った。ただ直接会って話をしたのは木暮実千代さんだけだったし、満映での映画を観る機会も遂にないままに終って了ったのが残念である。当時八才の廸子は時々木暮さんが回覧板を持って行ったことを今に憶えている。去年新京に来てから考えていたことは、春になったら百坪以上もある前の荒地を耕して畑とし、種々の野菜を作ろうと計画していたことであった。それで鋤や鋤を買って帰り日曜日になると、朝から日の暮れるまで畑仕事に精を出したが、困ったことに日照が続くと、土が堅くて刃が立たない。力一杯鋤で掘っても大きな塊が出来るだけで土がバラバラにほぐれない。時たま恵みの雨が降ったときは、退社後すぐ畑で土掘りをする。雨で軟かになった土は思いのままにほぐれて畑の畦が作れる。満鉄消費組合から購入した種を蒔く。馬鈴薯は買おきのものを小切れとして植付ける。こうして畑仕事の経験もないのに、慾深く何でも作ろうとばかりに、玉蜀黍もネギ、なす、キュウリ、人参と種類を増やし、土の軟かいところは深く掘って牛蒡からゴマまで作りつけた。全くの素人仕事なので全部がうまく出来ようとは思っていない。唯子供達の栄養不足を少しでも改善しようと精を出すことになった次第。百坪以上を作り上げてから尚五〇メートル程南に小さい畑を満人から借りることに

して全く慾につかれたように働いた。五月の或る日の午後、幼い武彦を連れてこの借り畑を耕やし種を蒔き終ったころ北西の空が急に暗くあやしい雲行きとなってきた。滅多にないことだが、雨が降りそうな気配に鋤をかつぎ武彦の手を引いて家へと急いだ。その時遠くの空でピカッと稲妻が光った。雷だ、鋤を持っている、急がねばと足を早めようとした途端に武彦が「アツ、雷さんの足が見えたネ」と叫んだ。子の手を引っぱり走り乍ら、何と子供はうまい表現をするものだと感心して了った。又慾が出ると切りのないもので、鶏を飼うこととし、八畳間の窓下に畳半分位の小屋を作り、雌鶏一羽飼ってここで卵を産ませることにした。これは成功し、時々一つではあるが美事な卵が与えられることになった。又自宅の裏には南瓜の種をまき、広く蔓が伸び大きな南瓜が出来るようにと夢みたものだ。素人の馬鹿さ加減は東横の狭い家のかげを利用してアスパラカスを作ろうと種を蒔いたことがあった。その後多忙になるにつれ、ここへ種を蒔いたことさえ忘れて了った。こんなに畑作りに夢中になったのも、時局の反影であったかも知れない。

材木商の高木弥三郎さんは奥地へ出張なのか、殆んど自宅には姿を見せたことがなかった。夫人の初恵さんは小柄な人で、回覧板のことなどで正子が訪問すると世間ばなしに花が咲き、五右衛門風呂の鉄釜の底を洗うときには、逆さになっ

て両足を宙に上げないと綺麗に洗えないと笑い話をされるような陽気で気さくな方なので、何かと相談相手として心強くなると正子は気丈に考えていた。高木さんの千恵ちゃんやゆり恵ちゃんは、廸子のよい遊び仲間であった。二女の玲子の永久歯が仲々生えないので、正子が日赤病院へ連れて行き診察を受けたところ栄養が不足気味なので遅れているがやがて生えるから心配はない、唯歯が二本足りないとの意外な結果を聞かされた。この日は大陸にあり勝ちの黄塵万丈の日で、二つの停留所を過ぎて自宅へ帰るまでそれを防ぐのに困る程の降砂だった。奉天で既に黄砂には経験のある正子も直接黄塵の中を歩くときの困難さを語りその物凄さに驚いていた。

いつの頃か、廸子にバレーを習わせようと考えたがそのことについては全く記憶から消え去って了っていた。ところが廸子は何回かバレー教室へ通ったという。新京のどの辺りにバレー教室があったか覚えませんが、正子が廸子の他武彦、玲子も連れて教室へ行ったり時には下の子二人の子供を数時間隣の北川君の奥さんに預かって頂いたりして通ったらしい。それがいつから絶えたかははっきりしない。或いは私の教育招集による入営と関係があったかも知れない。事実数回通っただけで止めて了ったと廸子が覚えているのでそれが事実なのでせう。新京の駅前からは南へ道幅の広い大同大街が延々と伸び、大同広場を過ぎてから西方洪熙街方

面からの電車の軌道の交叉点を過ぎ、尚南へ直進したあたりの西側に建国大学があった。教官官舎はその近くに見えた。彦中三十六回生（大正十三年卒）筒井清彦君がその大学に教授として奉職していると聞いていたので、五月の或る日訪ねて行ったことがあった。撫松路から洪熙街へ、ここで環状線で乗換え、何という停留所だったか記憶がないが大同大街との交叉点で下車する。この地点から更に電車で東進すると新京動物園があるのでいつか時間が出来れば一度は子供達を連れて行きたいと考えながらここで更に南進する。電車に乗り建国大学前で降りる。そこからは徒歩で西へ。間もなく官舎群が現れたので一戸一戸表札を確かめながら進むと「筒井」の名が見えた。辺りを見ると流石に緑の多い地帯で教育環境としては申し分ないように見られた。ドアをノックして、来訪の旨を告げる。内から声がして奥さんの顔が見えた。ドアの鎖をはずしてもらって中へ入り来訪の趣旨を告げる。奥さんは中学の三回後輩の筒川君の妹さんであると聞いていたが、会ったのはこの日が初めてだった。随分楽しみにして来たのだが、此の日合憎筒井君は出張で留守とのこと。新京に居ないとの返事にガッカリしたが留守とあれば何とも仕方がない。一寸の間話をして辞去した。その後筒井君に新京で出会う機会はずいになかった。

その後新聞で曾って神戸大学在学中に民法や親族法の講義を受けた柚木馨教授

が新京法学院の学長として来任されていることを知り学院を訪れたことがあった。柚木教授は法学という堅苦しい学問を平明に解り易く講義され、学生たちにも非常に親しまれていたもので聴講生も多かった。新京でお目にかかったのは、この一回切りで数ヶ月後には大きな混乱に巻き込まれようとは思いつかなかった。

社員何名か赤紙召集で出征することになり、いよいよ戦争が身近に意識されるようになった。けれども営業課の検針員とか瓦斯管の工事係員などはまだ日常の仕事に支障なく廻れたので一安情だった。工事係や瓦斯製造所作業には、くの満人社員の手があり、まだ「切迫」という感じはなかった。四月の下旬か五月の下旬、関東軍司令部から修正「残置要員届」を改めて提出すべしと連絡を受けた。全部所の所属長に極秘に資料提出方を求めて之を一本にまとめ高田社長決裁を得たのち、又前回同様関東軍司令部に赴き担当官である中佐に提出した。戦局が益々厳しくなった折ではあったが、司令部内の空気は前回に比し、此まで変化あるようには観られなかったがそれは部外者の甘い観察に過ぎなかったかも知れない。

昭和二十年度は四月一日から新しい年度に入っていた。本社では社長の更迭があった。前社長竹中阪一氏が去り、新社長として前チチハル鉄道局長だった若い高田精作氏が着任された。新社長は石川県金沢市の出身、東大出の温厚な紳士であった。何時いつ頃の事が記録もない

ので判らないが、高田社長が出社して暫く後、樋口文書課長、北川経理課長との三人が社長宅を訪れたことがあった。主たる用件は何だったか記憶に残っていないが、三人共玄関の土間に立ったまま、奥から出て来た夫人から話を聞かされたことあり、如何に社長夫人と雖も一寸非常識な人だなと思ったことがあった。その内容が何だったか、その後の混乱で念頭に残ることはなかったが、今推測するところ社長公館入居に関する問題でなかったろうか。それ以外には夫人から注文を付けられることはない筈だからである。春の移動で、社長の社宅に住んでいた後藤末男総務部長（前新京支店長）は大連へ移られ、満鉄から傍系の瓦斯の社長に來られた関係から満鉄の社宅を明渡す必要がある都合から、転居の期日に就ての話でなかったか。我々は構内の社長の社宅を社長公館と呼んでいた。前の竹中社長は一年切りで退社されたし、この一年間社長公館に入居することはなかった。構内公館には当時後藤後藤支店長が住み、それを疑問と感じなかったのは、竹中社長は新京に自宅を持っておられたからと考えられる。新しく若い社長として着任され、満鉄社宅から移らねばならない事情から移転の期日に就ての注文の話でなかったのかと漠然と思いだす。仮にそれとしても大連南満瓦斯の谷川前社長夫人とは人物に相当へだたりがあり、高田社長の人柄とは対称的なものを感じさせられた。

欧州戦線ではイタリアのムッソリーニは銃殺、独のヒットラーが戦時中死亡したとの情報あり。日本では米軍機の来襲で東京は殆んどやられて了い宮城まで焼夷弾の被害があつたらしい。切迫した状況なので万一を考慮し本社構内にも防空壕が作られた。又、会社から満人作業員が派遣され、撫松路社宅にも地下一米位に畳一枚分位の頑丈な防空壕を作ってくれた。家族五人が避難するには充分の広さだし、最小限度の必需品も持込めるもので有難い限りだったが、それだけ切迫したものを感じていた。

当時、煙草は新京着任以来自分で煙草店で買ったことはない。それは厚生課が一括購入したものを社員の希望に応じて不定期に時々分配してくれたからで、自由に入手することは困難だった。煙草の種類は色々で一定していなかった。日本の専売局製のチェリー、エアブレン、スピアの他に、兵隊用のほまれとか香港製だったかマーキュリー20本入りが混じることがあり、又中国製の天壇、前門（チェンメン）の銘柄など満州では馴染みのものもあり、その銘柄は度毎に組合せが変っていた。この一回四個か五個の分配を心待ちにし入手出来たときは貴重品扱いで、机の引出に蔵い込み楽しみに喫ったが、酒類は全然購入出来なかった。それは当然のこととして、みなが飲酒のことなど忘れていたかのようだった。否や忘れていたのでなく、戦時中だからあきらめているといった方が正確だったろう。

新しい建築工事は市中もうどこにも見られなかった。私達の社宅建設が恐らく新京市中での最後のものだったと思はれる程に、市中には大工・左官などの働いている姿が見られなくなっていた。ところが四月に入ってから我家の敷地の南側の細い道路を隔てた南側に一戸家を建てにかかったのが見られた。建坪数は約二十坪、四間×五間のものであった。それは簡単な基礎造りの後周囲の煉瓦積みから始められた。日本の住宅建築では最初基礎から始まり、要所要所に柱が立つのが普通なのに、ここでは全部が煉瓦積みで窓の部分を積み残し窓枠をはめ込んで行く。そして四周の煉瓦を積み終ったころ、下で組んでおいた合掌を載せてゆく。クレーンも使はず全部手作業だった。合掌を三つ上げてから棟木を上げそれを組込んで屋根の形が出来る。之に垂木をつけ板を張ってゆくという寸法だった。その後屋根に瓦を載せたのかトタン張りだったのか、そこまでは見ることなくこの家の完成に注意を払うことはなかった。これが新京市の最南端の家になった。その後、私自身にも変化が起ったので二度とそちらに視線を注ぐことはなかった。

米機の空襲により内地では東京はじめ大阪、神戸など大都市は勿論のこと日本全土にわたり主な都市は壊滅状態で沖縄も亦集中攻撃で悲惨の状況らしい。新聞は正確な報道をするわけでないが、みな凡そのことはどこからとなく伝ってくる。日本の敗色が愈々濃厚になってきた五月

の或る日、若い某陸軍中尉が知友の社員の田中千代三君を尋ねて来社し人事課の部屋で、三人で色々話し合ったことがあった。田中君も立派な兵歴を持つ陸軍中尉だった。私一人だけが兵歴のない唯の在郷軍人、それも昭和十四年に無籍からの編入者だった。話は自然戦局のことに及んだが、某中尉ははっきり日本はもう駄目だ、敗けると明言した。田中君はともかく私は中尉がこうはっきり断言したことに驚いた。それは誰もが心の中ではそう考えていても口に出して言葉にするのを憚っていたことであつた。尚中尉は言った。現在全満の工場で総動員体制で航空機（木製）を造り、月産約三十機になるがその内本当に飛べるのは一機位に過ぎない、これでは到底「戦さ」にならないという。航空機にかかわらず、艦船も高射砲も弾丸の補給さえ続かず、それでまた竹槍で戦争することを国民に強いるのかと居たたまらない気持だった。

去年秋、人事課員の羽藤君が帰省で九州の親許へ行ったときの土産話に日本では極秘で新型爆弾を造っており間もなくこれが完成する筈という。それさへ完成すれば米軍がどれほど攻めて来ても心配ないことになる。羽藤君の話では、それはマッチ箱位の大きさで何トンもの重さがあり、これを炸裂させるとアメリカの大型艦でも一発で吹っ飛んで了うほどの威力を持つものらしいという。若しその話が本当なら早く完成させてこの怒濤のような米艦船の襲撃を防禦するばかりで

なく逆にやっつけられる。米軍の航空母艦をはじめ大きいのをやっつけることが可能なら航空機による爆撃位は凌いでゆけるのではないか。この夢のような話にも、それこそ溺れる者が藁にも縋る氣持で希望を托したのだが、まだ実現するに至っていない。ということは敗色に浮足立つ国民の氣持を引締めるために流された流言の一つではなからうかと心細くなって来た。

瓦斯製造所では、今日も日満社員がいつものように操業し、検針員は街に出掛け戸毎に検針を行い、工事係員も相変わらず工事車を引いて現場へ急いでいる。広い製図室では何人もの若い社員が大きなトレスペーパーに線を描くことに無中という有様で本社内の様子を見る限り、日本で熾烈の戦いが展開されているとは想像もつかない。尤も去年大連市にまでB29が襲来し二ヶ所に爆弾を落した時に比べると、満州国内にも次第に戦争の影が濃くなり、鞍山の製鉄所では七つの熔鉱炉の内六つまでを一度の米軍航空機来襲でひどく破壊され、殆んどが機能を失つて了った。新聞では盲爆を伝えるが、盲爆どころか正確な爆撃だとの話だ。奉天では駅附近の倉庫が滅茶苦茶にやられたらしい。いつ新京に襲ってくるか判らない情勢になった。万一の時、関東軍は充分に対処し切れるのだろうか。市中の様子では一向に軍が動く様子はない。新京市民もあきらめているのか何の心配もなさそうに平常通りに動き繁華街も普段

と変わったところはないように見られた。

教育召集

新京にまで戦争の影響が及び出して、みな日毎に緊張するようになった五月、私に突然赤紙が届けられた。撫松路の自宅へ帰ってから正子にそれを知らされた。差し出された赤紙は三ヶ月間の教育召集令状で五月二十一日新京第一師団へ入営を命ずという内容のものであった。私にも愈々来るべきものが来たのかと覚悟を新たににして早速入営の準備にとりかかった。勿論高田社長召集に報告の上、留守中業務に支障のないよう手配は済ませた。三ヶ月間入営で留守になるその間の色々家事などを話し合い、同時に押入れに藏ってあった所謂奉公袋を取り出して内容物を点検した。奉公袋とは全在郷軍人必携と決められてあり、内容物は何時の調べにあっても咎められることのないよう整えておかねばならないものが何点か定められていた。その内の最たるものが軍隊手帖だった。それは黒皮の表紙に金文字で軍隊手帖の表示印刷があり、その内容として本人の氏名、生年月日が記載され、写真を貼附してあり、特に天皇陛下より軍人に賜りたる勅諭という軍人の心得を何ヶ条の明文としたものが印刷されていた。在郷軍人の集まりの度に、この奉公袋を携行すべきものとされ、その度に内容物は入れ忘れのないよう常に心掛けるべく指導されていた。

教育召集なので三ヶ月経ったら帰宅出来るので家を出るときもさしたる悲壮感ではなかった。それは訓練というものに、余り抵抗感が無かった精でもあった。当時中学、専門、大学の学生時代は、必須課目として軍事教練を受けることを義務づけられていた。実弾演習の経験はないものの、中学時代には夜間演習の経験があり又陸上運動会では五年生の三ヶ小隊の指揮したこと、専門、大学では丹波篠山連隊或いは大阪信太山砲兵連隊などへ数日間の入営訓練などで一通りのことは訓練されていた。只徴兵検査の時、筋骨薄弱として丙種とされただけに力仕事には自信がないから、戦時緊急の入営で、どれほど厳しい訓練をされるかも知れず、それは耐えきれぬかの不安がないことはなかった。本社で教育召集のための三ヶ月間の休暇願を出し、課の人達にも後事を托しておいたので心残りなく指定された五月二十一日には第一師団の衛門をくぐった。教育召集で入営したものは約五十名だったと思うが、それよりずっと多かったかも知れない。何れも年配者ばかりで三十八才の私が一番若く、最高は四十三才という混合で且、色々の職種の集りであった。早速整列させられて点呼を受け、終ると私服私物を始末し、軍服に着換えさせられた。それは歩兵であることを示す赤い襟章の附いた黄褐色の軍服であった。襟章には黄色の星が一つもない最下級兵となった。勿論のこと日本の軍隊では規律が極めて厳しい。上官、上

級兵に対する敬礼もその一つで、それを欠かすと厳しい罰を受けることになる。そんなわけで星の一つもない赤い襟章、俗にいう赤べたの軍服に着換えた途端に最下級兵であることを自覚させられると共に以後、兵営の内外で出会う兵士、軍人の姿を見たらすぐ立ち停って敬礼をせねばならなくなった。これは厄介なことになったと、心中密かに思わぬでもないが、定められた通り行動しないと罰を喰うことになるので、理窟抜きで従わざるを得ない。

兵営舎内は中央に廊下があり両側に部屋、各部屋に夫々約十名宛が生活することになった。部屋の入口両側に銃架があり、訓練を終えて部屋に帰ったときは、入口の銃架に銃を並べて立ててから入室し自分のベッドの位置に付き、ここでも点呼を受けてから休めの時間になる。朝、昼、晩の三食をここでとる。毎日交替で飯当番となり「飯」に二名「汁」に二名が炊事場へ班の分を貰いに行く。最初の日、班の飯当番が飯を、汁当番が汁を、長い机の上のアルミの容器に配り終り、上等兵の号令一下食事を始めることになったが、アルミ碗に盛られた山盛りの飯をはなれた距離から見たとき、入営の第一食に入営の祝いとして松茸飯を御馳走してくれるのかと季節はずれに拘わらず、ふとそんな感じがして喜んだがそれは錯覚であった。松茸飯と見まごう程に色のついた麦飯であった。その飯を食べるのも競争のように、極く短時間を終る。当番

は残飯や汁の桶を炊事場へ返却に行く。入営早勿々には、みな気持がのんびりと娑婆気たっぷりであるが日を経るに従い営内生活の厳しさにしごかれて、目付顔つきまでが引締るようになる。それには次のような試練を経なければならないからである。飯当番が飯の杓子を洗い桶を洗っている内にいつの間にか杓子が無くなっている。一つでも紛失すると、容器を員数通り返還出来ないから、当番者は罰を受けねばならない。杓子一つ紛失した当番は血走った目付となり他の班の当番がぼんやりしている隙を見て杓子を盗み員数通りを返還してようやく無事当番を終えることになる。毎日これが繰り返し展開される営内は、全く非情の世界である。それに素早く対応しているうちに、それが慣性となる。そして普通の人間が今までの感性を失いきびしい規制の下どんな行動でも命令通り何でもやり遂げる非人間に仕立てあげられて行くのかも知れない。

私たちの小隊には、兵長一名、上等兵一名が指導兵として配属されていた。二人とも二十才を出たばかりの若い現役兵で、兵長は群馬県、上等兵は埼玉県出身らしかった。少し年上の兵長の肩章には金筋一本、上等兵は星三ツあり、私たちから云えば、兵隊の位では何れも上官である。その命令には即時従うほかはない。入営前の資格が何であろうとここでは営外の約束が通用しない別世界である。会社で多くの人を指図していた人も最下級

の兵として命令に従って行動する覚悟をするしかない。

訓練は体伍を組み行動することから始められた。一列に並び右へ倣え、気をつけ、休め、の姿勢から右向け右、左向け左、廻れ右、と続く。コチコチに緊張している人があるのか、右と左を間違える度毎にやり直しの号令が飛ぶ。前へ進め、停れ、の行進で右手右足が同時に出てしまう者もある。そして全員が初めからやり直しである。こうして、体列を組んでの行進が出来るようになってから執銃訓練に入った。これが更に一段と大変であった。訓練用の小銃は所謂三八銃であった。中学四年生のときは古めかしい村田銃だったが、三八銃は五年生以来全くの馴染みのものである。それ以来もう二十年も経っているのに何の変化も進歩もないのはどうしたことか。

班毎に三八銃を与えられ、営庭に一列に並びその操作を覚えることから始められた。直立不動の姿勢で銃を右手に持って並ぶ。右へ倣えで一直線に並ぶ。顎を出す何人もが正しく直される。次に擔え銃で銃を右肩へ擔う。ところが之が不思議なことに、出来ない者が出る。右肩に乗せた銃が上下逆になっている。即ち鉄の銃身が下になって肩に乗り木被（モクヒ）が上になっている。何人かがこんな形になる。上等兵が叱ることなく之を正させてから立て銃の号令がかかる。すると今度は掌尾板の三角形の先が内側を向けて下ろしている者が何名か出る。一

度でも過去に訓練の経験を持つ者ならこのようなことにならない筈だから、恐らく今迄に執銃訓練の経験のないものだろう。上等兵は一人一人にそれ正させた上、何度も擔え銃、立て銃が続き、みなが正しく操作出来るようになってから銃を肩に行進訓練が始まる。毎日がこのような初歩的訓練に明け暮れるうちどうやら兵士らしさが身につき、まごまごせずに命令通りに行動出来るようになった。

訓練が終って兵舎に帰ってからすぐ煙草一ぷくという訳にはゆかない。銃の手入れや軍靴磨きを心を込めて、一生懸命にやらねばならない。銃は鉄と木とで作られているが、特に鉄の部分、銃身という鉄筒の部分は裂（キレ）と油でいつも曇りや錆のないようピカピカにしておかねばならない。筒の中は勿論、外側の部分も念入りに磨き塵や埃の一つもないように、特に照星や照門は大切な部分なので、一層神経をとがらせて綺麗にしてから木部にも細心の注意を払いようやく手入れを完了の上銃架に架ける。軍靴も大切な軍から借用品なので、裏側の金属部の靴底の丸鋏一つ一つも丁寧に光らせておかねばならぬ。訓練兵一人一人が一日の訓練が終っても疲れたなどと云ってはおれない。兵舎に入るなりすぐ銃の手入れや靴みがきにかかり、それが完了するまではお互いに口も利かない有様だった。手入れが済んで、銃も軍靴も所定の位置に蔵めて、各自がホッと一息つく頃、兵長が銃や軍靴の検閲をする。みなが精魂こ

めて手入れをした筈なのに、どこに欠陥があるのか名前が読み上げられる。呼ばれた本人が出て直立不動の姿勢のとおったまま、不合格の理由を云い渡され、すぐ再手入れを命じられる。銃や軍靴の検閲でひっかかった者は再手入れのあと、廊下の銃架の前に自分の銃を捧げ銃の姿勢で持ったまま半時間か一時間立たされることになる。多いときは五名も六名も立たされている。気の毒だがどうしようもない。靴の裏の沢山の鋸の一つに小さい泥が附着したままだったのも見逃されることはない。小さな欠点も容赦されず指摘され罰を受けるので全く油断出来ない。

夜は初日から毎夜兵長の講義で学習が行われた。学修と名付けたかどうか、内容がどうだったかは覚えがない。銃に関する説明等が行われたように思うが一番記憶に残っているのは「軍人勅諭」の講義であった。それは各自所持の軍隊手帳に印刷され、全文の記述があるもので、その一句一句について説明が行われた。そしてその全文を何時質問されても即座に答えられるように暗記しておけと命ぜられた。軍人勅諭とは、天皇陛下から軍人に賜りたる勅諭のことで「古へより我が国の軍隊は世々万世一系の天皇之を統率し給う所にぞある。」の厳かな最初の一節から始まる前文の後に一、軍人は忠節をつくすを本分とすべし、一、軍人は信義を重んずべし、等の五ヶ条の心得うべき条々が列記され、その各条について詳しく解説がついていた。講義を受けてい

た一同には暗記を命ぜられた瞬間、これは大変なことになったと、異様な緊張が走った。第一に頭をよぎったのは、暗唱を命ぜられて若し答えられない場合は、又罰を喰う覚悟が必要だったからである。それ以後は実技訓練の時間が終わると、みな暗記を心掛け目を閉ち口を動かしている様は正に真剣そのものだった。これは私自身も初めてのことであったので真剣になり、おかしなことだが便所に入っても、それが頭から離れなかった。間もなく全文暗記することに成功、どの一章を聞かれてもすぐ応じることが出来るようになった。これに成功してからは身も心も軽くなったような気持になった。この学修の時だったか、我々の教育召集の目的が、新京に非常事態が発生した場合には都市の周辺警備を命じられる筈だということだった。実際にそのようなことが起きれば、それこそ大変で、妻子も捨てる覚悟をせねばならないのだが、まだ頭の片隅には、そのような事態にはなるまいという甘い考えがあったのも事実である。

執銃行進が可能になってからは第一師団の南側横門から外出し、かなり離れた練兵場での訓練が始まった。それは射撃訓練であった。射撃の姿勢には立ったまま射撃する立射の構え、膝射の姿勢というのか折敷の構えでの射ち方、第三の伏射の構え即ち地上に伏臥して射撃する俗にいう臥射（ネウチ）の構えなどの訓練が始まったが、これがまた大変であった。

特に伏射の場合、先づ左足を右足の前に出してから膝をつき乍ら身体を倒していくのだが、伏臥したとき約三十度位の角度となるように伏せねばならないのが、どうしてか角度がまちまちになる。或者は一直線に角度なしで倒れるかと思うと、他の者は四十度位になって了う。兵長も上等兵も大童になって指導するが仲々正しい姿勢がとれない。何遍やり直しても又間違っただう。簡単そうに見える立射の場合も腹が出過ぎる、背が反り過ぎる、と散々である。見ているうち思わず笑いが出るほど滑稽な風景の連続であった。まだ骨の堅くなる程の年令でもないのに、身体と神経が分離して思うようにならないらしく、指導する兵長らも汗だくの日だった。この日私はひどく注意されることなく無事に一緒に帰還出来たが、解散してからも気を抜けない。どこかに兵の姿が現れると、それがかなり遠い距離であっても、一旦視界に入ったら敬礼しなければならない。全く神経の休まる時はない。

洗濯は欠かすことがなかった。毎日訓練を終ったあと、シャツ、ズボン下、木綿の兵隊用靴下、褌等を備付けの洗濯石鹸を使って営内の施設で皆が争うようにして洗った。洗ったあとロープに垂して乾かしていたように思う。この時靴下なんかはよく盗まれるので随分気を使ったものだ。自分の持物を洗うとき一緒に上等兵の褌を洗ったこともあった。私のベッドの隣にその上等兵が寝ていたのといつ

しか親しくなっていたからでもあった。

長い訓練期間中、当然毎日か隔日には入浴出来た筈だが、それをどうしても思い出すことができない。全期間中一回も入浴の機会がなかったとしても健康にさしたる影響はないが、それはどうも不自然である。然しみなと一緒に裸になってどんな形の風呂に入ったか思い出そうとしても出て来ない。

ゲートルは、在郷軍人として奉公袋に必ず用意すべきもの、行事のときは是非着用すべきものであった。その前に軍国主義の時代の生徒、学生はそれを付けることに何の抵抗もなかった。日露戦争が勝利に終わった直後の明治四十年に生を享け、幼少時代の子供の遊びの一つは戦争ごっこであり、細竹に2番線の針金を仕込んだものをサーベルとして着物姿の帯に下げ、玩具のブリキの勲章を胸につけて自慢しあったくらいだった。又、小学校時代には中学生が黒の制服に白いボタン式ゲートルを着用しているのが、あこがれの対象でもあった。それが巻きゲートルに変ったとしても、その着用は何ら抵抗を感じなかった時代であった。従って、今回の入営後も巻ゲートルの着脱は素早かったし訓練終了後、兵長のゲートルを脱がせることも率先して実行したので好感を持たれたのも事実である。又ある日の学修の時間に、兵長が大砲の弾丸発射の講義をしたことがあった。発射された弾丸は弾丸自体の重さと発射の威力が関係して飛び出し、最高高度に達した

あとは放物線を描いて落下するとの説明に稍不備な点があり、手を挙げて補足する意見を言ったところ、いらぬことを云うなと云わず逆にその通りだと受容された。その関係もあったのか、私が飯当番のとき杓子（軍隊には別の独特の名詞が使われていたが思い出せない）を盗まれ、当然罰を受けるものと覚悟したところ、之を知った兵長が「よし心配するな」とどこからか捜がして来てくれた。兵営内では盗むことは平気で行われる反面、手品のようなことが行われるので、驚くやら嬉しいやらで、この時兵長を神のように感じたのも正に実感であった。

入営して二十日も過ぎ、兵隊としての厳しい修練が次第に身につけ出していたときだった。偶然私が兵舎の外へ出たとき、広い営庭の遙か向う側の一角に大刀を腰に吊った将校の姿が目に入った。若い少尉らしいと思った瞬間、反射的に敬礼しつつ直立している自分を感じていた。そのことよりもこの時営庭にいたすべての兵が一様にその将校に敬礼し、直立不動の姿勢をとった。そのことが強烈な印象として私の脳裡に焼きつき四十年以上を経た今日も明瞭にその光景を思い浮かべることが出来る。それがいいか悪いかは別として、これが日本の軍隊のすべてを物語っていたのである。

日本の陸軍兵営には、一週間交代で営内を監察する役目の週番士官という制度があり、この日営内の全ての兵が敬礼したのはその週番士官に対してだった。そ

の同じ日だったかは覚えていないが、或る日演習場での訓練を終えて兵舎に帰った夕刻、若い週番将校が私たちのすぐ隣の部屋に入るのを見た。同じことが前週か前々週にもあったようだが、以前は自身のことを処理するのが精一杯であったし週番将校を現認しなかったので気持の動揺はなかった。然し今回は営庭での強烈な印象を受けたあとだし、兵舎内の生活にも順応できるようになり、或る程度心の余裕を持ち周囲の変化にも直ぐ反応出来るようになっていた。週番将校の出現は、静かな水面に石が落ちたときの波紋のように訓練兵一同の顔に云い知れない緊張が広がって行った。この時兵長が私を呼び、週番将校の部屋へ食事を届けよと命じた。豫期しない命令で内心困ったと思ったが、食事を運ぶ作法を教えられ、今は間違えないよう行なうしかない。「はい」と答え、四角の塗り膳に載せられた食事を両手で目の高さにまで持ち上げて進み、部屋の扉の前に立ち、食事を持って来たことを大声で告げた。最初に自分の名前を告げたあと何と云ったか忘れて了ったが精一杯に叫んだ。すると部屋の内から「よしッ入れ」と声がした。入りますと告げてから右手でノブを廻して室内に入る。膳は高く上げたままの姿勢で、姓名を告げたあと、食事を持って参りましたと叫ぶ。「御苦労」と云ったかどうか、椅子にかけている将校の前へ膳を静かにおく。二十五才前後の若い紅顔の青年将校であった。運び終えてホッとした。再

び姓名を告げてから「帰ります」と叫んで礼をして退き、扉のノブを手をかけ開いて外へ出た。無事に役目を終えた旨を兵長に報告したあと自分の位置に戻った。他の訓練兵はみな食事に取りかかっていた。遅れてならじと席につき麦飯をかき込み汁を啜ったが、時間にして五分か六分で食事を終わることは完全に習性となっていた。この夜もやはり兵長からの講義が行われ終了後ベットに入りいつものように九時には正確に消燈となり寝についた。

その後も昼は練兵場に出て各種の訓練が繰り返し、繰り返し行われた。訓練を受ける者はみな均しく命令のままに行動できるまでになっていた。或る日の訓練が鉄西地帯にある軍の新京飛行場で行われたことがあった。飛行場と云っても現在の如く完全な整備されたものでなく、草茫々の広っぱと云った方がぴったりするところで、終日新しい訓練を受けていた。我々は数名宛が一行になり草の大地に伏し、両脇を立てて左脇と右脚を同時に前に出し次は右脇と左脚を前へと交互に動かして前進する、匍匐前進の訓練であった。勿論、脇を立てた両掌には銃を水平に持ったままの執銃匍匐訓練であった。一行が進むと数メートル後から次の一行が又その次が前進という具合に何遍も繰り返して、それを行なうことを命ぜられた。これは敵の陣地、或いは敵の戦車に気付かれずに接近するための訓練だという。仲間の一人がだとすると爆弾を

持って近づいて之を投げたり、時には戦車の下敷きになる覚悟をせにゃならないのかなと囁いた。誰もそれに答える者なく無言だった。丁度此の頃、沖縄が陥落状態となり多くの日本の軍民が犠牲となる中で米軍旗が空高く立てられたという。愈々恐れていたことが現実となって誰もが云い知れない無力感を持って天を仰いでいた。それから間もない或る日のこと、珍らしく徒手のまま隊列を組み、南横門を出て行進し、いつもとは違った草の生えた広場へ連れて行かれた。いつもの練兵場でなく飛行場でもない。それは児玉公園のようであった。新京に住んで児玉公園のようだったとは如何にも迂闊だが、此の日は私自身新京へ来てから一ヶ年余りで、その間に児玉公園内に入ったことがなかったので、この日が最初の公園入りだった。芝生の中に立入らぬよう低い垣がある所もあった。その公園の中を隊列のまま芝生の間の道を駆足行進で廻ったり、徒步行進をしたり、それを何回も行ったあと、賣店のある近くの芝生に入って腰を下ろすことを許され、暫くの休憩時間が与えられた。何しろ銃を持たない訓練なので、身体は比較的楽であった。

この時兵長が賣店から「おはぎ」を沢山買って来て一つ宛をみなに分け与えて呉れた。思いがけない甘いものの分配だったし、豫想もしていなかったことなのでみな大喜び、これが本当の棚からボタ餅とばかり目を細めて味わい、いつもは厳しい兵長にも優しい心配りがあるのだ

と感激したことだった。

それから暫くして整列の上、再び行進を開始して兵営に帰還した。それは意外な早目の帰還だった。それが何を意味するのか、何が起ろうとしているのかは誰もが気付くこともないまま時が過ぎていた。

その当日の午後か翌日かは忘れたが、全員営庭に整列を命ぜられた。いつものように訓練指導の兵長や上等兵が顔を見せただけで週番将校などの上級士官は居なかったように思う。そして気を付けの号令の下、訓練兵一同がこれから何が行われるのか判らぬまま直立不動の姿で緊張していたとき、「皆に長期外泊が命ぜられた。只今より私物を整理して携帯の上夫々営門を出てよろしい」と突然の通告が行われた。この日が入営して略一ヶ月を経過しており、教育招集三ヶ月の予定を三分の一消化したばかりである。それなのに全く意外な通告に一同稍氣勢を抜かれたように呆然としたが、自宅に帰ってよろしいの声に喜ばぬ者は一名もない。解散の掛け声と共に、みな顔に生き生きと活気が蘇り、兵舎に戻り借用の軍服を脱ぎ返却する官物を整頓した上、協和服に着替え、奉公袋に必要品を詰め込み自分の靴をはき営庭に出た。一か月の訓練で、顔は日に焼く動作もきびきびとしたものとなり、その効果の程は目に見えるものとなっていた。みな夫々に以前の年配の社会人に戻り、その顔は喜びの笑みを浮かべつつ見送りに出た若い指導者

であった兵長と上等兵に敬礼の上、踵を返して足どりも軽く営門衛兵に再び敬礼して夫々に解散して行った。此の日、私は営門を出てすぐ近くの本社へ戻り人事課に入った後、高田社長に長期外泊という名の解散を命ぜられ事実上の招集解除になった旨を報告の後、文書課長樋口君にも同じ連絡をした上、自席に戻り留守中のことなど報告を受けたのち、次の日から平常通り出勤する旨を告げこの日は帰宅の途についた。

羽衣町の本社を出ると、人通りは殆んどなくひっそりと静まり返っている。錦町の住宅街にも何の変化もなく、樹々は緑に映えて美しく平静さを謳歌しているようである。暫くぶりの安らかな心で足音も軽やかに、先刻出て来たばかりの第一師団の営門前を過ぎて電停で撫松路行電車に乗る。僅か一ヶ月でも緊張の連続だった目にうつる興安大街の通りの風景も、洪熙街から南の緑の野の姿もその静けさと美しさが新鮮なものとして胸に浸み入るようであった。

撫松路終点で降り久し振りに我が家の玄関に立つ。畑の南瓜は一面に蔓を延ばしている。馬鈴薯も玉蜀黍も茄子も大豆もみなすくすくと育ち美事に成長している。鶏小屋には雌鳥が赤いトサカを振わせてクックツと鳴き乍ら動き廻っている。ドアを開けて家へ入る。本社から電話して退営したことを知らせておいたが、正子も子供らも意外な早い帰宅を喜んで迎えてくれた。我が家の畳の香が快く身に

浸みる。服を脱ぐなり、沸かしてくれた風呂に入る。武彦も玲子も一緒に入ってくる。賑やかな入浴風景である。入浴後、久しぶり一家団欒の食卓を囲み、入営中の色々な出来事を語りつつ、皆で喜びを共にしてしみじみと幸せを味っていた。

心の平静さが甦ってくると思い出されるのは、長期外泊を命ずという表現の解散即招集解除のことその理由である。何も知らされなかつただけに何故だろうという疑問が残る。曾ては無敵を誇った関東軍もノモンハン事件で一敗地に塗れる汚点を残し、大東亜戦争開始以来は徐々に北辺の守りから次々兵を南方へ移動させる反面、在満在郷軍人の招集により、その補填をしているらしいという噂が流れていた。

日、独、伊三国同盟で頼みとした独、伊は既に敗れたので、ソ連は欧州戦線で不要となった大量の戦車及び陸軍部隊をシベリヤに増強してくる筈だ。日ソ中立条約の期限も切れる頃だろう。否、既に期限は切れたかも知れぬ。唯条約解除の意思表示のない場合は、更に一年間は条約

有効期間がある。ソ連はそれを守るだろうか。関東軍の北辺守備が脆弱であることはソ連へ筒抜けの筈だ。日本では既に沖縄が陥落した後米軍が大挙して本土襲来を敢行することは目に見えている。本土の守りも兵力不足で充分でない。どうするのだろうか。俄かに教育招集を解除したのは、新たに在満の在郷軍人を招集し部隊編制の上何れかに補強出動させる計画が必要となったのでないか。我等が営内で訓練を受けていることが邪魔になったので、招集解除して二ヶ月も早く退営させたのでなかろうか。そんな事を考えていると無事帰宅したものの今後何が起るか判らぬ。それが判ったところで個々の人間がどうしようにも何らの施すべき手段も方策もない。こうなれば今更に周章てても仕方がない。そんな事を考える内にいつしか深い眠りに陥っていた。

脚注

(1) 関係者の推測によれば、地理的に「敷島」女学校の可能性が高いという。

錦州と旅順の思い出

執筆：小坂宣雄

解題：大野絢也 編集：尹国花

解題

はじめに

「錦州と旅順の思い出」は、小坂宣雄氏（以下、宣雄氏）が少年時代の満洲経験を執筆した回想録である。宣雄氏は少年時代を錦州で過ごしており、日本敗戦直後の経験が強く印象に残っていたことから、この回想録を執筆し「満洲の記憶」研究会（以下、本研究会）へご提供して下さった。

本回想録は、「旅順旅行の思い出」と「中国人（旧満人）との交流の思い出」の2篇による構成となっている。本稿では、資料の掲載に至った経緯について紹介した上で、回想録の背景となる宣雄氏の満洲経験および錦州会の概要について言及する。

1. 掲載経緯

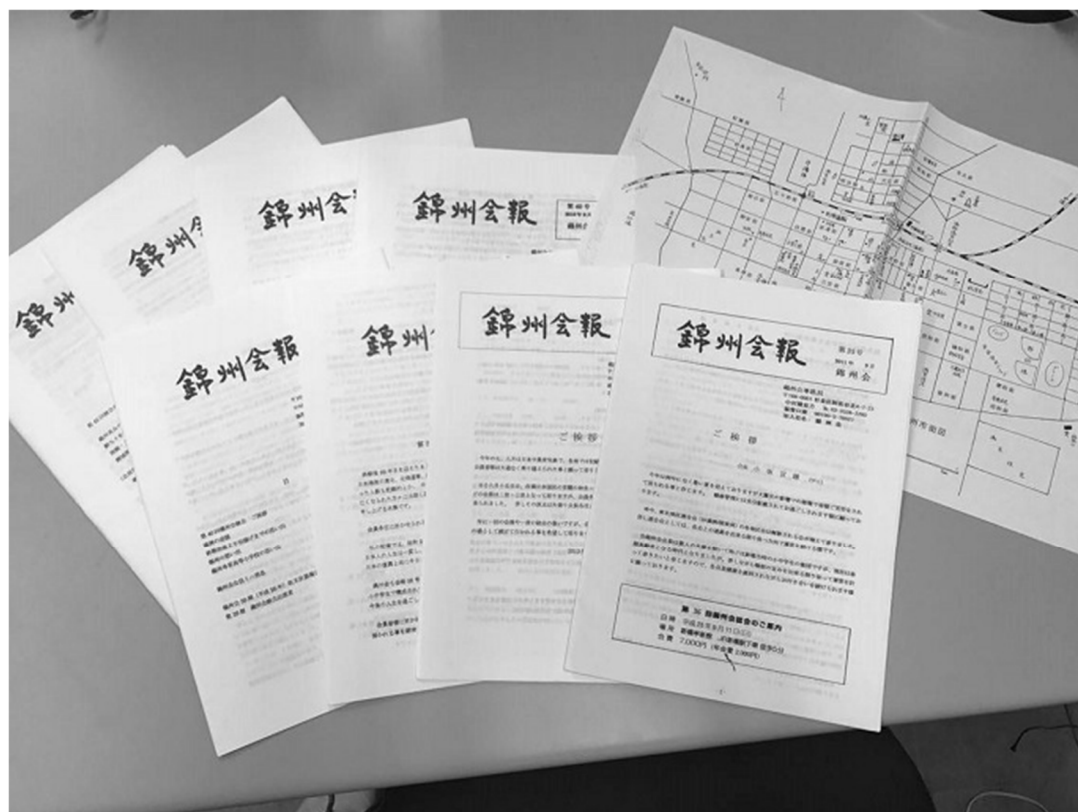
本回想録は、執筆者本人である宣雄氏



第42回錦州会総会・懇親会の様子

撮影者：大野絢也

撮影日：2017年9月10日



錦州会からご寄贈いただいた『錦州会報』と錦州のタウンマップ
(錦州会会員の菊池陽子氏より)



『遙かなる追憶の街へ』私家版、2012年
(錦州会会員の佐藤治子氏より)

によって2017年11月に提供された。その経緯は、以下の通りである。

本研究会の大野絢也は、2017年9月10日に開催された第42回錦州会総会・懇親会に参加させていただいた。その際に、錦州会の会長を務めていた宣雄氏の知遇を得ることができた。宣雄氏より本研究会の活動についてのご理解を賜り、懇親会時に史資料提供のお願いを案内していただいた。また、錦州会の会報上で本研究会の活動を紹介記事として掲載していただくなど、さまざまな面でお力添えを

いただいた。そのため、錦州会会員の方々から本研究会に対し、『錦州会報』やタウンマップ、私家版の回想録など多数の史資料をご提供いただくきっかけとなった。宣雄氏は、自らの満洲経験を今後の研究に活用して欲しいという思いから、執筆した回想録を本研究会へご提供してくださり、本号掲載へと至ったのである。

2. 小坂宣雄氏の満洲経験

それでは、宣雄氏とその家族の略歴を以下で紹介する。

宣雄氏の父親である辻繫氏（以下、繫氏）は、石川県金沢市の出身であり、石川県立金沢師範学校を卒業して、石川県内の小学校教諭を勤めていた。1926年に大連での学校教諭募集を知って応募、採用されたため喜善氏（宣雄氏の生母）をともなって、渡満した。同年には、兄の治雄氏が生まれている。大連では日本人向けの小学校ではなく、現地中国人向けの小学校で勤めていた。

宣雄氏は、1931年6月11日に大連において出生した。宣雄氏の出生後、喜善氏は病気で亡くなったため、大連で看護婦として働いていた小坂浜子氏（コサカハマコ、宣雄氏の養母、以下、浜子氏）と再婚した。そのため、宣雄氏の出生時の姓は辻であったが、浜子氏の家の姓をとって小坂となった。これは、浜子氏の実家において小坂姓を継ぐことのできる者がいなかったため、繫氏が婿入りするか

たちをとった。

1936年に繫氏は錦州省錦県の県公署へ赴任し、教育関係の行政職として勤めることとなった。満洲国の成立により満洲でも日本人教員や教育関係の要員の需要



浦頭引揚記念平和公園を訪問する宣雄氏

撮影時期：1997年8月

（『錦州会報』22号、1998年）

が高まっていたことや、繫氏が現地中国人向け学校で教諭として勤めていたこともあり、満洲国内への赴任を打診されたという。こうした経緯により、宣雄氏も6歳から錦州で少年時代を過ごすこととなった。

1945年8月の日本敗戦によって、他の満洲各地と同様に錦州の情勢は大きく変化した。錦州は終戦直後から比較的早く国共両軍の戦闘が始まったため、日本人居留民は大きく動揺した。日本人と中国人の間で立場が変わってしまったため、中国共産党軍と中国国民党軍の双方から「扱き使われる」ような状態となり、宣雄氏も惨めな思いをしたのが今でも印象に残っているという。また、繫氏は戦中に役所で教育関係の行政担当者であったため、戦後は民間人でありながら拘留対象者となった。

1946年5月、繫氏は拘留中であり、治雄氏は出征後フィリピンで戦死していたため、浜子氏、宣雄氏、弟の守雄氏（モリオ）の3人で日本へ引揚げた。錦州は葫蘆島から距離的に近かったため、比較的早い引揚げであったとされる。引揚げ船は佐世保の浦頭港で上陸し、1週間ほど針尾島で過ごした後、引揚げ列車で東京へ向かった⁽¹⁾。福島県にあった浜子氏の姉の家をしばらく頼った後、浜子氏の姪の伝手によって、横浜の引揚者向け住宅に居住した。一方の繫氏は、最終的に戦時期の行動について問題視されなかったことから、先に引揚げた家族から3年遅れの

1949年に、引揚げることができたという。その後の小坂一家は、一時的に静岡県御殿場へ移住した時期もあったものの、宣雄氏は現在も神奈川県内に在住されている⁽²⁾。

3. 錦州会の概要

錦州会は、日本敗戦直後に錦州において組織された錦州日本人居留民会を前身としている。その組織を引揚げ後も継承するかたちで錦州会が発足した。この時点では、満蒙同胞援護会傘下の地域代表組織として戦後処理に対応した。1974年頃、引揚げ援護や戦後補償の活動が一段

錦会報 第12号 昭和62年12月 錦 会	
事務局： 東京都港区西新橋1-12-1 第1ビル405（〒105） キリン食品社内 電話：03-502-3891 振替口座：東京 9-76527 錦州会	
目 次	
挨拶	会長 森山 誠之 1
第12回総会報告	 3
第12回決算報告書	 4
錦 州 新 片	吉野 敏夫 5
錦会報と満蒙の回想	吉野 嘉市 8
民衆運動の手紙	 8
錦市瑞雲楼人民園遊子さん一時帰国	 9
会員への消息	 9
会 員 募 集	 12
計 報	 13
錦州中国人労働者名訂正	 13
特 報：ノ連地域等拘留者に慰労品の贈呈等	 13
錦州関係従軍慰労品名簿	 14
あ と が き	 15

錦会時代の『錦会報』表紙



錦州会友好訪中団の錦州訪問
 撮影日：1992年6月15～18日
 (村尾美智子「我的故郷錦州」
 『錦州会報』17号、1993年)

落し、一般の会員を擁することのできる体制として、正式に錦州会が発足したとされる⁽³⁾。しかし、すでに1950年代より錦州省の警察関係引揚者による錦州警友会が同じ「錦州会」へと改称していたことが判明した。そのため、1988年までは名称の重複を避け、錦会という名称で活動していた。錦州警友会を母体とする錦州会は、錦州からの引揚者救済や情報交換といった活動に消極的であったため、錦会が実質的な錦州の引揚者団体として



文化交流により錦州会へ送られた掛軸
 撮影者：大野絢也
 撮影日：2017年9月10日



錦州高女正面玄関での記念撮影
 撮影日：1992年6月15～18日
 (村尾美智子「我的故郷錦州」
 『錦州会報』17号、1993年)



錦州会広済寺塔維修竣工訪問団の記念撮影

撮影日：1996年10月18日

(「広済寺古塔修復竣工式典について」『錦州会報』21号、1997年)

機能することになったという複雑な遍歴がある⁽⁴⁾。

錦会は、1979年には錦州一帯の「終戦記録」として『最後の満洲——錦州終戦前後』を刊行している⁽⁵⁾。また、国際善隣協会や東北地区連合会とも連携し、残留日本人孤児探しの活動にも関わっており、錦州出身孤児の情報交換の場ともなっていた⁽⁶⁾。

また、1980年代より複数回にわたって中国訪問旅行を行っていた。現地の錦州市政府を通じて、「友好訪中団」や「広済

寺塔維修竣工訪問団」というかたちで盛んに交流を展開していた⁽⁷⁾。日中国交正常化後のこうした錦州会による日中の民間交流については、『錦州会報』上に多数の記事があり、今後機会があれば紹介したい。

おわりに

本稿では、宣雄氏によって提供された回想録「錦州と旅順の思い出」の背景となる宣雄氏の満洲経験および錦州会の概

要について紹介した。錦州会の会員の方々から寄贈された『錦州会報』や他の史資料も大変貴重なものである。それらについても今後、会報の記事目録作成や整理作業、電子化などを逐次進めていきたい。また、会報については欠号があるため、引き続きその部分を所有している方がいないか、情報収集を行っていく予定である。

「錦州と旅順の思い出」は、錦州からの引揚者 2 世である宣雄氏の少年時代を回顧したものである。そのため、当時少年期を満洲で過ごした方々の代表的な記憶像の内容も含まれており、このような記憶をたどられた方は少なくない。また、当時家族とともに行った旅順旅行の記憶や、当時の現地中国人との交流についても触れられている。このような回想録は、日本の敗戦直後から国共両軍の軍事的衝突が激しく展開されたという当時の錦州を生きた人々の記憶を知る上で、参考になるものである。他の回想録や関連資料と対照しながら検討することで、より多様な満洲像を解明することにつながるといえよう。

最後になるが、小坂宣雄氏には錦州会の内部で史資料や情報の提供などと呼びかけていただき、また満洲経験の回想録を本研究会にご提供いただいた。ここに衷心の謝意を示したい。また、錦州会の会員の方々からも多くのお力添えをいただき、錦州や満洲に関連する数多くの関

連資料を提供していただいた。特に菊池暘子氏には、複数回にわたって錦州会に関する情報や史資料に関する連絡をくださった。『錦州会報』など貴重な史資料についても、本研究会への提供についてご厚遇いただいている。ここに記して感謝の意を表したい。

脚注

(1) 小坂宣雄「引揚第一歩の地『佐世保』訪問記」『錦州会報』22 号、1998 年。

(2) 小坂宣雄氏とその家族の略歴については、宣雄氏本人からご提供いただいた情報をもとに、まとめたものである。

(3) 森山誠之「第 12 回総会あいさつ」『錦会報』12 号、1987 年。

(4) 1988 年 9 月 18 日に開催された錦州会第 13 回総会で「錦会」から「錦州会」に名称が変更された。会報名も『錦会報』から『錦州会報』に変更となっている（森山誠之「第 13 回総会あいさつ」『錦州会報』13 号、1988 年）。

(5) 品川安衛編『最後の満洲——錦州終戦前後』錦州会、1979 年。

(6) 会報上では、残留日本人孤児の名前や情報を一覧で掲載し、会員に対して情報提供を呼びかけていた（「錦州関係残留日本人孤児」『錦会報』8 号、1983 年）。

(7) 錦州会会員の間では、錦州へ訪問することを「訪錦」と表現していた（志村忠一「第二次訪錦感想」『錦会報』8 号、1983 年）。

凡例

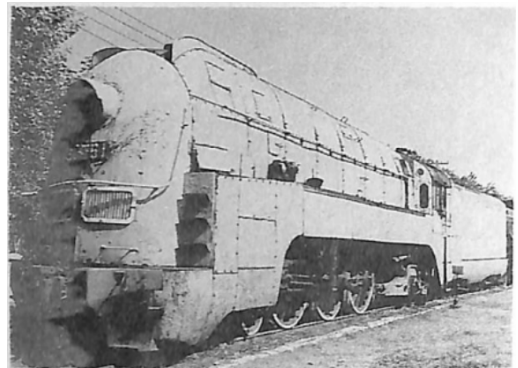
- ・旧字体や異体字は常用漢字、旧仮名使いは現代仮名使いに変換した。
- ・本史料の史料としての性質を考え、固有名詞や名称の揺れなど、各表現は原文のまま掲載した。
- ・各段落の最初は、1文字を空けて編集した。
- ・「旅順旅行の思い出」と「中国人（旧満人）との交流の思い出」の2篇のタイトルは、見出し形式とした。

本文

旅順旅行の思い出

私は大連生まれ、数え年6歳から錦州育ちの少年でした。1941年春に父が県公署（県庁）から市公署（市役所）へ転勤したので、その年の4月中の何日かを利用して大連、旅順旅行をした記憶と、2001年に、ニューヨークでツイン・ビルが過激派が乗っ取った旅客機で破壊された年の秋に貿易関連団体が企画した大連、旅順旅行を懐かしく思い出しました。

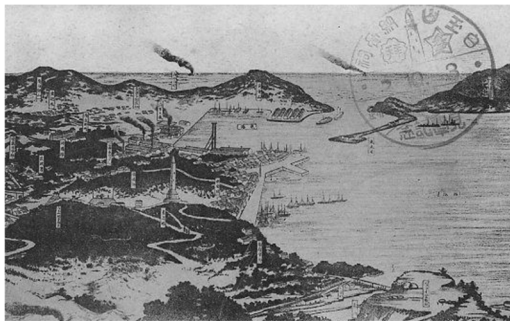
昭和16年（1941年）の家族旅行は奉天より“あじあ号”で大連迄の旅を経験しました。当時の錦州からの奉山線（ほうざん線）の急行列車に比べて、スピードの速さ、揺れの少なさに、日本の技術のレベルの高さを実感しました。大連では従姉家族と父の友人宅を訪問し翌日、旅・大北路（だと思ひますが）で旅順に向か



あじあ号「パシナ」型機関車



旅順白玉山旧市街より白玉山を望む



旅順港全景



旅順二百三高地 乃木保典君戦死の場所

い白玉山の多分官吏（公務員）用のホテルに到着し、近くの博物館で初めてミイラを見た事を覚えています。

翌日、4月29日は天皇誕生日、快晴で白玉山から見下ろす旅順港には停泊している満艦飾を掲げた軍艦が強く印象に残っています。

その後、日・露戦跡巡りのツアーは、はげ山で塹壕跡の残っている、乃木大将の息子が戦死した二百三高地、多くの白樺隊員が戦死した鶏冠山北堡壘、日・露の両将軍が会見した水師営が、今でも強く印象に残っています。日・露両軍の将校が夫々軍刀を纏っての記念写真に写って

いるのと、北堡壘では戦死したロシア軍将軍の記念碑に、戦った両国の軍人が如何に“人間”としてお互いを尊重した時代であったかと感じたのも、その翌年、昭和17年（1942年）2月にシンガポールを占領した時の山下将軍とイギリス軍パーシバル将軍との降伏会見の雰囲気の違いに違和感を感じた事も記憶に残っています。

大連への帰路は、旅・大南路、丁度、桜並木の満開時期で、初めて“桜花見”を満喫しました。錦州では杏子の花を桜の代わりに見ていましたので。

2001年の大連、旅順と北京旅行は当初



東鶏冠山北堡壘

ロシア軍コンドラチェンコ少将の墓碑



旅順の桜



水師営会見所



水師営会見を語る榎の名木



乃木ステッセル両将軍の会見

春に企画されていましたが、旅行社のチョンボでおじゃんになり、秋に再企画されました。

併し、ニューヨークでのビル破壊の影響で、実際の参加者は、企画をした責任者と私達夫婦の三人だけの旅行でした。そのお陰で私にとっては、大連、旅順旅行は私本位のツアーとなり、私の思い出の場所巡りとなりました。

旅順では戦前のツアーと異なり、中国軍施設に関連する地区は行けませんでした。二百三高地は樹木に覆われていたのには驚きました。鶏冠山北堡壘は、ほぼ同じ様な佇まいでしたし、水師営も外觀は殆ど変わりがなく、ガイドの説明は通り一片の説明でしたが、私にとっては“水師営”の唱歌を口ずさみながら、昔の思い出に浸る事が出来ました。唱歌、水師営の歌詞は、

“旅順開城約なりて、敵の將軍ステッセル、乃木大将との会見の、処は何処（いずこ）水師営、庭に一本（ひともと）榎（なつめ）の樹、弾丸跡も著るく（いちじるく）崩れ残れる民億に、今ぞ、相見る二將軍。（以下省略）“

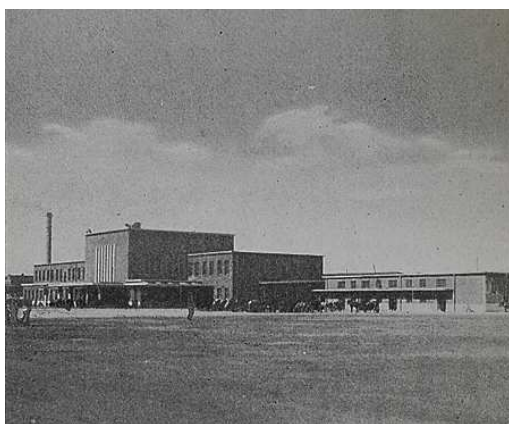
懐かしく思い出すのは私だけでしょうか？

中国人（旧満人）との交流の思い出

1945 年、終戦直後、ソ連軍が撤退後、中共軍（現在の中国軍）統治下の錦州地区も、アメリカ軍に支援された国府軍に代わり統治され、年末には錦州に行政府が設置された時、旧満人に加えて日本人の少年も、民族融和の目的で、雑用係として採用するとの事で、同期の八田君と応募し採用されました。

旧満人少年達と 10 人程、事務所の片隅で“ざこ寝”、朝には部屋の掃除から、職員の三度の食事当番、後片付けの作業でした。一人の“とっぽい”旧満人少年が机を拭く作業担当でしたが、きちんと拭き掃除をせずに“チャランポラン”と机の間を鼻歌交じりに動いていたのが、後程出勤して来た職員に“机が汚れたままになっている”と指摘され驚いた事に、床掃除をしていた私を机当番と申し立てられ、私は抗弁しなかった為、叱られた次第でした。併し早めに出勤していた別の職員が、後程責任者に事実を伝えたとの事でその少年も私も、特に後のお咎めはなく、その少年は真面目に作業する様になった様でした。

共産軍が北へ退くに従って 3 月初めに行政府は奉天（現在のシンヨウ）に移動する事になり、私も同行する事になりました。あの少年はその後同僚として何か併し二か月程後に、錦州からの引き揚げが、五月から始まる事となった時、あの



錦州駅の様子



錦州市街



奉天駅駅舎

少年は奉天駅迄付き添って呉れ、錦州迄と私の事に気を使って呉れて居りました。の切符の手配、見送り迄して呉れました。

行政府の職員や旧満人の同僚達も人種の隔てなく僅かの期間でしたが、一緒に生活を共にした事を、今、懐かしく思い出しました。

2017年10月28日



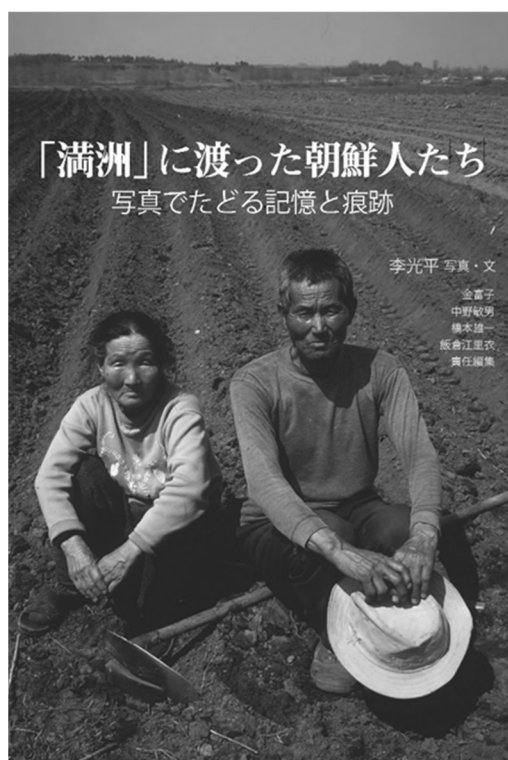
1937年の錦州市街図
(萩原隆「錦州時代回想記」『錦州会報』23号、1999年)

文献紹介

李光平(写真・文)、金富子・中野敏男・橋本雄一・飯倉江里衣(責任編集)

『「満洲」に渡った朝鮮人たち——写真でたどる記憶と痕跡』

飯倉江里衣



本書の表紙

本書は、主に 1930 年代後半から 1940 年代前半にかけて、朝鮮半島から「満洲

国」間島省（現在の吉林省延辺朝鮮族自治州とほぼ重なる）に移住した朝鮮人集団農業移民（現在は中国朝鮮族として中国で暮らす）の植民地下の記憶と現在の「生」の姿を記録したドキュメンタリー写真集である。彼・彼女らの話を聞き、その姿を撮影したのは中国朝鮮族で延辺朝鮮族自治州龍井市在住のドキュメンタリー写真家・李光平（リ・グァンピョン）氏である。

日本人満洲移民が「出会うことのなかった」朝鮮人集団農業移民

日本ではこれまで日本人満洲移民についての研究が活発に行われてきた。「満蒙開拓を語りつぐ会」による『下伊那のなかの満洲』（全 10 巻＋別冊、2003～2012 年）など、日本人満洲移民への聞き取りを収録した証言集も刊行されている。本誌『満洲の記憶』でもこれまで断片的で

はあるが、日本人満洲移民の現地での生活や引揚げの記録を掲載してきた。本研究会からは今年4月に、日本人引揚者団体が戦後発行した会報を分析した佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲の記憶』（東方書店、2020年）を刊行している。私たちはそうした多くの研究や証言集などから、日本人満洲移民の歴史や現地での生活の一端、戦後の記憶などを知ることができる。しかし、本書に登場するのは、そうした日本人満洲移民が当時おそらく「出会うことのなかった」人々であり、日本人満洲移民が決して経験することのなかった、もしくは想像することさえなかった歴史を持つ人々でもある。

1930年代の満洲では、日本の満洲侵略・支配に抵抗する抗日武装闘争が各地の山間部を中心に激しく行われた。なかでも日本軍および満洲国軍（日本の傀儡軍隊として1932年に創設）⁽¹⁾が悩まされていたのが、中国共産党指導下で闘争を行う東北抗日聯軍（前身は東北人民革命軍）であった。朝鮮総督府と関東軍は1937年から1940年代前半にかけて、朝鮮半島（特に南部の農村地域）から政策的に朝鮮人集団農業移民を送り出すことを決定した。この政策により朝鮮人集団農業移民たちの多くは、東北抗日聯軍の中でも特に多くの朝鮮人隊員が活動する間島省の辺鄙な荒れ地に連れて来られた。朝鮮人たちはそこで自力で荒れ地を耕し、家を建てなければならなかった。また、

日本の「治安」政策による「集団部落」建設のため、自分たちで集落の周りに土塁や堀などを作らなければならなかった。厳格な通行規制のもと、許可なしに「集団部落」外へ出ることは禁じられ、外部との接触も制限された。「集団部落」の門には歩哨を立てて監視させ、内部には自衛団と呼ばれる朝鮮人青年による自衛組織を作り、東北抗日聯軍がやってきた際には盾となって戦うことも強いられた。

日本の政策によって朝鮮半島から連れて来られ、日本および「満洲国」の軍隊・警察と東北抗日聯軍との戦闘が日常的に繰り広げられる危険な地域に暮らさなければならなかった朝鮮人移民がいたことを、当時や戦後を生きた日本人はどれだけ知っていたのだろうか。そして、現在私たちは彼・彼女らの歴史をどれだけ知っているだろうか⁽²⁾。本書の写真に写るハルモニやハラボジ（朝鮮語で親しみを込めて「おばあさん」「おじいさん」の意）の深い皺が刻まれたその表情から、私たちは何を感じ、読み取ることができるだろうか。

本書に映し出される多様な朝鮮人満洲移民の姿・記憶

本書の写真に映し出されているのは、日本の植民地支配に対する単純な恨みや悲しみだけではない。「離郷の民」としての故郷への想い、朝鮮で使っていた物から見えてくる故郷との繋がり、「異郷の地」

でゼロから築いた田畑や藁屋、朝鮮の農楽を演奏して踊り楽しむ姿…。しかし、人々の表情や物、風景は、植民地支配によって故郷から引き離されてしまったという事実を静かに語ってもいる。

また、彼・彼女らは実際に当時の様々な記憶を語った。その多くは、1930年代後半から1940年代前半にまだ少年・少女であった子どもの記憶であるが、衝撃的で忘れられない記憶であった。飢えや病気などで幼い兄弟姉妹を亡くした記憶、飼っている豚を日本軍に奪われた記憶、満鮮拓殖株式会社の日本人に騙された記憶、日本の官憲に協力して村人を虐待・殺害した朝鮮人警察官についての記憶、「土匪」から暴行を受けた記憶、幼い子どもとして東北抗日聯軍を見た時の恐怖・好奇心が入り混じった記憶、東北抗日聯軍に食事や情報を提供したり物を運んだり協力した周りの大人や両親の記憶、東北抗日聯軍の「抗日宣伝」に感化されて泣いた記憶…。こうした記憶は、日本人移民が決して経験することのなかった、被支配民族ならではのものである。

当然ながら、被支配民族として受けた日本の政策や官憲による暴力の記憶も多く語られる。警察に殴られながら土塁を作った記憶、過酷で暴力的な軍事訓練を受けさせられた記憶、日本軍によって村人や東北抗日聯軍兵士が拷問・虐殺されるのを見た記憶、家族や親戚が日本の警察に拘留・殴打・殺害された記憶、日本軍兵士としてソ連軍の戦車部隊に突っ込ん

で亡くなった兄の記憶、日本軍「慰安婦」として性暴力を受けた記憶…。

そのほか、光復（日本敗戦）後の国共内戦や朝鮮戦争への従軍経験、文革時の経験なども断片的に語られる。こうした彼・彼女らの過去の経験は、それを現在語る彼・彼女らの老いた姿——過酷な「集団部落」建設によって痛めた体を抱えながら生きる姿であったり、過去の性暴力被害の経験ゆえに見知らぬ相手に警戒心を向ける姿であったり、朝鮮の文化を守り続ける姿であったりする——とともに理解し、彼・彼女らが生き抜いてきた強さとあわせて私たちが記憶すべきものである。

本書における朝鮮人満洲移民の記憶や「生」の姿が私たちに問いかけるものは何か。それは、彼・彼女らの日常や人生そのものが日本の朝鮮・満洲支配という大きな構造に翻弄されてしまったという、植民地支配の「生き証人」としての痕跡ではなかろうか。中国在住の少数民族という以上に、「離郷の民」としての複雑な想いや歴史がそこには存在する。こうした「離郷の民」としての中国朝鮮族の朝鮮人集団移農業民の固有な経験に耳を澄まし、その記憶と「生」の姿を深く心に刻むことで、私たちは改めて満洲とは何だったのかということをとらえ直すことができるのではないだろうか。

なお、本書は第1部が写真と証言を記録したオーラルヒストリー・ノート、第2部はその背景として歴史的事実や生活の

実情を理解するための論考という2部構成になっている。特に、第2部では中国朝鮮族移民史研究の第一人者でもある、中国の延辺大学教授・孫春日（ソン・チュニル）氏による貴重な論考も収録した。ぜひお手に取っていただきたい。

（世織書房、2019年6月、全175頁、2,400円+税）。

脚注

（1）満洲国軍については代表的な研究として、及川琢英『帝国日本の大陸政策と満洲国軍』（吉川弘文館、2019年）などを参照されたい。

（2）日本における代表的な朝鮮人満洲移民研究としては、金永哲『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』（昭和堂、2012年）と朴敬玉『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』（御茶の水書房、2015年）などがある。

寄贈資料目録

本目録には、2019年8月1日から2020年7月31日までに本研究会に寄贈していただいた資料を掲載しました。他にも貸与していただいた資料や写真、ハガキ、書簡、切抜も多くありますが、紙幅の関係上ここでは省略させていただきます。また、多数の資料を提供していただいた方の資料名は一部のみ（5冊まで）紹介させていただいております。

本研究会では皆様からいただいた資料をより多くの方々にご利用していただ

るように整理・保管し、ニューズレター発行の機会などを通じて順次公開していく予定であります。

本研究会に貴重な資料を寄贈・貸与していただいた方々には、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。また、今後とも継続して資料の収集を行っていく所存ですので、御理解・御協力の程よろしくお願い申し上げます。

(50音順)

梅沢順子氏

・錦州高女同窓会編『錦園——創立 50 周年記念号』錦州高等女学校同窓会、1984 年

・安東会編『ありなれ』第 62 号、安東会本部、2018 年

・錦州会編『錦州会報』第 43 号、錦州会事務局、2019 年

・満鉄会『満鉄会報』第 251 号、満鉄会情報センター、2016 年

大野正夫氏

・大野正夫『大地の伝言——満州・戦争孤児との約束 増田昭一の生涯』夢工房、2019 年

片寄浩紀氏

・片寄浩紀『人歩み、路を成す——私見～日中の軌跡と展望』図書出版、2005 年

栗原照久氏

・西木暉『満州への旅』東アジアの平和を考える会（冊子）、2018 年

・西木暉「あとがき」（原稿）2019 年

恵雅堂

・哈爾濱学院同窓会会報『アヴローラ (ABPOPA)』第 40 号、2020 年

佐々木寛氏

・佐々木寛「引揚げまでのいきさつ」（原稿）2019 年

菅原勝詔氏

・菅原勝詔『生きとし生けるもの——忘れ路の山河・望郷遥かなり』趣味人倶楽部（私家版）、2019年

故鈴木一男氏

・『海拉爾覚書』1-2、4-7、9巻（書類ファイル）
・鈴木一松『第8国境守備隊』（書類ファイル）
・『草原の子供達・幻の故郷海拉爾へ』（書類ファイル）
・『第八国境守備隊第一地区隊——工兵隊』（書類ファイル）
・第二中隊戦友会誌編集委員会『わが心のハイラル安保山——元満州国興安北省海拉爾第八国境守備隊第一地区隊歩兵隊第二中隊戦友会誌』第二中隊戦友会、1993年
・他多数の「ハイラル覚書関連資料」ファイル、書籍あり

竹内實昭氏

・『朝日旧友会報』第238号、朝日旧友会、2020年

茶野トミ子氏

・斎藤満男『私の満洲物語』白凰社、1979年

橋村武司氏

・橋村武司『幻の残留日誌（夢幻的残留日記）——中国に渡った1943年から帰国

するまでの10年間』（私家版）2019年

蓮見俊夫氏

・小林弘二『満州移民の村——信州泰阜村の昭和史』筑摩書房、1977年
・山本慈昭編『戦争は未だ終わらない——中国残留孤児肉親探し記録』日中友好手をつなぐ会、1978年

萩原隆氏

・萩原隆「満州 錦州（県）時代回想記——錦州会報掲載記録集」（複写）、1999年
・萩原隆「追加参考図」（複写）、2019年

門伝富美氏

・門伝富美「語り部用」（原稿）、2019年
・「後藤新平クロニクル」拓殖大学（冊子）、2019年

矢澤範子氏

・矢澤範子「六才われ鉄格子奥父の声」（複写）、2015年
・「錦州市中心地営業案内図」（複写）1939年
・錦州会事務局『錦州会報』第42号、2018年

諸住昌弘氏

・諸住昌弘『旧満州に消えた父の姿を追って——昭和の記憶』梓書院、2019年

（文責：大野絢也）

2019 年度（2019 年 8 月～2020 年 7 月）

「満洲の記憶」研究会活動記録

本活動記録には、2019年8月1日から2020年7月31日までに「満洲の記憶」研究会で行った活動について、一覧形式で掲載しました。

本研究会では会の発足以来、引揚者団体の会合への参加、インタビュー、面会訪問、資料調査・整理、講演会や春季・秋季大会の開催など、様々な活動を展開してまいりました。特に、皆様からいただいた情報提供をもとに、全国各地での調査活動を展開できております。これまで本研

究会に手紙やメール、電話などで「満洲の記憶」に関する情報をお知らせしていただいた方々には、この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

また、今後も継続して国内外を問わず様々な活動を行っていく所存です。引き続き皆様の御理解・御協力をいただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

（時系列順）

2019 年 8 月 17 日 中国遼寧省錦州市調査 参加者：大野絢也

2019 年 8 月 19 日 中国河北省承德市調査 参加者：大野（絢）

2019 年 8 月 31 日 満洲事変軍馬戦没歿之碑訪問（宮城県仙台市） 参加者：大野（絢）

2019 年 9 月 29 日 一橋大学 戦没学友の碑訪問（東京都国立市） 参加者：大野（絢）

2019 年 10 月 18 日 令和元年度第 60 回 公主嶺会大会（東京都台東区） 参加者：

甲賀真広

2019 年 10 月 30 日 公主嶺会事務局長土屋洸子氏宅訪問 参加者：大石茜、大野（絢）、甲賀

2019 年 10 月 30 日 古海建一氏宅訪問 参加者：大野（絢）、甲賀、森巧

2019 年 11 月 7 日 細谷和子氏との面会 参加者：甲賀

2019 年 11 月 21 日 古海建一氏宅訪問 参加者：大野（絢）

2019 年 11 月 24 日 2019 年度講演会（第 50 回一橋祭）「戦後日本の満洲記憶——

- 引揚者に聞く」 参加者：飯倉江里衣、尹国花、梅村卓、大石、大野(絢)、菅野智博、甲賀、佐藤量、佐藤仁史、朴敬玉、森、林志宏
- 2019年11月25日 令和元年度第64回安東会大会(東京都千代田区) 参加者：甲賀
- 2019年11月26日 満洲国吉林省防疫所関係者加藤仁紀氏からの資料提供(東京都国立市) 参加者：大野(絢)
- 2019年12月11日 門田春子氏宅訪問 参加者：大野(絢)、甲賀
- 2019年12月18日 中村淑子氏宅訪問 参加者：甲賀
- 2020年1月15日 門田春子氏宅訪問 参加者：大野(絢)、甲賀
- 2020年1月18日 古海建一氏宅訪問 参加者：大野(絢)
- 2020年2月22日 第4回企画運営委員会、2019年度秋季大会(一橋大学国立東キャンパス開催) 参加者：飯倉、今井就稔、尹、梅村、大野(絢)、菅野、甲賀、佐藤(仁)、朴、森
- 2020年2月28日 加藤仁紀氏との面会(東京都国立市) 参加者：大野(絢)
- 2020年3月21日 満洲電業留魂碑訪問(静岡県熱海市) 参加者：大野(絢)
- 2020年3月22日 松岡洋右別邸、松岡別邸陶磁器館(静岡県御殿場市)訪問 参加者：大野(絢)
- 2020年3月22日 満鉄留魂碑(静岡県御殿場市)訪問 参加者：大野(絢)
- 2020年6月11日 南満洲ガス株式会社関係者遺族関係者奥村武彦氏、上田裕子氏との面会(東京都新宿区) 参加者：菅野、甲賀
- 2019年7月7日 錦州会関係者小坂宣雄氏への聞き取り(電話) 参加者：大野(絢)
- 2019年7月7日 錦州会関係者菊池暘子氏への聞き取り(電話) 参加者：大野(絢)
- (文責：森巧)

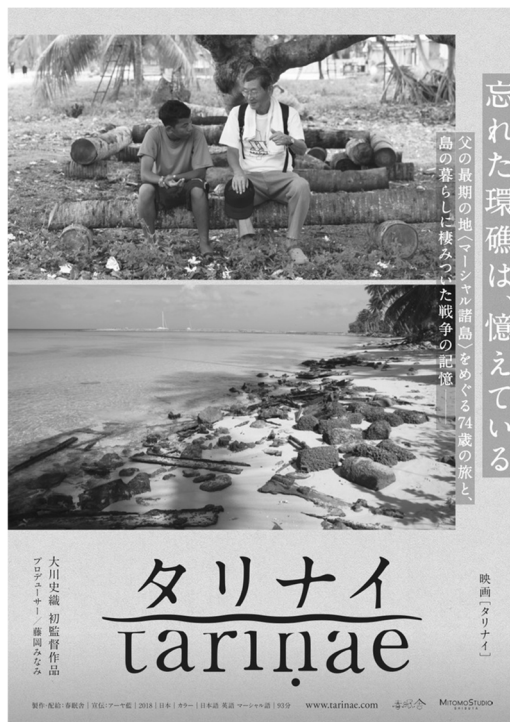
2019 年度秋季大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2020 年 2 月 22 日に研究報告の場として、2019 年度秋季大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、映画監督である大川史織氏を招き、ドキュメンタリー映画『タリナイ』及びその中で取り扱われた佐藤富五郎日記を翻刻、解説した書籍『マーシャル、父の戦場——ある日本兵の日記

をめぐる歴史実践』（みずき書林）についてお話しいただいた。そのほか、佐藤富五郎日記』の翻刻作業に携わった本研究会の森巧から当該日記の意義について報告した。当大会では約 40 名の方々に参加していただき、多くの示唆に富むコメントがあり、意義深い討論が行われるなど、所期の目的を達成できた。

大川史織（映画『タリナイ』監督・国立公文書館アジア歴史資料センター調査員（非常勤職員））「佐藤富五郎日記を翻刻して——映画と書籍ができるまで」
森巧（一橋大学大学院社会学研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC2）
「佐藤富五郎日記の意義」

森報告では、初めに近代の日本、中国、韓国などでの歴史研究における日記の取扱について紹介し、その上で佐藤富五郎日記の意義について簡単に述べた。大川報告では、佐藤富五郎日記の翻刻事例を中心に、2018 年に公開したドキュメンタリー映画『タリナイ』の制作および同年に出版した書籍『マーシャル、父の戦場——ある日本兵の日記をめぐる歴史実践



ドキュメンタリー映画『タリナイ』

2018 年 9 月 29 日 劇場公開

』(みずき書林)刊行過程を発表した。戦地で亡くなる直前まで綴った日記が、戦後富五郎氏の遺言どおり家族に届くまでの奇跡と軌跡。唯一の形見である父の日記をご子息の佐藤勉氏が全文読みたいと想いを募らせ、長年続けた努力と行動は、さまざまな運と縁を手繰り寄せた。

70年前「南洋は満州より近い」といわれていた。筆者と同じくマーシャルに想いを馳せる佐藤勉氏と出会い、多くの協力者に恵まれ、映画と書籍は誕生した。それぞれのメディアの特性を活かし、姉妹編として編むことで、すっかり遠くなってしまった南洋マーシャルを再び近く感じられることを目指した。

1906年宮城県亘理町生まれの佐藤富五郎氏は、1943年4月に充員召集を受け、海軍第64警備隊が防備するマーシャルのウォッチェ環礁へ配属された。アジア太平洋戦争において、マーシャルでは約2万人の日本兵が命を落とした。敗戦までの1年9ヶ月、補給路を絶たれ、餓えとの闘いを強いられたウォッチェ環礁では、約4000人の兵士が自給自足を強いられた。1945年4月、飢えで亡くなる数時間前まで富五郎氏は日記と遺書を2冊の手帳に細かく記した。39歳の生涯であった。第64警備隊日誌の一部や生還者の回顧録としての手記は公開されているが、戦時下のウォッチェ環礁で一兵士が日常を綴った克明な記録は、富五郎氏の日記以外に確認されていない。

映画は2015年に筆者が勉氏と出会い、

2016年4月慰霊の旅に同行、撮影した映像を元に約1年かけて高校の同級生である藤岡みなみプロデューサーと制作した。

書籍は筆者が2016年11月に国立公文書館アジア歴史資料センターの調査員となり、報告者の森巧氏が職場の同僚となったことに端を発する。映画『タリナイ』試写版を森氏が鑑賞し、筆者が映画の編集と同時に富五郎日記の翻刻を手探りで進めていることを知った森氏は、自身が所属する『満洲の記憶』研究会の日記翻刻を参考史料として筆者に紹介した。筆者は森氏に背中を押され、自力で全文翻刻を仕上げることに挑み、2017年5月完成した全文翻刻を森氏に見せたところ、富五郎日記の史料価値は非常に高く、歴史研究者の力を借りることで精度が高い翻刻が可能になると助言を受け、専門の研究が多岐にわたる同僚らに協力を依頼した。その日は金曜日であったことから、翻刻チーム「金曜調査会」を結成。当初は論文集への寄稿を検討していたが、出版企画書を書いたら1社目で出版が決まり、それから1年、全242ページにわたる富五郎日記を10名の力を借りて解読を進めた。肉眼では読みづらく、判読が困難と諦めかけていた文字は、国立民俗歴史博物館教授の三上喜孝先生の協力によって赤外線ビデオカメラで解読した。日記のまわりにインタビュー、論考、エッセイなど多様な補助線を配し、日記翻刻過程も含めて読者が歴史実践できることを心がけた。

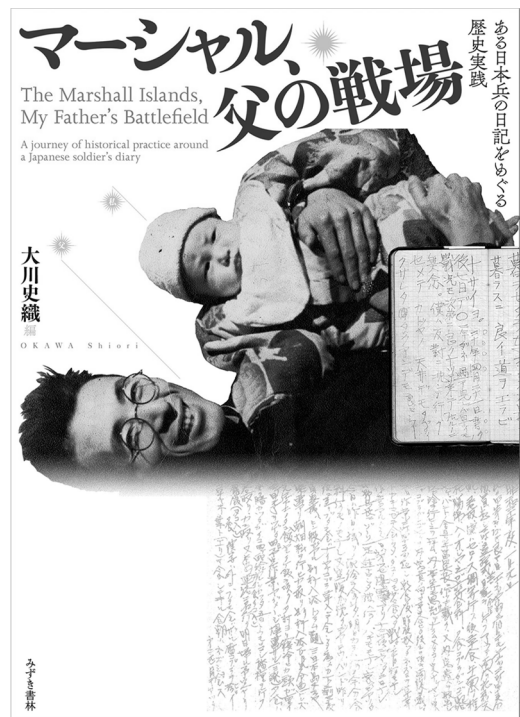
1944 年 10 月 1 日の富五郎日記には、爆撃で壊滅した本隊農園を開墾して高粱（コーリャン）を植え付け、5 日後の 10 月 6 日に芽が出たと記されている。高粱は、マーシャルに自生する植物ではない。戦時下の満洲国奉天から南洋マーシャルのウォッチェ環礁にわたり、のちに生還者が「命の高粱」と呼んだ驚くべき逸話がある。

1943 年 4 月、満鉄職員の北原百次郎にも充員召集の令状が届いた。百次郎氏は、大和区雪見町の満鉄社宅で妻と 3 人の子供と暮らしていた。富五郎氏と百次郎氏の共通点は、海軍歴があり、農家出身だが長男ではなく、3 人の子供の父であり、家族を想う気持ちを日記や手紙に認めていた点にある。

1943 年 7 月 10 日、ふたりは「冲鷹」に乗船し、横須賀を発った。秋になり、百次郎氏の妻は、配給として配られた高粱の種を慰問袋に入れて送った。マーシャルの制空海権が奪われ、補給路が断たれる直前であった。1944 年 9 月、百次郎氏は空襲で直撃弾を受け 33 歳で命を落とした。亡くなるまでの約 1 年半、37 通の手紙が軍事郵便で奉天とマーシャルを行き交った。百次郎氏が亡くなる直前に蒔いた高粱の実は、マーシャルで実をつけ、飢えゆく兵士の命を救ったことを妻は戦

後生還者から耳にしたと書き遺している。

2018 年冬、筆者は第 64 警備隊作成の「功績整理簿」功績特殊事項欄に「高粱ノ種子ヲ本島に伝ヒ」と百次郎氏の「功績」が記されていることを防衛省の公開史料で発見した。海軍の用箋に書かれたその小さな文字を見つめながら、「ガ死ダ食モノナシ」と富五郎氏が鉛筆書きをペンでなぞり、斜めに強く記した文字が浮かんでいた。



大川史織編『マーシャル、父の戦場——ある日本兵の日記をめぐる歴史実践』（みずき書林、2018 年）

2020 年度春季大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2020 年 8 月 22 日に研究報告の場として、2020 年度春季大会をオンライン（ウェブ会議システム zoom）形式で開催した。今回は、第 1 報告として山崎哲氏を迎え、研究報告「中国残留の記憶と継承——中国帰国者三世を中心に」をしていただいた。続けて、第

2 報告として辛孟軻氏に論文集『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020 年）について書評していただいた。

当大会ではオンライン上であったのにもかかわらず、約 30 名の方々に参加していただいた。参加者の間で様々な議論が展開され、所期の目的を達成できた。

第 1 報告

山崎 哲（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC2）「中国残留の記憶と継承——中国帰国者三世を中心に」

本報告では、中国帰国者三世が現代日本社会において可視化されにくい存在となっていること、また、一世（祖母・祖父）の持つ中国残留の記憶が継承されることの困難について検討を行った。

中国帰国者とは、第二次世界大戦末期の満洲における混乱ののち、日本へ引揚げることができず、中国に残ることになった日本人のうち、日本へ永住帰国した中国残留孤児・婦人等とその家族を指す総称である。中国帰国者三世とは、中国残留孤児・婦人等の孫である人々をいう。

一世は祖国への帰還という文脈において、1980 年代以降、ひろくマスコミに取り上げられ国民の耳目を集めた。また、二世については中国から日本へ移住してのちに日本語習得の壁にぶつかったことや、いじめ問題に直面したことなどが学術研究等で知られている。だが三世について、一般に知られる、または、学術研究で見られる三世像から漏れ落ちる三世の存在を、自身も三世当事者である報告者は指摘した。

先行研究では、中国から日本へ移住し教科学習に難儀するといったような三世の姿が主に議論されてきたが、報告者の聞き取り調査においては、このようなイメージでは捉えきれない三世の存在を確認することができる。では、これら三世

の多様性はいかにして生じているのか。一世二世がいつ帰国したのか（残留孤児と残留婦人というカテゴリーによる帰国時期の幅）、一世二世が帰国/移住後どこに居住したか（中国帰国者コミュニティはあったのか否か、それに接してきたか否か）を手がかりにし、これら要素から、先行研究では掴みづらい三世のあり方を三世らの語りを用いて議論を行った。

第2 報告

辛孟軻（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）「書評——佐藤量、菅野智博、湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』」

本書は「満洲の記憶」研究会による共同研究であり、職業や社会的立場などによって異なる満洲経験を持つ引揚者に着目し、それぞれの満洲記憶の表象を解明した。特に戦後日本社会における引揚者のイメージが単純化されて語られる傾向に対する反省的なまなざしは本書の特色であると考えられる。

本書は三部から構成されている。第Ⅰ部「闘う記憶」では、戦後日本社会において引揚者が展開した「恩給請願運動」という背景の下で、満鉄会（大野絢也）・満洲興農合作社同人会（湯川真樹江）・蘭星会（飯倉江里衣）が取り上げられ、それぞれ現実的な需要に応じて再構築された満洲に関する集合的記憶の表象が描かれる。

そして、一世の中国残留という記憶継承が三世当事者にとって難しくなっている現状にあると指摘された。社会・家庭からの忘却、中国帰国者というカテゴリーの今日的な有効性の低下などが要因として挙げられる。日本における満洲記憶や戦争記憶の忘却は、中国帰国者家庭においても進行していることが確認できる。



佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年4月刊行／A5判368頁／本体5,000円＋税 ISBN：978-4-497-22004-2

第Ⅱ部「葛藤する記憶」では、世代交代が留意されながら、安東会（菅野智博）・大連引揚者二世（佐藤仁史）・青少年義勇軍（大石茜）という例が取り上げられて郷愁やアイデンティティをめぐる満洲記憶の表象が議論される。第Ⅲ部「周縁の記憶」では、ジェンダーとエスニシティの視角を含め、都市の女学生（佐藤量）・満洲から引揚げた台湾人（林志宏）・中国帰国者（森巧）のようなあまり触れられていない周縁者の記憶が考察される。他に、コラムでは国境を跨いだ人々の記憶（尹国花）、満蒙開拓団農民の満洲経験（本島和人）、自分史の編纂（安岡健一）、日本人牧師の家庭史（甲賀真広）、メディア関係者の視点（安藤恭子）について言及している。

本書には、以下のような3つの意義があると考えられる。第一に、引揚者個人や集団の満洲に関する記憶及びその戦後生活を一貫して考察することで、ミクロな視角から引揚者内部における記憶の多様性を解明した。第二に、戦後日本社会における満洲記憶が構築・再構築された過程を解明し、特に「被害の語り」という一面的なナラティブを打破し、「加害者」と「被害者」という相反する身分を持つ人々の記憶のありようを明らかにした。第三に、大量の会報を掘り起こして、これまで比

較的に弱かった政治・経済・社会環境との連鎖の分析を豊富なものとした。

本書において評者が課題と捉えたのは、以下のような2点が挙げられる。第一に、第Ⅲ部を「周縁」と分類しているが、あるグループを「周縁」にあると判断する基準はどこにあるか、という点である。例えば、教育を受けた都市女性を「周縁」グループと見なすことは可能であるのか。また、引揚者を「中心」と「周縁」という視点から見れば、それぞれの満洲記憶にどのような異なる点があるのか。上記の点から、引揚者の記憶の全体像を描く上で何か注意すべき点はあるのか、という課題は引き続き存在している。第二に、玉野井麻利子（*Memory Maps: The State and Manchuria in Postwar Japan*, Honolulu: University of Hawaii Press, 2009）は、引揚列車の旅のような「memory industry」が、ノスタルジアという名義で帝国日本の過去を忘れさせるという、満洲記憶に対する改造であったと指摘した。即ち、引揚者の満洲記憶の一部は戦後日本社会によって忘却されたが、戦後の国民記憶の再建に吸収された部分もあったのである。この再建過程から見る満洲記憶のありようを研究することは可能なのであろうか、という点は今後も重要であろう。

おしらせ

資料提供のお願い

「満洲の記憶」研究会では、満洲に関する資料を収集しております。「寄贈資料目録」に示したように、これまでに書籍や会誌、写真、ハガキ、書簡など多数の資料を寄贈・貸与していただきました。これらの資料は満洲の記憶を継承する上で極めて貴重な資料であると考えております。

ご提供いただきました資料は本研究会が整理・管理し、学術研究において活用いたします。資料の公開方法は、資料目録を作成して本ニューズレターに掲載させるという形式を採ります。提供資料に

含まれる個人情報等には深甚な配慮をいたします。

また、お手持ちの資料には、貴重なもの、思い出の強い品でお手元に置いておかれたいものなどもありのと思います。資料のご提供ではなくとも、本研究会の編集委員メンバーによって複写・撮影等をさせていただくという方法もございます。そのような希望がありましたら、ご相談いただければと存じます。ぜひ情報を本研究会までお寄せくださいますよう、ご協力お願いいたします。

カンパのお願い

「満洲の記憶」研究会では、継続して皆様からのカンパを募っております。本研究会は若手研究者・大学院生が中心となって運営しているため、これまで編集委員の寄付によって活動を続けてまいりました。

しかし、活動範囲が海外および日本全国に拡がり、予想以上に多くの資料が集まったことにより、資料調査や整理・電子化などに使用する資金が慢性的に不足する状況となっております。そのため研究活動の資金使用のみに限定した口座を

開設し、研究会の活動に御賛同いただける方から、御支援を賜りたく存じます。カンパは1口1,000円で、文末に記載している銀行口座へお振込いただけたら幸いです。

なお、御支援をいただいた方には、ニューズレター内にてお名前を掲載し、御支援いただいたことを皆様に紹介させていただく予定です（お名前の掲載を希望されない方は事前に御連絡ください。そのように対応いたします）。また、カンパしてくださった方は、必ず本研究会宛

にメールまたはお手紙で御連絡ください。

研究会としても誠実かつ積極的に活動をしてまいりますので、御支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

「満洲の記憶」研究会銀行口座

銀行：三井住友銀行

支店：国立支店（店番号：666）

種類：普通預金

口座番号：8088124

口座名：菅野智博（カンノ トモヒロ）

会員募集及び情報配信のおしらせ

本研究会は随時会員を募集しています。年会費は無料となっております。会員には、ニューズレター及びイベント情報の配信を行います。入会希望者は次の連絡先まで御連絡ください。

ブログ：<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

Facebook：「満洲の記憶」研究会

<https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>

新聞での本研究会活動紹介

本年度は、「満洲の記憶」研究会の活動について、多数の新聞で紹介していただきました。以下、掲載された記事を時系列順で一覧にして紹介させていただきます。

2019年11月10日版『東京新聞』

「追憶の旧満州光と影受け継ぐ——一橋大で24日若手研究者グループがシンポジ引き揚げ者らと対話『体験者複雑な思い今なお』」

2019年11月25日版『読売新聞』

「満州引き揚げ体験語る——一橋大で空襲や内戦生々しく」

2020年5月9日版『東京新聞』

2020年5月10日版『中日新聞』

吉田裕（評者）「植民地体験忘却の歴史明らかに」

2020年6月2日版『信濃毎日新聞』

畑谷史代（評者）「満州の『忘却』にあらがう——加害と被害を内在戦争知る手掛かり 引き揚げ者『会報』を分析若手研究者が論文集」

2020年7月24日版『週刊読書人』

加藤聖文「意識の外に消える帝国の遺児——満洲引揚げ者が書き残した記録の意味を問う」

《满洲记忆》（“满洲记忆”研究会通讯）第7期

中文目录

满洲瓦斯株式会社人事课长的满洲记忆：对奥村松平《洪熙の残照》的解说

..... 菅野智博、甲贺真广

《洪熙の残照》（1） 作者：奥村松平

整理・编辑：奥村武彦、上田裕子、甲贺真广、今井就稔

在锦州和旅顺的回忆 作者：小坂宣雄

解题：大野绚也

编辑：尹国花

文献介绍《“满洲”に渡った朝鮮人たち：写真でたどる记忆と痕迹》

..... 饭仓江里衣

寄赠资料目录

2019 年度“满洲记忆”研究会的活动记录

2019 年度“满洲记忆”研究会秋季大会报告提要

2020 年度“满洲记忆”研究会春季大会报告提要

会务公告

Memories of Manchuria (Newsletter of the Society for “Memories of Manchuria”)
No. 7

Contents

A Manchurian Reminiscence of a personnel manager Manchuria Gas Company,
Ltd.: from OKUMURA Matsuhei’s “Afterglow in Hong Xi street”

..... KANNO Tomohiro, KOGA Masahiro

“Afterglow in Hong Xi street” part 1

..... OKUMURA Matsuhei, OKUMURA Takehiko,
UEDA Yuko, KOGA Masahiro, IMAI Narumi

Memory of Jinzhou and Lüshun

..... KOSAKA Nobuo, OHNO Junya, YIN Guohua

New Arrivals “Koreans Who Crossed to Colonial Manchuria: Memories and Traces
in Portrait Photographs”

..... IIKURA Erii

List of Donated Materials

Chronology of the Society for “Memories of Manchuria” Activities

Summary Report of the Autumn 2019 Meeting

Summary Report of the Spring 2020 Meeting

Notice

編集後記

今年度も多くの方々のお力添えをいただき、『満洲の記憶』第7号の刊行に至ることができました。本号は、史料紹介1編、引揚者の回想録2編、文献紹介1編で構成されています。奥村松平氏による「洪熙の残照」は、従来、実態が解明されてこなかった満洲瓦斯についての精緻な内容の回顧録となっています。重厚かつ詳細な内容であるため、分割形式で掲載することとしました。また、小坂宣雄氏による「錦州と旅順の思い出」は、小坂氏の少年時代の記憶を回想したもので、本誌初めての錦州に関する寄稿文となっています。

本研究会の活動に目を向けますと、今年度における最も大きな成果は、論文集『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020年4月）の刊行が挙げられます。2013年7月の研究会設立から7年近くを経て、ようやく纏まった研究成果を示すことができました。論文集の刊行後には、多くの方々から反響をいただいております。この場を借りて謝意を申し上げます。

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年3月以降は予定していた調査を延期するなど本研究会の活動も大きく制約を受けました。しかし、そのような中でも2020年度春季大会をオンラインで開催し、コロナ禍によってもたらされた事態に対応した研究会活動を進めています。今後もオンラインを有効に活用しつつ、さらに研究を深化させたく存じます。（大野絢也）

『満洲の記憶』 第7号

発行日：2020年12月31日

編集：「満洲の記憶」研究会編集委員会

第7号編集委員：

今井就稔 尹国花

大石茜 大野絢也

郭嘉輝 菅野智博

甲賀真広 佐藤仁史

佐藤量 森 巧

湯川真樹江 林志宏

発行：「満洲の記憶」研究会

〒186-8601 東京都国立市中2-1

一橋大学大学院社会学研究科

佐藤仁史研究室 気付

Tel・Fax：0420-580-8885

◇本誌は年刊オンラインジャーナルで、毎年9月に刊行されます。本会学年暦は、毎年8月1日から次年7月31日です。

◇本誌は一橋大学機関リポジトリにおいて配付しています。

<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095>

◇「満洲の記憶」研究会へのアクセス

・研究会 ブログ：

<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

・研究会 Facebook：

<https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>